人外魔境戦記譚

天城蒼古

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人外魔境戦記譚

【Ｎコード】
Ｎ４２９９Ｖ

【作者名】
天城蒼古

【あらすじ】
最終戦争によって荒廃した世界から異界の大陸へと流れ着いた、帝国陸軍少将榊蓮。だが、その世界において、ヒトは絶対の支配者たる魔族の奴隷や家畜として扱われていた。
蓮は圧政を敷く魔族の軍勢を相手取り、人々を率いて戦争を開始する。悪鬼はびこる人外魔境の地にて、今、戦乱の火蓋が切られた――
ＳＦ対ファンタジーをテーマに描いた架空戦記です。現在、第三章掲載中。

登場人物紹介簡易版（前書き）

簡単な登場人物紹介です。
ネタバレは少ないですが、嫌な人は回避推奨

登場人物紹介簡易版

『第一章』

榊蓮
主人公。ＳＦ側の主人公に当たる。
黒髪黒目の長身でカーキ色の軍服と軍帽がトレードマーク。
体内を色々といじくっており身体能力が高く、頭も切れる。性格はやや冷酷。
年齢は１３０歳。ただし老化抑制を受けているため、見た目は２０代前半ほど。

ベルナット・クーガ
ワトソン的相棒ポジション。ファンタジー側の主人公でもある。
金髪金眼の長身。頭に月桂冠を被っている。
指揮官としての実力は蓮に及ばないがある種のカリスマ性を持つ。
性格は温和。
年齢は２１歳。解放軍のリーダーを務める。

ルシュア・ロット
解放軍の一員。ベルナットの副官。
金髪碧眼の女性。美女だが性格は男勝り。
年齢は１９歳。大人の女性と少女の中間の位置。

ディーノ
解放軍の一員。やせぎすの男。
狡猾で打算に長ける。

ライゼル

解放軍の一員。禿頭の大男。
見た目はいかついが実際には気が弱い。

スクローファ
獣人種『巨亥の一族』の族長。
二足歩行のイノシシ。短気で激昂しやすい性格。

『第二章』

如月
黒い肌の巨馬。種族は馬ではなく魔獣の一種であるナイトメア。
本来ナイトメアは人に懐かないのだが、大荒原で命を救われて以降、蓮の乗馬となっている。
名前の由来はかつて蓮が艦長を務めていた地上戦艦『如月』。

要氷堂
元の世界において榊蓮の副官だった男。後に解放軍にも参加。
黒髪黒目。童顔に眼鏡をかけているのが特徴。蓮と違って帽子は被っていない。
実戦よりデスクワークが得意で、不精な性格の蓮を補佐していた。

レオパルト
魔人種『錬鋼の一族』の族長。大王ベルヴェルクの手足である四軍将の一人。
田園都市オプティアの統監であり、レギオニール地方北部を管理する。
見た目は豹面の兜を被った板金鎧。身長は２ｍ以上。腕力も高い。
また、自らの半身たる武器として長剣スティンガーを持つ。

ゲパルト

魔人種『錬鋼の一族』の副長。
レオパルトの補佐を務める。口癖は「は……」

ニュート
獣人種『赤守の一族』の族長。
赤い肌をした二足歩行のイモリ。鉱山都市テッセラリウスの統監兼守備隊長。
どちらかといえば頭脳派で、戦闘力は低め。同族の副長にマダラとハナダがいる。

ライム
魔人種『氷雪姫の一族』の族長。紆余曲折を経て解放軍に参加。
青い髪に青い瞳。学士風の姿をした若い女性。魔族であり、体温は人間よりも低い。
元々は賢者の国ケントリオンの出身で、錬鋼の一族に対しては恨みを抱いている。

プロローグ？

北アフリカ戦線と呼ばれるエジプト『カイロ要塞』の地下作戦司令室から、男はナイル川流域の氾濫原を眺めていた。

正確に言うと、男が眺めているのはナイル川ではなく、かつてナイル川と呼ばれていた場所だ。

太古の昔、人類が興ったとされる場所も、今は氷土に覆われた死の土地と化している。

舞い上がる灰塵。凍った大気。太陽の見えない仄暗い空。

それらはこの世界にとって最早、馴染みとなった光景だった。

「……まるで地獄だな」

思わず、率直な感想が漏れた。

作戦司令室の高台に置かれた椅子に座っているのは、背の高い、筋肉質な体を持つ男だ。

幾つもの勲章が縫い込まれたカーキ色の軍服を身に纏い、その上からは厚手の外套を羽織り、黒鞘に収められた軍刀を帯びている。

目深に被った帽子の下から見えるのは針金染みた黒髪と、薄暗い色をした切れ長の瞳。

掘りの深い顔立ちは二十代前半ほどだろうか。怜悧ながらもどこか冷たく、亡霊のような印象を受ける風貌だった。

――帝国陸軍少将、榊蓮（さかきれん）。

アフリカ方面軍において総司令を務める百戦錬磨の古兵である。

「失礼します」

ふいにかすかな排気音と共に、作戦司令室のスライドドアが開く。

ドアの向こうから現れたのは線の細い、童顔の男だ。視力を簡単に回復できるこの時代には珍しく、フレームの細い眼鏡をかけている。

「司令、部隊の脱出が完了しました」

「ああ、御苦労だった。ところで一人逃げ忘れている奴がいるよう

だが？」

「気のせいでしょう」

あっさり言い放って、男はそこが定位置であるかのように蓮の隣に立った。

「それに、まだ最後の仕事が残っています。司令にこの基地の自爆シークエンスを任せるのは自分としても不安ですから」

「だが、氷堂。お前にも家族が――」

「いませんよ。恋人も子供も両親もね。残っているのは機械音痴の上官だけです」

「ああ、そうだったか。すまんな」

悪びれもなく答えて、蓮は口元にうっすらと笑みを浮かべる。

要氷堂（かなめひょうどう）は長年、彼の隣で副官を務めている男だ。

突出した能力がないながらも優秀な軍人であり、蓮にとっては最も気心の知れた戦友でもある。

「ここも寂しくなったものですね」

がらんどうの司令室を見回した氷堂は、ぽつりと呟く。

前線における兵甲の大半が無人化されたとはいえ、本来この地下作戦司令室には多くの人員が詰め掛けているはずだった。

にも関わらず、広大な室内にはほとんど人の姿がない。どころか、基地に務める兵士は既に高速地上艇で外部に脱出している。

そのため、現在この司令室に残っているのは蓮と氷堂の二人だけだ。

彼らには最後の仕事――この要塞を敵軍もろとも爆破するという役目が残っている。

「司令。正直、自分はこの命令に納得が行きませんよ」氷堂はおもむろに口を開いた。

「仮に、我々が刀折れ矢尽きた状態だというのならまだ納得も行きましょう。しかし、この基地は司令がいる限り安泰です。おまけに、つい先刻までここにはまだ十分な兵力が残っていた。……全く、私には上の意向がさっぱり分かりません」

「そう言うな。多分、連中はここいらで有利な条件のまま停戦協定を結びたいのだろう」
「停戦協定ですか？」
「ああ。帝国議会が停戦を推し進めようとする背後には、国内の厭戦感情がある。今まで議会は国民に対して攻撃されつつあると言い、平和主義者を愛国心に欠けていると非難し、国を危険にさらしていると主張してきた。だが、そんなペテンがいつまでも罷り通るはずもないのさ。――いや、まぁ百年近くも罷り通ってしまった後で、こんな台詞を言うのもなんなんだがな」
「……そんな簡単に終わりますかね、この戦争が」
この、全世界を巻き込んだ大戦は百年以上もの長きに渡っている。その間、停戦の噂が流れ、噂だけで潰えてしまったことも一度や二度ではない。
氷堂が疑心に満ちた言葉も漏らしてしまうのも無理はなかった。
「共和国の連中も嫌がる国民の尻を鞭でぶっ叩くことに必死だ。この上、ハンニバルの機甲師団を失えば、あの石頭どもも停戦に応じざるを得なくなるだろう。
――氷堂、戦争は終わるさ。この戦いを最後にな」
希望的観測とも取れる蓮の言葉に、氷堂は「は……」と短い首肯を返す。
司令部に設置された通信機が鳴り響いたのは丁度その時だ。蓮は怪訝そうに眉を寄せた。
「帝都からの通信か？」
「はい。……って、これ皇室専用の直通回線ですよ！？」
驚愕の声に蓮の表情が固まる。どこか悪戯を発見された少年のようだ。
「大本営の連中め、片手落ちだな。まさか、陛下に情報が漏れてしまうとは」
「司令、文句は後でいいですから早く通信に出て下さい」
「……ああ」

頷いた蓮は、それでも数秒ほどぐずぐずと時間を浪費させた後で、ようやく覚悟を決めて司令席の手すりにあるボタンを押した。

直後、彼の眼前に投影される青白いホログラム。十分の一ほどに縮尺された姿で映し出されたのは、歳の頃十五、六ほどの軍服を着た若い少女だ。

強い意志を宿した瞳に、凛とした顔立ち。全身に漂う張り詰めた雰囲気からは頑固そうな性格が伺える。

身長は１７０ｃｍほどとやや高く、濡れ羽色の髪を後ろで一本に縛っていた。

『サカキ！　まだ、そこにいますか！』

「これは陛下、お久しぶりです」

どこか気だるげに敬礼を返す蓮に、少女はたちまち眉を吊り上げた。

『「お久しぶりです」……ではありません！　もっと他に言うことがあるでしょう！』

「そうですね。陛下はまた可愛らしくなられた。大本営の連中を説き伏せ、この戦時下でありながら良政を敷いているという噂はこちらにも聞こえてきます。尽善尽美とはこのことだ」

『あ、ありがとうございます。……って、そんな話はどうでもいいんです！』

頬を染めつつ激昂するという器用なことをしながら、少女は言葉を続けた。

彼女はこう見えて、帝国軍の最高権力者――すなわち、皇帝である。

実権は大本営に奪われているものの名目上は全軍の長。つまりは蓮の上官だった。

とはいえ、蓮が彼女の教師を務めていた時期があったため二人の仲はそれなりに親しい。

上司と部下というよりはむしろ、兄と妹のような関係だ。

『大本営での決定をつい先ほど私も耳にしました！　サカキ、あな

たは破棄されるカイロ要塞にただ一人残るつもりですね！』
「ええ、なにしろ後始末の人員が必要ですから。ただ、自分だけでなく優秀な副官も残っていますよ」
『要さんもそこにいるんですか？』ぱちくり目を瞬かせる少女。
「はい。なにやら恋人にふられて、生きる意味を見失ったようで」
「司令、勝手に嘘を吹きこまないでください」
迷惑そうな副官の声を、蓮は空気の如く無視した。
「まぁ、なんというか、陛下の心配するようなことはなに一つありません。ただ、我々はもう帝都に帰還できませんから、後のことはよろしくお願いします」
『好き勝手言わないでください！　どうして、そんなにあっさり自分の命を諦めるんですか！』
「軍人はただ、命令に従うだけです。いや、この言い方は少し卑怯ですね。正直なところ、自分はもうこの灰色の世界を見るのに疲れたんです」
本心から言って、蓮は司令室のモニターに映る氷の大地へと視線を向ける。
蓮が生まれた頃、世界はまだ死の灰に包まれていなかった。しかし、核の飛び交う大戦争がこの星を煉獄さながらの光景へと変えてしまったのだ。
そして、日ごとに荒廃して行く世界を蓮はずっと見続けて来た。
老化抑制を受けた肉体が朽ちることのない心臓を歯車代わりに動き続けていたとしても、彼の精神はとうの昔に擦り切れている。
『サカキ、あなたは……』
少女がなにか呟きかけた直後、薄暗い闇の中に瞬く光があった。
「氷堂、敵軍が動き始めたのか？」
「そのようですね。レーダーに反応あり。敵、機甲師団。前進を開始しました」
「よし。自動迎撃システムを稼働させろ。わざわざ連中にここが空き家だと知らせてやる必要はないからな」

「了解です」
氷堂が操作パネルを叩き始めたのを見て、蓮は再び少女のホログラムへと向き直る。
「申し訳ありません、陛下。あまりお話している時間もないようです」
『待って。一つだけ聞かせて下さい。もう私が止めても無駄なんですか？』
「はい。例え陛下の御命令であろうとも、自分はここで連中を道連れに玉砕する覚悟です。後の世界が争いのない、平和な代物となるよう祈っております」
『サカキ……』
ぐっと言葉に詰まりながらも、少女は真正面から死地へと向かう男を見た。
『サカキ、私、あなたのことを忘れません』
「忘れて下さい。死んだ人間のことなど記憶していたところで、陛下がお辛いだけだ」
『いいえ、決して忘れません。約束します。絶対に、死ぬまで、あなたの名を、顔を、手の平の温かさを、覚え続けていると』
「……相変わらず、頑固な方ですね。一体、誰に似たのやら」
『私は親を知りませんから、きっと恩師に似たのではないでしょうか』
「いやまったく、そいつの顔が見てみたいものですな」
冗談混じりの言葉に、少女はくすりと微笑む。
それを見て、蓮の心中に言いようのない罪悪感が沸き上がってきた。
長い間、妹のように思っていた少女を一人この世界に残さなくてはならない。
その事実が今更になって、蓮の胸に重くのしかかってくる。
「では、陛下。御達者で」
それでも、感傷を喉の奥に押し込み、蓮は帽子を目深に被り直し

た。

『……はい。サカキ、あなたも』

ぷつり、と。

そう返す少女の表情を見ぬまま、通信は途切れた。

プロローグ？

「……」

しばし、黙祷にも似た沈黙があった。

それを破ったのは、役目を終えたはずの通信機だ。

『あー、テス……テス……おい、聞こえてるか、サカキ』

ふいにハスキーな男の声が室内に響き、蓮は目をすがめた。

「その声、ハンニバル・バルカか」

今回の通信は声だけで、先ほどのように立体ホログラムが映し出されていない。

それでも、蓮は相手の名と姿をはっきり脳裏に描くことが出来た。

共和国陸軍少将。アフリカ戦線司令。通称『雷神』ハンニバル。

帝国軍側の司令である蓮と、一進一退の激戦を繰り広げている宿敵である。

「で、共和国の東征将軍が直々に何のつもりだ？」

『つれんな。反抗期か？』

「御託はいい。さっさと用件を話せ」

『相変わらずの早漏だな。稀代の守将も一皮剥けばこれなのだから困る』

と、これ見よがしに漏らされるため息。

蓮は無言で通信機のスイッチへと手を伸ばした。

「切るぞ、ハンニバル」

『おい、待て。本題はこれから――』

バチンッ。無情にも音声は途切れ、無言の沈黙だけが司令室に満ちる。

「良かったんですか、司令」

「どうせろくな話ではあるまい」

そう言って冷たく切り捨てた直後、要塞全体を突然の震動が襲った。

司令部まで響く轟音に蓮は眉を寄せ、氷堂は慌てて戦況を示すモニターを確認する。
「氷堂、敵の総攻撃が始まったのか？」
「い、いえ、砲撃は一発だけです。どうやら、要塞前面第六ブロック上部に敵ユリウス級陸上戦艦の主砲が直撃したようでして」
「……あの阿呆が。やり方がたちの悪いセールスマンと変わらんな」
呆れたように呟き、蓮は通信機を再び起動させた。
「ハンニバル、我が家の玄関に随分と乱暴な真似をしてくれたものだ」
『少将、おれはおたくのドアをノックしただけだぜ』
「ノックは二回だ、将軍」
『それは失敬』
ドンッ！　ドンッ！
「第五、第八ブロックに敵弾直撃！」
「くそったれが」蓮は音を立てて舌打ちした。
「なぁ、雷神殿。いい加減、我が家に入ってきてはどうだ？　こちらは迎えの準備をしたまま待ちぼうけを食らっているのだが」
『ははは、嘘はよせ嘘は。お前が予備兵力はおろか主力まで退却させたことは、おれとてとうに気づいている』
「なんのことかな？」
『誤魔化さずともいい。大方、その要塞と引き換えにおれの機甲師団を道連れにするつもりなのだろう。自らの命も顧みずにな。お前にそれほどの愛国心があったとは驚きだ』
「貴様の妄言が真実だと仮定して、わざわざこちらに通信を入れてきた理由はなんだ？　手向けの言葉でも送るつもりか？」
『まさか。おれはただ、一つだけ提案をしに来てやっただけさ』
ハンニバルはふいに真剣な口調で言った。
『なぁ、サカキ。お前はここで死なすには惜しい男だ。ここで玉砕などせず、おれの下につかないか？』
「冗談だろう。今さら投降しろと？」

『違う。部下になれといっているんだ。勿論、身柄をどうこうするつもりはない。お前の優秀な副官の命も保証しよう』
ハンニバルは自信に満ちた声で、淀みなく言葉を続けた。
蓮はなんとなしに頭の片隅で、その提案を計慮する。
罠の可能性を無視すれば、良い――いや、むしろ破格の条件だ。
それに、蓮はここエジプトでハンニバルと長期に渡って交戦を繰り広げた経験がある。
だから、この男が直情的で、奸計を用いることを嫌う性格だということも知っていた。
「司令、ハンニバル将軍は本気なんでしょうか」
「恐らくな」
不安げな副官の声に蓮は無表情のまま頷く。
元々、ハンニバルには敵の将校を自陣に引き抜きたがるという悪癖があった。
現に彼のせいで帝国から共和国へと離反させられた指揮官も、一人や二人ではない。
蓮自身、何度か勧誘を受けていたものの、その答えは常に同じだ。
「ハンニバル、悪いが俺も陛下に槍を向けることだけは出来ん。お前の提案は辞退させて貰おう」
『フ、身持ちの堅い男だ。それでは女も寄りつかんだろう』
「余計な御世話だ。話はそれだけか？」
『ああ、他に言うべきことはない。後は存分に戦場で語り合おう』
気障ったらしい台詞と共に通信は終わった。
蓮はなにか形容しがたい疲労を感じ、司令席の背もたれに体を預ける。
「なんというか、相変わらず奇抜な方ですね」
「全くだ。あれで百年に一人の天才だというのだから信じられん」
ふう、と蓮がため息を漏らしたところで、再度要塞全体が轟音と共に揺るいだ。
「始まったか」

「はい。今度は全力で来ています。一応、こちらも迎撃を出しましたが……」
「防衛機構の稼働率は最低レベル。敵の先鋒を叩ければ恩の字というところだな」
本来、カイロ要塞の迎撃システムは多くの人員を用いて管制する形で用いられる代物だ。
無人装置に任せて運用することも可能だが、それで本来の性能を発揮できるはずもない。
既に作戦司令室の中央モニターには、氷土を踏破してくる無人戦車部隊と、その後方に展開した複数の陸上戦艦が映っていた。
「やれやれ、ハンニバル御自慢の機甲師団もこれで見納めとは」
「突撃して来る両脚機動戦車部隊（バイペダルバンツァー）の数は全体の２０％ほどですね。こちらの思惑が見切られてしまっているためでしょうか」
「ま、当然か。一応、敵をギリギリまで引きつけろ。この際、要塞地上部の損害は気にせずとも構わん」
「了解です。せいぜい派手な花火を打ち上げてやるとしましょう」
にっと笑みを浮かべて、氷堂は軽快にコンソールのパネルに指を滑らせた。
既に帝国側の部隊は全て脱出しており、迎撃システムの管制すらままならぬ状態だ。
にも関わらず、そびえ立つカイロ要塞はそれから三度に渡り敵の進軍を跳ね返した。
そして、四度目。業を煮やしたハンニバルが戦車部隊の半数を突撃させたところで、ようやく要塞の防衛網は沈黙する。
これにより地上に露出したブロックは完全に破壊され、地下にある作戦司令室もほとんど機器類が停止していた。
「……そろそろ、頃合いか」
鳴り響く警報の中。真っ赤な非常灯に照らされたまま、蓮は天井を見上げる。
衝撃は断続的に司令室を襲い、その度にパラパラと埃が彼の頭上

に落ちていた。既に敵部隊がすぐ近くまで迫っているのだ。
「敵、戦車部隊は要塞内部に侵入。真っ直ぐ司令室へと向かって来ています。到達までは後十分ほどです」
「よし、いいタイミングだ。こちらの準備も今、終わった」
高台の前方に設置された操作盤の前で、蓮は小さく口元をつり上げる。
敵の進軍が始まってからというものの、蓮は迎撃システムの管理を副官に任せ、自らは自爆シークエンスのための準備（といってもプログラムを起動させた後、指紋と音声の認証をしただけだが）を行っていたのだ。
残る最終工程――自爆キーの承認を行えば、この基地は跡形もなく吹っ飛ぶこととなる。
「そういえば、氷堂。俺も長年生きてきたが、自分の手で基地を爆破させる経験は初めてだよ」
「とちるような要素はありませんからね？　ここまで来て失敗しないで下さいよ？」
「誰にものを言っている。どうせ、後は鍵を突っ込むだけの簡単な作業だ」
言って、蓮は懐から取り出した銀色のカードキーを自信満々にスリットへ挿入した。
たちまち、音調を変える警報。甲高い悲鳴にも似た音に混じって、ガイダンスの機械音声が二人の耳に届く。
『プロテクト解除キーを承認しました。最終安全装置解放。【神風】起動を開始します。総員、速やかに基地から半径１０ｋｍ圏外まで退避して下さい。繰り返します――』
蓮と氷堂は顔を見合わせた。
「司令、なんかコレ自爆装置じゃないっぽいんですが」
「……俺のせいか？」
「恐らく。と言いたいところですが、違いますね。どうやら自爆シークエンスを行った際に、別のプログラムが起動するようデータが

書き換えられていたようです」
あっさり言い放って、氷堂は向き直った電子パネルに軽く指を滑らせる。
眼鏡越しの瞳がモニターを這い、次の瞬間、その顔色がさぁっと蒼白に変じた。
「こ、これはまさか空間座標転送装置!?　なんでこんな物が要塞の中に!」
「空間座標?　要するにテレポート装置か。だが、あれはまだ実用化の目途が立ってなかったはずだが」
「そんな可愛らしいものじゃありませんよ!　この装置の通称は次元核――効果範囲内にある全ての物体を圧縮して異空間までふっ飛ばすっていう、中性子爆弾より危険な代物です!」
「……なんだと?」
流石にこれには鉄面皮で知られる蓮も顔色を変えた。
(テレポート技術を転用し、破壊に特化させたということか?　だが、俺の耳に届いていないということは、この兵器もまだ試作段階にあったはず。それを一体誰が、何故カイロ要塞に……?)
数秒間思索し、やがて小さな舌打ちと共に呟く。
「裏で糸を引いているのは議会と大本営か。あの阿呆どもめ、つまらん真似をする」
「まさか、要塞の破棄を命じられた時からここまで仕込まれて……?」
「恐らく、そういうシナリオなのだろうな。連中はハンニバルとその機甲師団をここで全滅させるつもりらしい」
単に基地を自爆させた場合、共和国側に出る被害はせいぜい戦車隊の一部だけだ。
しかし、この次元核を用いた場合は極めて広大な範囲――警報の内容を信じるのならば、半径１０ｋｍ圏内の物体全てが破壊尽くされかねない。
その場合は蓮たちのいるカイロ要塞どころか、前線に迫るハンニ

バルの機甲師団も一つ残さず飲み込まれ、消えてしまうこととなる。
逆に言えば、それこそが帝国議会と大本営の狙いなのだろう。
最低限の被害で敵の主力を殲滅し、後々有利な協定を結ぶ。
蓮と氷堂はそのための捨て駒として、体良く利用されたということだ。
「どうするべきでしょうか、司令」
堅い表情を浮かべる副官に、蓮はしばし眼を閉じ、黙考した後で尋ねる。
「起動シークエンスに介入は？」
「外部から特殊なプロテクトをかけられているらしく、不可能です。そもそも、この【神風】とやらが起動するまで後三分ほどしか時間が……」
「そうか。分かった」
蓮は小さく頷き、
「……悪いな、ハンニバル」
常のように、目深に帽子を被り直した。
恐らく、これは前々から入念に計画されていたことだ。土壇場で自身が足掻いたところでどうなる問題ではない。
『【神風】起動まで後、二分三十秒。総員、速やかに基地から半径１０ｋｍ圏外まで退避して下さい。繰り返します――』
沈黙に包まれた室内を、壊れたレコードのように埋め尽くす音声。
追って、微細な振動と爆音が司令室のすぐ真横から聞こえて来た。
「さて、ハンニバルの戦車隊がここに辿り着くのと、装置が起動するのとどちらが早いのやら」
「三途の川の渡し賃でも賭けますか？」
「いい提案だ。ただ、残念なことにもう時間がない」
蓮は天井を見上げた。とうとう、カウントダウンが始まったのだ。
『【神風】起動まで後、十秒』

「ところで氷堂。人は死んだ後、どこへ行くと思う？」

『九、八、七――』

「分かりません。天国か地獄か、まだ生きている人々の記憶の中でしょう」

『六、五、四――』

「まぁ、どんな場所だろうと、この世界と比べたらマシだろうさ」

『三、二、一――【神風】起動開始』

低く唸り声を上げる原動機。

その瞬間、世界が、ひしゃげ、ねじ曲がった。
断絶し、分解し、綺羅星となって砕け散った。
そして、またどこかで光を結び、再生をした。

プロローグ？（後書き）

――数日後、共和国議会に北アフリカ方面軍情報通信部より伝えられた報告書より抜粋。

「突如現れた黒く渦巻く闇が、全てを呑み込みました。私はこれがすぐに帝国軍の新兵器であると確信しました。私たち通信兵は戦場の最も後方におりましたが、この闇は恐ろしい勢いで周囲の物体を飲みこみ、少し目を開くと、私のすぐ隣にあった車両までもが奈落の底に吸い込まれて行くところでした。この現象の中心地は帝国軍の要塞でした。少将（※1）は私たちよりずっと前にいたはずでしたが、既にアレックス（※2）は船尾の先まで闇の中に呑まれていました。それは端的に言って地獄でした。いったい何人が死んでしまったのでしょうか。百年生きてもこの数分間を忘れられないでしょう。ようやく黒い闇が消えた後、そこに残っていたのはまるで地面をスプーンですくい取ってしまったかのような、深い深いクレーターだけでした」

※1：当時の北アフリカ方面軍の総司令を務めていたハンニバル・バルカ少将（後に二階級特進により大将へ昇進）
※2：当時の北アフリカ方面軍の旗艦、ユリウス級陸上戦艦アレクサンドロス

異世界での目覚め

その夜、榊蓮は鼻をつくかびの臭いで目を覚ました。

瞼を開けば、薄暗い闇の向こうに見えるのは太い木で出来た天井の梁。

数秒間、瞬きを繰り返し、蓮は自分がログハウスに似た木造の建物の中で、寝台に寝かせられていることを把握する。

「……生きているのか」

唇の端から漏れた呟きは、はっきり音として三半規管を震わせた。間違いない。自分は生きている。その事実に蓮は安堵と失望を半々ずつ覚えた。

（俺はまた薄汚く生き延びたのか）

今一つ状況が飲み込めないが、おおかた空間座標転送装置とやらが誤作動を起こしたのだろう。そのせいで三途の河を渡りきれなかったに違いない。

蓮はそう当たりをつけ、寝台から跳ね起きた。硬直しかけている筋肉を軽く屈伸させた後で、周辺の様子を見回す。

「……なんだ、これは」

そこで思わず、呆然とした声が漏れた。

窓のない室内は六畳間程度と手狭で、半ば倉庫扱いされているのか、用途の分からないがらくたが部屋の隅にごちゃごちゃと積み重ねられていた。

問題はそのがらくたの内容が、古びた壁時計や縁のかけた土器、折れた青銅の剣と、骨董品も同然の代物ばかりということだ。

（訳が分からんぞ）

蓮はいつものように頭へと手をやり、そこでようやく愛用の帽子がないことに気付く。

見れば、軍服の上下は着せられたままだが帽子に外套。そして、士官用の軍刀が欠けていた。

恐らくは寝かせる時に邪魔になって、どこかへ片付けられてしまったのだろう。

「ぬぅ」

唸り声を上げた蓮は不安定な足取りのまま、部屋の外に這い出た。途端、肌寒い夜の風が吹きつけ、眉の辺りまで伸びた前髪をそよがせる。

今度こそ蓮は絶句した。頭の中が真っ白になり、途方に暮れてしまった。

（俺は夢でも見ているのか？）

蓮の眼前に広がるのは、氷の大地でも、粉塵に覆われた空でもなかった。

鬱蒼と生い茂る森林地帯と、その合間に軒を連ねている十数軒ほどの木造家屋だ。

住人は寝静まっているのだろう。人間の気配はするものの各々の家に灯りはない。

「夢ではない。夢ではないはずだが……」

自分自身に言い聞かせるかの如く呟きながら、蓮は薄暗い空に浮かぶ満月を見上げた。

夜空を見上げれば、星が見える。たったこれだけのことが、蓮にとっては素晴らしい奇跡に思えた。

「……ここはどこなんだ」

切実な疑問と共に、蓮は腐葉土を踏みしめ、幽鬼のように辺りを彷徨い始めた。

持ち前の不景気な顔立ちと相まって、なにも知らぬ人間が見たら腰を抜かしそうな光景である。

もっとも、本人にはそんなことを気にしていられる余裕がない。

内心では混乱の極みに達しながらも、蓮は情報を収集すべく、並び立つ家々の中でもひと際大きな一軒家へと足を運んだ。

入口には不用心にも鍵がついていない。というより、これだけ小規模なコミュニティならば、その必要性もないのだろう。

「これは……」

首尾よく室内に侵入した蓮は、暗闇に目を凝らした。

眼球に暗視能力を付加された瞳は、夜でも白昼の如く周囲の光景を見ることが出来る。

（書庫、か？）

目に付くのは板張りの床に山積みされている雑多な書物だ。壁には地図がかかり、窓際には古びた書机まで置いてある。

蓮は足元に転がっていた巻物を手に取り、ざらつく感触を指先で確かめた。

「紙媒体。しかも、羊皮紙と来たか」

かすかに口元を吊り上げる。奇想天外の出来事が続き過ぎたせいで、頭のネジが数本外れかけているらしい。

蓮は片手に巻物を持ったまま、散らばった書物を幾つか手に取って確認した。

それらは全て同じ文字、文体を用いて書かれていたが、蓮の知る言語ではない。

「母音の数は七、子音の数は二十六。インドヨーロッパ語に似ているが、少々こちらの方が複雑だな……」

恐らく、長い時代を経て洗練されていないのだろう。蓮は文明のレベルからそう判断をする。

（とりあえず、学習機を起動させておくか）

蓮は脳内に埋め込んだ生体コンピューターに幾つかのソフトウェアを常駐させていた。

学習機はその中でも最もポピュラーな代物だ。分かり易く言えば、一度見たものを決して忘れないようにする装置である。

更に脳の処理速度も上昇させるため、その気になれば丸一日で五ヶ国語全てを習得することも出来た。

もっとも、長時間連続使用していると脳がオーバーヒートを起こし、廃人化する危険性もあるから、そうそう安易に使えるような代物ではない。

「さて」
それから約一時間。スポンジが水を吸い込むかのように書物の知識を吸収した蓮は、羊皮紙を束ねただけのレポートから顔を上げた。
既にその足元には三十冊ほどの大小様々な本が散らばっている。単純に考えると、一冊につき約二分ほどのスピードで読破している計算だ。
おまけに全く知らない言語を解析しながらの精読である。文字通り、人間業ではない。
（最低限の読解はなんとかなったな。後は発音が分かるといいんだが――）
「ん、丁度いいものがあるじゃないか」
ざっと室内を見回した蓮は、児童用の語学書らしい一冊を手に取った。
広げられたページにはずらずらと文字が並び、一つ一つに『口をすぼめ、舌を突き出して発音する』だの、『歯の隙間から空気を漏らすような感じで発音する』だの、細かな注釈が乗っている。これを蓮は十秒ほどで頭の中に叩きこんだ。
「こんなところか」
あっさり言語の習得を終えた蓮は、窓の外に広がる森林へと視線をやった。
いつの間にか、木々の隙間から淡い日の出の光が漏れている。その美しい光景を、蓮はしばし言葉もなく眺めていた。
（まさか、もう一度この風景を見れるとは……）
まるで百年間枯れ果てた砂漠を彷徨った挙句に、ようやくオアシスを見つけたような気分だ。
そうして柄にもなく心を奪われていたためだろう。ふと蓮が気付いた時には、書庫の入り口に長躯の人影が寄りかかっていた。
「寝床を抜け出してどこに行ったかと思えば、こんなところでなにをしているんだい？」
蓮が先ほど学習したばかりの言語が、涼やかな声と共に放たれる。

燭台を手にしたまま怪訝そうに眉を寄せているのはすらりとした体格の青年だ。

ネコ科の生物を連想させる金色の瞳に、肩までの長さに切り揃えられた同色の髪。

手製と思われる木綿の貫頭衣や麻のズボン、月桂樹の若枝で編まれた冠などは、蓮にとって馴染みのない代物である。

もっともそれはお互いさまなのか、青年の方も蓮の服装を上から下まで不思議そうにじろじろと眺めていた。

「君、やっぱり妙な格好をしているな。見た目は人間ようだが、中身はなんだ？　化け物かな？」

「いや、違う。分かり易い表現を使えば――」

興味深そうに尋ねる青年に、蓮は言った。

「俺は異世界からやってきた人間だ」

アクリオンの村？

吟遊詩人のような姿をした青年の名はベルナット・クーガといった。年齢は若いながらも、この村において村長を務めているらしい。

ベルナットの手から軍帽を取り戻した蓮は、帽子のつばを握って被り心地のいい位置に調整しながら尋ねた。

「ベルナット、念のために聞いておくがここはどこだ？」

「アクリオンの村だよ。いや、規模を考えれば村と言うより集落かな。今、ここには五十人くらいしか人が住んでいないから」

ベルナットは机の上に燭台を置いたところで、再び蓮へと向き直る。

「とりあえず、君の名前を教えてもらっても構わないか？」

「帝国陸軍少将、榊蓮だ」

「帝国……？　ルガルのことか？」

「違う。さっき、異世界だと言っただろう。まぁ、かいつまんで説明するのは面倒だからな。星の裏側にある、極めて遠い場所程度に考えておけばいい」

誇大妄想狂とも取れる返答に、ベルナットは呆れたような表情を隠さなかった。

「君は妙な男だね。髪の色も変だし、目の色も変だ。格好も変な上に、言動まで変だなんて」

「一々連呼するな。ところで、俺をここに連れてきたのはお前か？」

「森の奥で倒れたのを拾ってきたんだよ。あんなところでなにをやってたんだ？」

「昼寝だ」

「……まじめに答える気はないらしいね。大体、君は異世界の人間だっていう割に、ちゃんとソフィアラ語で会話が出来ているじゃないか」

「さっき覚えたからな」蓮は淡々と事実を述べた。

「あともう一つ、黒い鞘に入った軍刀があったはずだ。あれはどこにやった？」
「あのへんてこな剣なら倉庫に置いてあるよ。君の武器なのか？」
「そうだ。返してくれ」
「悪いけど、それは出来ないね」
ベルナットはやや硬い声で答えた。黄金をはめ込んだ瞳には緊張の色が走っている。
「こっちはまだ君の素性に関してなんにも分かってないんだ。はっきり言って、今の僕には君が単なる頭のおかしな男としか思えない」
「だろうな。それに、お前の認識は概ね合っている」
ふざけた調子ではない。蓮は至極、真面目にそう言った。
既に蓮は今の自分が置かれている環境について、ある程度見当がついていた。
周囲に生い茂る青々とした森林。現れた青年の格好。そして、その言動――
なにより読破した書物の記述が、蓮のいる場所を明確に裏付けていた。
（空間移動（テレポーテーション）でも時間移動（タイムリープ）でもない。恐らく、これは次元移動（ディメンションワープ）だ）
原因は間違いなく、カイロ要塞で発動した転送装置だろう。
どういう作用が起きたのかは分からないが、蓮は地球と僅かに異なる並行世界（パラレルワールド）へと迷い込んでしまったらしい。
実際、壁際にかかる地図には蓮が見たこともない大地が描かれていた。
あえて似通っているものを上げるとすれば、オーストラリア大陸だろうか。
中央から北部にかけては大荒原と呼ばれる不毛地帯で、人間が生息しているのは南部の沿岸地帯だけ。
その沿岸地帯も、西からミストリア、レギオニール、ルガルと地方ごとに区切られている。
「この地図にアクリオンという村の名は書いてないが、どの辺にあ

るんだ？」
「ここだ。テッセラリウスの東北部」
「レギオニール地方の最北端か。辺鄙な場所だな」
「そう言う君は都会から来たのかい？」
「ここよりずっと技術の進んだ場所だ。しかし、この地図に俺の国は載っていない」
「だったら、なんで森の奥で倒れてたんだよ。てっきり、大荒原を越えてやって来たのかと思ったのに……」
「別に警戒せずともいい。少なくとも俺は人間で、お前たちにとっての敵ではないからな」
蓮は腰を屈めると、再び床に置かれていた本を手に取った。
「ベルナット、ここにある書物はお前のか？」
「……まぁね」
ベルナットは目を逸らし、どこか気まずそうな顔で頷く。
その表情の意味が蓮にはすぐ分かった。恐らく、ここの書物は正規の手段で手に入れた代物ではないのだろう。
なにせ著者はバラバラだし、製本方法も多岐に渡っており、その上、内容に関しても種々雑多である。
もっとも、蓮にとってはこちら方がありがたい。おかげでこの世界の知識も常識程度のレベルまでは身に着けることが出来た。
（文明の発展レベルはおおよそ中世初期。場所によっては古代レベルまで遡るようだ。動植物に関しては一部例外はあるものの、ほとんど地球と同じだな。――いや、かつての地球、か）
蓮のいた世界において、人間以外の生物はほぼ全てが絶滅していた。
辛うじて地球上に残っていたものと言えば、バイオテクノロジーによって管理される家畜や食用魚類くらいのものだ。
となると、並行世界へ移っただけでなく時間軸も過去へ移動しているのだろうか？
「いや、そうとも限らないな」

蓮は誰に言うでもなく呟く。
――例えば、硝子の球体で囲った箱庭を二つ作ったとする。
この中にそれぞれいくらかの知的生命体を閉じ込め、発展の度合いを計測したとしても、全く同じになるとは限らない。
生命体の数や球体内の環境。はたまた偶然や運命の悪戯によって、進化の速度は左右されてしまうだろう。
（まして、この世界では根本から人類を取り巻く社会体制が異なっている……）
蓮は広げた本のページへちらりと視線を落とした
今、蓮が手にしているのは東の国、ルガル帝国の律法を描いた書物だ。
そこには明確な文章として人間の立場が規定されていた。
『ヒト、人間と呼ばれる種の生物。これらは皇帝、諸侯及びその眷族に隷属するものである』
この世界において人間とは即ち奴隷、ないしは家畜の立場であった。

アクリオンの村？

アクリオンは人口五十名程度の小さな村である。

北部大荒原の南、針葉樹が立ち並ぶ森林地帯の奥まった場所にあり、そこに住む人々は畜産や採集、狩猟によって生計を立てていた。

この村に、奇妙な男が住み着き始めたのは今から一週間ほど前のことだ。

住人の多くは彼のことをよく知らない。どうも村長の友人らしいという話は伝わっているものの、それ以上の情報は全くの不明だった。

もっとも、その村長――ベルナット・クーガですら、男の正体に関して見当がついていないのが実情である。

ベルナットに出来たことといえば、この異様な風貌の男を書庫の中に軟禁しておくことだけだった。

「この村に鉄の錠前のついた牢屋があれば良かったんだけどな」

ベルナットは半ば本気でそう漏らした。

ここ数日間、見たこともない衣服を身に纏ったこの男は、書庫に閉じこもって延々と本のページをめくっている。

軟禁、というのも実際のところ本人がここを動かないだけだ。

見張りや鍵はなく、その気になればいつでも書庫から抜け出せる。

その証拠として、蓮の片手にはどこからか調達して来たらしいリンゴが握られていた。

真っ赤なそれを齧りながら悠々と本を読む様は、まるでこの部屋の主のようにも見える。

（全く、とんでもない拾い物をしたもんだ……）

貴重な労働力になるかと思って連れ帰ったのものの、結局は書庫の置物となっているだけだ。

ベルナットとしては少々、当てが外れた気分である。

「なぁ、サカキ。君、いつまでそうやって本を読んでいるつもりだ

よ」

やがて、ベルナットは蓮が巻物を読み終えた所を見計らって声をかけた。

「ひょっとして、学者にでもなるつもりか？　それなら、ケントリオンか東の帝国にでも行けばいい。戦争ばかりのレギオニール地方に留まっている必要はないだろう」

蓮はベルナットの言葉に答えず、切れ長の瞳で室内を一瞥する。

「おい、この村の書庫はここだけか？」

「……相変わらず人と会話をする気がないね、君は」

毒づくベルナット。その前で、蓮は微かに笑った。

「ベルナット、戦場で重要なことを一つ教えてやる。それは情報だ。どんな大兵力であろうとも、敵に情報を知られていては烏合の衆と変わらん」

「ああ、そうかい」ベルナットはがりがりと頭を掻き毟った。

「だから、君はここに閉じこもって本を読み続けてるって？　それで、一体誰を相手に戦争をするつもりなんだよ」

「さぁな。つい先日までなら共和国の肥えたブタどもと答えているところだが、どうもこの世界に連中はいないらしい」

「例の異世界人って話か。正直、信じられないね。君の頭は正常なのか？　それとも狂っているのか？」

「正常だ。だが、狂っていると思われるのも無理はないな」

相変わらずの人を食ったような物言いに、ベルナットは何度目かのため息をこぼした。

ここ一週間、ベルナットはどうにか男の素性、ないし目的を探ろうとしているのだが、結局はのれんに腕押しで終わってしまう。

（せめて、人間だっていう確証だけでも欲しんだが……）

内心で呟くベルナット。ふいに、書庫の扉が開かれたのはその時だった。

肩まで伸びた金髪を靡かせながら現れたのは、スレンダーな体つきのうら若い娘だ。

体つきが細身な割に、背は平均よりかなり高く、透き通るような白い肌と、薄紅色の瞳が周囲に鮮烈な印象を与えている。
ただし、その格好は淑女に似合うであろうドレスではなく、男物の上着に皮鎧という戦士の出で立ちだった。
「ベルナット、狩りの準備が出来たぞ」
彼女は蓮の存在を無視し、一切目を合わせようとしていなかった。
あからさまなその態度に、ベルナットはつい苦笑を浮かべてしまう。
「サカキ、僕はちょっと出かけてくるよ。君も来るかい？」
「動物を追い回すだけならついて行くのだがな。お前たちの狩りに付き合うつもりはない」
「そうか。なら、せいぜいここで読書に励んでくれ」
諦め果てたかのように肩を竦め、ベルナットは身を翻す。
報告にやって来た女性は無言でその後ろに続いた。書庫から離れ、家屋の外に出た後も決して自分から口を開こうとはしない。
どこか不機嫌そうに、ベルナットの背を睨んでいるだけである。
「なにか言いたそうな顔をしているね、ルシュア」
「――ああ。私の口からこんなこと言いたくないんだけどな」
ベルナットが声をかけると、ルシュアは待ってましたとばかりに口を開いた。
「あんな訳の分からない男、どうしていつまでも村に繋ぎとめておくんだ。さっさと森の外にでも追い出してしまうべきだろう。ここ一週間、ずっと書庫に籠もってるだけで、働く様子もない。ただ飯を食らいの怠け者を、この村に置いておく余裕なんてないんだぞ」
……なるほど、溜まっていたものがあったのは自分だけではなかったらしい。
内心の鬱憤をぶちまけるルシュアに、ベルナットは小さく頷いて見せた。
「確かに、君の言う通りだ。けれど、もしあの男が魔族どもの軍にこの村の場所を話してしまったらどうする」

「だったら、あいつの舌を切り落としてから追放すれば、余計な情報を喋る危険性もないんじゃないか？」ルシュアは顔色一つ変えずに言い放った。

「そもそも今の時点でも十分怪しいんだ。あの男、奴らの放った間諜かもしれない」

「その可能性は僕も考えた。でも、もしスパイならあんな行動を取らないはずだ。むしろ、積極的にこちらの懐へ入り込もうとしてくるだろう」

「なら、さっきの言葉はあの男を試すつもりで？」

「その目的もあったんだけどね。どうも裏の裏まで見抜かれていたようだ」

ベルナットは足を止める。眼前では逞しい葦毛の馬が、出発を待ちわびるかのように鼻息を荒く足踏みをしていた。

村の入口へとやってきたベルナットの周囲に並ぶのは、狩りのために集まった三十名ほどの村人たちだ。

皆、皮の鎧を纏い、堅い樹の幹で作り上げた剣や槍、弓矢を手に持ち、死地に向かう戦士の面構えをしている。

「みんな、よく集まってくれた」

ベルナットは朗々と響く声を、村人たちに向かって張り上げた。

「いよいよ今日、デクリアの村に襲撃をかける。このまま魔族どもの暴虐外道を見過ごすわけにはいかない。奴らを放っておけば、あの村に住む同胞たちは苦しむばかりだ。……誰かが救わなくてはならない」

ごくりと唾を飲む音が聞こえた。村人の間に緊張が走る。

彼らが『狩り』と呼ぶのは森林の中で鳥獣を追い掛け、仕留めることではない。

圧政を敷く支配者の軍勢、特に奴隷や物資の輸送隊へと、襲撃をかけることだ。

つまるところ、ここアクリオンは反体制ゲリラの拠点だった。

村民が林間に隠れ住んでいるのも、支配者たちの目を誤魔化すた

めである。

「敵は決して弱くない。もしこの作戦が失敗すれば僕たちは死ぬだろう。だが、正義はこちらにある。例え、我ら解放軍が砕け散ろうとも、他の誰かが必ず僕たちの意志を継いでくれるはずだ。……みんな、その覚悟は出来ているな」

この台詞に頷かぬ者はいなかった。

少なくとも表向き、彼らは一致団結していた。強い決意によって統一され、闘志をみなぎらせていた。

ベルナットはそんな村人たちを満足そうに眺める。

（よくぞここまで来たものだ……）

当初、支配者の脅威に怯え竦んでいた人々を扇動し、発破をかけたのはベルナット自身だ。

その後、僅かだった賛同者は徐々に増え、小さな軍隊は精強さを増し、ここで一つの節目を迎えようとしている。

今まで彼らが標的としていたのは街道を行く輸送隊。それも護衛の少ない小規模な部隊だけだった。

だが、今回の狙いは違う。アクリオンの南西にあるデクリアの村――すなわち、一つの拠点である。

ここを解放すれば抑圧に苦しむ人々の希望となり、やがてこの地方全体に蜂起の芽を息吹かせることが出来るだろう。

そのためにも、ベルナットはここで挫ける訳には行かなかった。

「行くぞ、みんな。この戦がレギオニール解放の烽火になると信じて！」

葦毛の馬に飛び乗ったベルナットは剣を振り上げ、村人たちに号令をかける。

追って、幾重にも重なった鬨の声が林間の村に響き渡った。

その夜、アクリオンの村に住む男たちのほとんどが森の中へと姿

を消した。
村の住民は彼らがどこへ、なんのために出発したのか、老若男女全てに至るまで知っている。
だからこそ戦に出ず、村に留まった者たちはひた待ちにしていた。
戦士たちが彼らの敵を討ち、同胞を解放して、勝鬨と共に帰還してくる、その時を。

アクリオンの村？

事の顛末に関する報告が来たのは翌日の昼前である。
書庫の本を平らげた蓮は見張り役のベルナットがいないのをいいことに、村の中をぶらぶらと見回っていた。
当然、他の村人から好意的な顔はされない。若い男達がおらず、神経がささくれ立っているような状態では尚更だ。
とはいえ、そんな村中の張りつめた空気を気にするような蓮でもなかった。
（しかし、学習機を停止させていたとはいえ、案外時間がかかってしまったか）
気付けば、書庫にあった百二十三冊の本を読破している内に、一週間もの期間が経過していた。
もっとも、これほどまで手間取ったのは彼自身が電子媒体に浸かりきりで、紙媒体に慣れていなかったせいもある。
ただ、その億劫さ、不便さは蓮にとって心地の良いものだった。
「ふむ」
村の端から端までを見終わったところで、蓮は小さく息を漏らす。
この村にはいくつか奇妙な点があった。その中の一つは農耕を行っていないにも関わらず、穀物庫には豊富な穀類が蓄えられていることだ。
（となると、やはり狩りのせいだな）
既に蓮はベルナット達の言う『狩り』がどういう代物なのか、見当がついている。
当初、蓮が目を覚ました部屋に置いてあった骨董品。それに加えて、書庫の中に押し込められていた雑多な書物。
恐らく、どちらも他所から略奪してきたものだろう。その証拠に蓮が読んだ書物には血痕の残っている代物もあった。
とはいえ、ベルナットや村人の纏う雰囲気は荒んだ山賊のものと

は違う。
　蓮が思うに、あれは強い使命感に突き動かされた人間。それも自身の行動を正義と信じているタイプだ。
「つまりは義賊、か」
　蓮は村の入り口ではたと足を止めた。
　樹林の間に築かれた獣道から、逞しい葦毛の馬が駆けてくるのが見えたからだ。
（あれは……）
　森の中に目を凝らしたところで、蓮は眉を寄せる。
　馬上でぐったりとしている人影には見覚えがあった。ベルナットの副官で、ルシュアと呼ばれていた娘だ。
　しかも、彼女は手綱を握ったまま気絶しているらしい。このままでは、間違いなく馬上から地面に振り落とされてしまうだろう。
「仕方がないな」
　蓮は小さく呟くなり、地面を蹴って葦毛の馬に肉迫した。
　カーキ色の軍服姿が一瞬で村の中から掻き消え、滑るような速度で馬の真横に並ぶ。
　蓮はすれ違いざまに太い首筋へと手を当てると、一息でその背に跨った。
　――ひひひひん！
　突然、倍加した重量に、馬はいななきを上げて仰け反った。全身から汗を飛び散らせ、ふいごのように鼻息を荒くする。
　とはいえ、その程度で振り落とされる蓮ではない。ルシュアの背後から手綱を握り、興奮する馬を制御する。
「どうどう」
　きつく手綱を引かれた馬はすぐに大人しくなると、ゆっくり走る速度を緩め始めた。
　ルシュアが目を覚ましたのは馬が村の入り口を抜け、中央付近に差し掛かった頃だ。
「う……ここは……」

「おい、お前。一体、なにが起きた？」
尋ねる蓮の前で、ルシュアは目をしばたかせた。
「お前は書庫の男？　ここはどこだ？」
「アクリオンの村だ。自分の住処を覚えていた賢い馬に感謝するんだな」淡々と答えつつ、蓮は立て続けに尋ねる。
「ところでベルナット・クーガはどうした？　一緒に村の外へ出たのだろう？」
「ベルナット……そ、そうだ！　ベルナットが！」
ルシュアは馬上からばね仕掛けの人形のような勢いではね起きた。
「報告しなければ！　村は！　村のみんなは！？」
「そこにいる」
蓮は広場を見渡す。既に、周囲には騒ぎを聞きつけた住民達が集まっていた。
彼らの顔に浮かぶのは困惑の色だ。たった一騎で帰還して来たルシュアに、戸惑いを隠せないでいる。
「ルシュアよ。一体、どうしたというのだ？」
代表として進み出て来た長老に、馬上から飛び降りたルシュアは苦渋の表情で口を開いた。
「……我らは敗北しました」
その一言に、村人達の間からどよめきが上がる。
「なんだと！　それはどういうことだ！？」
「デクリアの襲撃は奴らに知られていたのです。村に到着した私達を出迎えたのは百人以上にも及ぶ武装した軍勢でした。村の戦士達はあの忌々しい連中相手に粘り強く抗戦したものの、最終的には散り散りになってしまって……私はベルナットの判断で一人だけ逃がされたのです。この村に我々の敗北を伝えるために」
「で、では、ベルナット達は今どこに？」
「デクリアの村に捕らえられているか、最悪の場合は――」
ルシュアは悔しげに目を伏せる。噛み締められた下唇から朱色の血がこぼれ落ちた。

村人達の反応は更に顕著だ。顔色どころか手足の先まで真っ青にし、中には病人の如く体を抱きしめ、小刻みに震える者まで出る始末である。

「だ、だからやめた方がいいって言ったんだよ！　どだい連中相手に戦争を吹っかけようなんて、無茶な話だったんだ！」

泡を吹きながら一人の男が吠え、その隣に佇んでいた女性は赤子を抱いたまま泣き崩れる。

大小の違いこそあれ、村人達の反応はみな不可避の絶望に直面した人間のそれだ。

阿鼻叫喚と化した村人達の中で唯一、冷静さを残した老人が怪訝そうに尋ねた。

「だが待て、ルシュアよ。何故、デクリアへの襲撃が奴らに漏れていたのだ？」

ルシュアははっと目を見開いた。

「まさか、村の中に内通者が――」

思考から結論へと至るまでの時間はほんのわずかだ。

ルシュアは顔面を蒼白にし、馬上の蓮を睨みつけた。

「お前か！？」

「違う」蓮は一言で切り捨てた。

「少しは頭を冷やして考えることだな。俺が間諜であるなら、目的を達した時点で村を離脱しているだろうが」

「だ、だがっ！」

「こちらからも一つ、質問させて貰おう。お前の言うデクリアとやらはどこにある？」

「……そんなことを聞いてどうするつもりだ？」

「ベルナットの奴には借りがある。それを返すいい機会だ」

飄々と言い放つ蓮に、ルシュアは顔色を失う。

「まさか、連中とやり合うつもりなのか……？　私達、解放軍を全滅させた連中と？　たった一人の軍隊でなにが出来るというのだ！」

「御託はいい。デクリアの村はどこだ？　あいにく、書庫の地図に

は細々した村の場所が載っていなくてな」
「……ここから真っ直ぐ南西の方角だ。だが、一人で行くつもりなら――悪いことは言わない。やめておけ。お前も知っていると思うが、連中の力は人間と比べ物にならないんだ。その上、奴らの数は百人以上。戦いにすらならないぞ」
忠告にしては棘のある言葉だが、蓮にはルシュアが本気で自分を引き留めるつもりでいることがよく分かった。
恐らく、この娘は単純に人が良いのだろう。あれこれ悪口を言いながらも、他人が傷つくのを黙って見過ごすことが出来ない性格なのだ。
そういう意味ではお人好しのベルナットと似た者同士である。
「ルシュア、しばらくこの馬を借りるぞ」
蓮はほんの僅かな苦笑と共に馬の手綱を引いた。
「ま、待て！　本気で連中の所に攻め込むのか!?　それなら私も！」
「悪いが足手纏いはいらん。その体でまともに動けるとは思えないからな」
冷たく断じられ、ルシュアはぐっと押し黙る。
それでも彼女は棒立ちのまま蓮を送り出すことはなかった。
「分かった。それなら、お前に一つだけ渡しておくものがある！」
「なに？」
蓮が怪訝そうに眉を寄せた。その時にはもう、ルシュアは居並ぶ村人達を掻き分け、村の端にある武器庫へと駆け込んでいる。
数秒後、武器庫から戻った彼女の手に握られていたのは、蓮がかつての世界で所持していた軍刀だ。
ルシュアは再び蓮の前に立つと、息を切らしながらも黒塗りの鞘を差し出した。
「これを持って行け！」
「……いいのか？　俺はこのまま村から逃げ出すかもしれないんだぞ。何故、わざわざ武器まで提供してくれる」

「お前を信用した訳ではない。ただ拾った剣を元の持ち主に返しただけだ」
「それに――」口ごもりながらも、言葉が続けられる。
「借りを返すといったお前の言葉が、私には嘘でないように思えた」
暗く、陰鬱な雰囲気に包まれた村人達の中で、ルシュアは顔を俯けた。
その表情を過ぎるのは、無力な自分に対するどうしようもない歯がゆさだ。
本来ならばルシュア自身が敵地に飛び込み、ベルナットや仲間達を救いたいのだろう。
だが、彼女にはそんな力も策もない。戦場から命からがら脱出し、こうして敗戦の報を村に持ち帰ることが精一杯である。
「……ベルナットを頼む」
万感の思いを込めて放たれた言葉と共に、蓮はルシュアの手から自らの愛刀を受け取った。
「心得た」
手綱を引かれ、胴を蹴られた馬が、嘶き声と共に駆け始める。
眼下を滑る大地。流れる風景。遠ざかる村。
そうして、榊蓮は再び戦場を目指した。

デクリアの戦い？

デクリアの村はアクリオンと同じく、森林の狭間に建つ小村だ。ただし、鉱山都市テッセラリウスからほど近いこの村に住む人々は、武器鍛造のための燃料となる材木の伐採を強制されており、村内には住民たちの仕事っぷりを監督するための役人まで常駐していた。

今回ベルナットら解放軍が起こした軍事行動は、この監督官を撃破し、村人たちを強制労働から解放することが目的である。

元々、監督官は数名しかいないため、ベルナットたちに負ける要素はないはずだった。

――しかし、現実はそう甘くない。

村へと奇襲をかけた彼らを出迎えたのは完全武装の魔族による軍隊だ。

その兵数は百名以上。当然、結果は火を見るより明らかである。

ベルナット率いる部隊は抵抗を続けたものの、やがて散り散りになり、挙句の果てには縄で縛り上げられ、罪人の如く村の中へひき立てられてしまった。

手痛過ぎる敗北。最早、取り返しがきかないほどの惨敗。

こうして、彼らの蜂起はまずその第一歩から挫折に終わったのだった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

日がとっぷり暮れ、森の中を暗闇が覆い出したにも関わらず、デクリアの村には煌々と眩い光が灯っている。

住人の消え失せた村内に我が物顔で居座っているのは、鎧を着込

んだ二足歩行のイノシシたちだ。
彼らは広場の中央で篝火を焚きつつ、車座になって酒杯を打ち交わし、汁の滴る骨付き肉にかぶりついていた。
「全く、人間ってのはバカばかりで困る。圧倒的な力の差すら理解出来んとはな」
その中で一際巨体を目立たせているのは、豪奢な銀杯を手に持った怪人である。
『巨亥(きょがい)の一族』が族長スクローファ。周辺地域では豪腕で知られる魔族の一人だ。
炎のように真っ赤なたてがみを持つ彼の傍らには、痩せぎすの男が一人、引きつった愛想笑いを浮かべたまま酒壺を抱えていた。
「いえ、全くその通りで。ただ、あっしは旦那様らに盾突こうなんて思っちゃいませんよ。だからこうして、お先に報告させて頂いた次第でして、ハイ」
「いい心がけだな。お前のような知恵の働く人間ばかりであったら、我らの統治も楽であっただろうに」
「へへ、ありがとうございます。旦那の賢さには敵いませんがね」
おべっかを使いつつ、男は空になった銀杯に壺の中身を傾ける。
その姿を縄で縛られたベルナットら解放軍の戦士たちは忌々しげに眺めていた。
「ディーノ……何故、魔族に情報を売り渡すような真似を」
苦渋の思いと共に尋ねるベルナットに、ディーノと呼ばれた男は嘲るような笑みを返した。
「ベルナット隊長、悪いけど俺はもうあんたのやり方について行けなくなったんだよ」
「なんだって」
「今までみたいに隊商を襲うだけなら良かったんだ。でも、あんたは俺たちに解放軍なんて名前をつけて、魔族全体と戦おうとした。それじゃあ、困るんだよ。あんたは魔族の恐ろしさを理解してない。勝ち目の薄い勝負なんかに、これ以上付き合い切れないさ」

「……怖気づいたのか、ディーノ」
「まぁね。俺も命は惜しい。だから、こうして保身に走らせて貰ったってわけだ」
悪びれた様子もなく言い放つディーノに、ベルナットは内心で歯噛みする。
（くそっ、この男の矮小さをもっと考えておくべきだった）
ディーノは元々打算に長けた男だった。それでも、ベルナットは魔族に尻尾をするような真似だけはしないと思っていたのだ。
――魔族。
現在、この大陸を支配しているのは人間ではない。ヒトより遙かに強大で、残虐な性格を持つ悪魔だ。
人間の三倍近い戦闘力を持つとされる彼らは総称して魔族と呼ばれるものの、その氏族は多岐に渡っている。
今回、ベルナットたちと交戦したスクローファ率いる巨亥の一族もその中の一つだった。
そして、人間の立場は魔族に服属する奴隷、または家畜である。
ゲリラとして活動するベルナットたちのような僅かな例外を除き、ほとんどの人々は鎖で繋がれ、労働や工作に従事させられるのが常だった。
（……そういえば）
ふとベルナットは気付く。
デクリアの村では五十名前後の村人が林業に携わっていたはずだ。にも関わらず、村の中に人影はない。ベルナットが奇襲をかけた時も、元々の住人の姿を見受けることは出来なかった。
「なぁ、族長。ちょっと聞きたいんだが」
「んぁ？　なんだよ、負け犬が生意気な口を聞きやがるな」
不機嫌そうに鼻を鳴らしつつも、スクローファは酒の肴になると思ったのか、獣臭い顔をベルナットへと突き出した。
「ま、いい。俺は今、機嫌がいいからな。簡単な質問にだったら答えてやる」

「なら聞くけど、この村の住民たちはどうしたんだい？　テッセラリウスの鉱山に連れて行ったのか？」
「あぁん？　そんな面倒なことするかよ」
「だったら、何故この村には誰もいないんだ。まさか、どこかに幽閉して――」
「当たらずとも遠からずってとこだな。連中なら、ほら、そこに入ってる」
スクローファが指差した先にあるのは、穀物庫の横に並べられた数十ほどの長細い壺である。とても人間が入れるような大きさではない。
「それ、ひょっとして冗談のつもりかい？」
眉を顰めるベルナットの前で、スクローファは楽しげに巨体を揺らした。
同調するかのように、篝火を囲むイノシシ面の怪物たちが粘ついた笑みを浮かべる。
「あいつらの数は五十四。そして、俺の軍隊の数は百十二だ。二人に一匹くらいで丁度いい計算になるだろ？」
「……え？」
その瞬間、ベルナットは全身からさっと血の気が引くのを感じた。
（まさか）
ベルナットは再び陶器製の壺へと目をやり――そして、ようやく理解する。
丸く開いた壺の口に、真新しい血液が付着していることに。
「スクローファ、貴様！？」
「俺たちは丁度、腹が減ってたんだ。そして、目の前に食糧があった。だったら後は、言うまでもねぇよ」
げっげっげっ、とカエルのように喉を鳴らしつつ、スクローファは焙られた肉へかぶりついた。
「ああ、お前らは殺さないから安心していいぜ。死んだ連中に代わって木を切る作業に加わって貰う。そういう風に、この村の監督官

とも話がついてるからな」
「この外道っ！」
「おう、そうだ。後で、お前らのお仲間も回収してやらないと。ディーノ、アクリオンの村ってのはどこにあるんだ？」
「ここから真っ直ぐ北東です。……おっと旦那、酒が空になりやしたね。ちょっと換えを持ってきますよ」
空っぽになった壺を抱えて立ち上がるディーノに、スクローファは「待て」と声をかけた。
「そういえば、お前に褒美をくれてやるという約束があっただろう」
「え？　ああ、そうですね。そんな話もありましたね」
そしらぬ様子を装いつつ、ディーノは期待の表情を隠さない。
スクローファはおもむろに立ち上がると、腰に刷いた鞘から鋼鉄の直剣を抜き放った。
「見ろ、ディーノ。こいつは素晴らしい逸品だと思わないか？　数か月ほど前、辺境で起きた反乱を鎮圧した際、錬鋼の御大将から直々に頂いた代物だ」
「へへ、あっしに武器のことは分かりませんが、いい輝きをしてますなぁ」
「うむ。そこでだ。こいつの切れ味をお前にも味あわせてやろう」
「……へっ？」
ディーノは不思議そうに首を傾げる。その時にはもう、彼の頭部は一刀の元に切り飛ばされていた。
血を噴き出し、どっと音を立てて倒れる男の胴体を、スクローファは邪魔そうに蹴り飛ばす。
「クズめが。俺様が直々に剣をくれてやったんだぞ。礼の一つも言えんのか」
地面に転がる首に、ぺっと吐きかけられる唾。
変わり果てた同胞の姿から、ベルナットは思わず目を逸らしてしまった。
（ディーノ……魔族の恐ろしさを理解していないのはお前の方だよ。

連中は僕たちのことなんて、地面を歩くアリ程度にしか思ってないっていうのに）

じわじわと間近まで広がる血液を見て、縛られた男の一人が頬を引きつらせる。

「た、隊長」

「大丈夫。村へはルシュアを使いに出した。今頃は村長がみんなを纏めて、どこかへ逃げ出している頃だ」

「ですが、それでは自分たちは……」

「怒り狂った連中に殺されるかもしれないが、まぁ、仕方ないな」

小声で答えつつ、ベルナットは平静を装って肩を竦める。

デクリア村の襲撃が露見した時点で、自分たちの運命は決まっていたはずだ。

今、彼らが生きながらえているのは単なる神の気まぐれに過ぎない。

「なに、寿命が二、三十年ほど縮まるだけだ。みんなだって、その覚悟が出来てたはずだろ」

「そ、そりゃそうですけど……」

いかにも納得が行かない風に、男は口ごもった。

しかし、ここにいる戦士の多くはアクリオンの村に妻子を持つ者たちである。

一人者だったディーノと違い、自らの命可愛さに村の情報を売り渡すことなど、到底出来るはずもなかった。

「おおし、それじゃあ今日のところはここで一泊して、明日の朝になってからこいつらの村を攻撃するとしよう」

スクローファの言葉に、篝火を囲む豚面の眷族たちは一も二もなく賛同の声を上げる。

流石に彼らとて、一戦を終えた後で休息もなしに行軍を続けたくはない。

なにより今は夜だ。森林地帯に不慣れな彼らが、暗闇の中を突っ切って進むのは困難だった。

「見張りは今回の戦いで功のあった者だけ免除する。それ以外の奴らは一時間ずつの交代で――」
続けて命令を出そうとしたスクローファは、そこでふと言葉を切った。
車座の中央で焚かれていた篝火に、外からなにか丸い物体が投げ込まれたのだ。
「あん、なんだ？」
ぱちり、と弾ける火の粉。豚面の一人が怪訝そうに篝火へと視線を向ける。
やがて、その中から転がり出た物体を見て、一同は揃って声を失った。
「……こいつは」
呻き声を漏らすスクローファの前にあるのは、たき火の中で半分ほど焼け焦げた豚面の頭部だ。
丁度、切り落とされたディーノの首と並ぶ形になったそれを見て、スクローファは赤みがかった顔に憤怒の表情を浮かべた。
「おのれ、何者だ！」
衝動的に立ち上がったスクローファは、ようやくそこで村の周辺に置かれた歩哨が一人残らず地面に倒れ伏していることに気付いた。
と、同時に焼けつくような怒りの感情がスクローファとその眷族を襲う。
生粋の戦闘集団である彼らが、ここまでこけにされたのは初めての経験だ。
巨亥の族長は禿げあがった額に、幾本も太い血管が浮かび上がらせた。
「くそっ、許さん！　全員、森へ出ろ！　賊をブチ殺せ！」
族長の指示を待つまでもなく、豚面の兵士たちは襲撃者の姿を求め、夜の森へと飛び出す。
その蜂の巣をつついた様な騒ぎを、ベルナットは地面に横たわったまま眺めていた。

（敵襲だって？　まさか、ルシュアが戻って来たのか……いや）
脳裏に浮かんだ考えを、すぐにベルナットは否定する。
確かに、ルシュアはまだ若い娘でありながら優秀な戦士だ。
しかし、完全武装の魔族を奇襲し、音もなく打ち倒せるほど人間離れした能力は持っていない。
「一体、誰が……」
呟くベルナットの前にその男が姿を現したのは、スクローファたちが森の中へ消えてから数分後のことだった。

デクリアの戦い？

「さて、と」

森の中に生い茂る樹木の一つ。そのてっぺんに身を潜ませた蓮は、デクリアの村から軍勢の大半が出払ったのを見て、おもむろに木の上から飛び降りた。

族長スクローファを始め、多くの兵士が襲撃者の捜索に向かったものの、未だ村内には十名ほどの武装した魔族が周囲を警戒している。

だが、蓮はなんの気負いもなく歩を進め、村の入り口へと姿を現した。

最初の犠牲者となったのは、付近の警邏に当たっていた一族の兵士である。

「きっ、様！？」

「悪いな。死んでくれ」

蓮は咄嗟に声を張り上げようとした兵士に向かって、軍刀を一閃させた。

たちまち稲穂の如く首を刈り取られ、崩れ落ちる豚面の魔族。

当然、この襲撃は他者へと知れ渡ることになったが、その隙にも蓮は近場の敵兵を一人、電光石火の速さで切り倒していた。

「これで二人か」

踏み出された軍靴が、血に濡れた砂利の上で乾いた音を立てる。

まるで散歩でもするかのように村の門前へと現れた蓮に、一族の兵士たちは一様にぽかんとした表情を浮かべた。

彼らには目の前の光景が信じられなかった。精強さで知られる巨亥の一族が人間相手に手も足もでないなど、悪夢としか言いようがない。

「な、あいつ……！」

「てめぇ、よくも！」

やがて、いち早く呆然自失の状態から脱却した二人の兵士が、憤激の声と共に蓮へと討ちかかる。

ただ、この場合は相手が悪過ぎた。一方の兵士はすれ違いざまに腹を裂かれ、もう一方は声を発する間もなく首を飛ばされてしまう。

蓮が現れてからここまでかかった時間は、僅か十秒足らず。

それでも、豚面の兵士たちが彼の脅威を認識するには十分な時間だった。

「くっ、包囲しろ！　全員でかかるぞ！」

その場に残っていた部隊の副長が、すかさず周囲の同胞へと指令を送る。

しかし、これが彼の命運を決めることとなった。敵軍に指揮官の存在を見て取った蓮は、すかさず副長目掛けて突進を仕掛けたのである。

泡を食った副長は腰に佩いていた剣を抜き放ったものの、すぐさま利き腕を切り落とされ、返す刀で喉を貫かれて沈黙した。

こうなってしまうと、あとに残っているのは屈強な肉体を持ち、全身を重武装で固めただけの烏合の衆だ。

体内に組み込んだ神経加速装置によって体感速度を遅延させていた蓮にとっては、ただの木偶の坊でしかない。

「これで終わりか」

十数秒後、最後の敵兵を切り倒した蓮は軍刀を虚空に一閃させ、刀身に張りついた生々しい体液を振り払う。

その足元では縄で拘束された解放軍の面々が、一用に唖然とした表情を浮かべていた。

「運がいいな、ベルナット。まだ生きてるとは」

「サカキ……か？」ベルナットはなにか信じられぬものを見たかのように、目をしばたかせた。

「驚いたな、あの巨亥の一族を子ども扱いだなんて。ひょっとして君、人間じゃなかったのかい？」

「前にも言っただろう。俺は人間だよ。ただ、人間の性能を限界ま

で極めているだけだ」
軽い調子で答え、蓮はベルナットを縛っていた縄を軍刀で切った。
こうして再び自由になった解放軍の戦士たちだが、その顔に浮かんでいるのは狂喜の色ではなく、狐につままれたかのような表情だ。
「……ありがとう、助かったよ。でも、どうして君がここに？」
怪訝そうに尋ねるベルナットに、蓮は言った。
「ベルナット、戦場で重要なことはなんだと思う？」
「こんな時になぞなぞかい？　確か、答えは情報だろう？」
「そうだ。その点、お前は自軍の情報を流出させ、敵の奇襲を食らってしまった。唯一、評価出来るのは途中で仲間を村まで逃がしたことだな。おかげで俺も、このデクリアに辿り着くことが出来たのだから」
「ひょっとして、君はルシュアから話を聞いてここへ来たのか？」
「ああ。お前には幾つか借りがある。それを返しに来た」
蓮は無表情のまま、片腕を差し出す。
「立て、ベルナット。反撃を開始するぞ」
「反撃だって？　ここから逃げるんじゃないのかい？」
「忘れたのか。この近辺にはまだ敵の主力がうろついている。今、村の外に出たところで奴らとはち合わせるだけだ」
「だったら、どこかに隠れて戻って来る連中をやり過ごした方が……」
「やり過ごすか、奇襲をかけて息の根を止めるか、まぁどちらかだな」
平然と物騒な台詞を口にする蓮に、ベルナットはしばし言葉を失った。
が、すぐさま愉快そうに口元を吊り上げ、差し出された腕を握り返す。
「そいつは魅力的な提案だね」
立ち上がったベルナットは地面にしゃがみ込む仲間たちを見渡した。

その瞳には既に、強い意志の力が戻っている。
「ほら、みんな。ぼんやりしている時間はないぞ。早く立つんだ」
「ま、待って下さいよ、ベルナット隊長。ひょっとして、まだ連中とやり合うつもりなんですかい？」
「その通り。なにしろ、僕たちは最初から連中と戦争をしに来たんだ。ここですごすごと引き下がる理由がどこにある？」
当然の如く言い放つベルナットだが、戦士たちの反応は鈍い。
なにせ、彼らはつい先ほど手痛い敗北を被ったばかりだ。
加えて、デクリアの住民が辿った凄惨な末路までも目にしている。
「か、勘弁してください。さっき、俺たちがあいつらに手も足も出なかったことを忘れた訳じゃないでしょう？　相手はまだ百人近く残っている。少し数が減っただけで状況はなんも変わっちゃいないんだ。どだい、連中とやり合おうだなんて無茶な話だったんですよ……」
弱々しい声を漏らす禿頭の大男を前にして、ベルナットはふと膝を折り、蓮によって切り倒された兵士の手から鉄の剣を取り上げた。
「なぁ、ライゼル」
ぶんっ。突然、振り下ろされた白刃に、ライゼルと呼ばれた大男は目を瞑る。
だが、ベルナットの剣はライゼルの耳の真横で止まっていた。
突き出された刀身が指し示しているのは、地に転がるディーノの生首だ。
「奴らに恭順したディーノはどうなった？　――首を切られて死んでしまったさ。
暴政に屈していたデクリアの人々はどうなった？　――今は奴らの胃袋の中だ」
「た、隊長……」
青白い顔をしたライゼルを前に、ベルナットは淡々と言葉を続ける。
「次に犠牲となるのはアクリオン。僕たちの村だ。君自身はおろか、

君の妻や子供だって殺されてしまう。……君は、それでいいのか？」
「そんなこと！」
「分かってるはずだろう、ライゼル。僕たちにはもう抗うより他に道はないんだ。既に村の場所は知られている。もしこの場から逃げれば、奴らはアクリオンを襲うはずだ。例え逃げたとしても、女子供を連れたままでは遠くへ行けない。いつかは見つかって殺されてしまう」
ごくり。飲み込まれる唾の音が周囲に響いた。
「生き残るためには、戦うしかない。生き残るためには、勝つしかない。……それでも尚、奴らから逃げ延びようだなんて考えを持っているのなら、そいつはただの臆病者だ。負け犬だ。どこへなりとも消え去ってしまえ！」
幾多の視線を一身に受けながら、ベルナットは片手に携えた剣を頭上へと振りかざす。
「さぁ、立て！　立つんだ、アクリオンの戦士たち！　そして――戦え！」
「う、お……お、おおおっ！」
強烈な叱咤を受けたライゼルは、歯を食いしばり、獣染みた咆哮と共に立ち上がった。
その姿を見た他の村人たちも、一人また一人と武器を手に取り、身を起こす。
そして、全員が決起した時。その場にはもう、暴虐に怯える人々の姿など欠片もなかった。
「大したものだな、ベルナット。どうもお前は煽動家の才能を持っているらしい」
「褒めてるのかい、それは？」
意外そうな様子の蓮に、ベルナットは苦笑を返す。
「ところで君は一応、僕らの仲間ってことでいいのかな？」
「まぁな。一度助けてその後、死なれましたじゃ俺も寝覚めが悪い」
「……そうか。正直、僕は君のことを単なる頭のおかしな変人だと

勘違いしてたんだ。でも、本当の君は義に厚い人間だったんだな。
改めて礼を言うよ」
「気が早いな、お前は。戦いはまだこれからだというのに」
「分かってる。外に出た敵が戻って来る前に早くどこかへ隠れよう」
ベルナットは金色の瞳に、暗い怒りの色を浮かべた。
「今度こそ、連中に目にものを見せてやる」

デクリアの戦い？

それから数分後、無為な捜索の果てに村へ戻ったスクローファが目の当たりにしたのは、変わり果てた同胞たちの姿だった。

「……なんだこれは」

スクローファは怒りよりも先に愕然としてしまった。

村のそこいらには一族の兵士たちが、無惨な格好でうち捨てられている。

首を切り落とされた者。腹を裂かれた者。頭から股間まで真っ二つにされたもの――

みな、冷たい屍となって死んでいた。

「なんだこれはァ！」

激昂の余り、スクローファは真っ赤な鬣を針金のように逆立てる。

村内の異変は兵士たちが切り殺されていただけではない。

恐らくは襲撃者の手で解放されたのだろう。拘束していたはずのベルナットらアクリオンの住民までもが消えていた。

「ふざけるな！　ふざけるな！　なんだこれは！　どうして、人間風情に俺たちがここまでこけにされなくてはならん！　くそったれめ！　許さんぞゴミ虫ども！　殺せ！　絶対に逃がすな！　一人残らず皆殺しにしろ！」

族長の怒声を受け、たちまち一族の兵士たちは泡を食って夜の森へと踵を返した。

しかし、百人近くの人員を使った大捜索は結果として徒労に終わる。

元々、巨亥の一族は戦闘に特化した集団だ。深い暗闇の中、足場の不確かな森林内で、逃げ出した捕虜を追うのは至難の技だった。

「くそっ！　何故だ！　何故、一人も見つからん！」

憤死しかねない勢いで吠えたてるスクローファに、部下の一人が恐る恐る声をかけた。

「族長。これ以上の捜索は時間の無駄ですぜ。連中を探すなら明日の朝にした方が――」
「俺に意見をするなっ！」
ぐしゃり。振り下ろされた剣に脳天を叩き割られ、豚面の兵士は地面へと倒れ伏す。
もしスクローファが冷静で、分別を残した状態だったのなら、部下に陳情されるまでもなく自分たちの行動の無意味さに気付いただろう。
だが、今の彼は怒りに我を失っていた。周囲の言葉など火に油を注ぐだけで、耳に入るはずもない。
「もう一度、森の隅々まで焙り出せ！　ぐずぐずするんじゃないっ！　奴らをひっ捕らえて来るんだ！」
こうして激憤するスクローファにより、一族の戦士たちは三度目に及ぶ無意味な捜索へと駆り出された。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「あの阿呆め。ようやく寝静まったか」
スクローファが捜索を打ち切ったのは、草木も眠る丑三つ時になった頃のことだ。
同胞を殺した襲撃者と逃げ出した人々を捕えることは渋々諦めたものの、腹の虫の収まり切らないスクローファは村中の酒瓶を空にした後で、不貞寝するかの如く眠りについていた。
「でも、さっきは危なかったね。危うく酒壺を探しに来た連中に見つかるところだったよ」
それに倣い、十名ほどの見張りを除く敵兵も全員が鎧を脱ぎ捨て、高いびきをたてている。
無茶な命令を受け、重装備で森林を駆け回った彼らはすっかり疲

れ果てていた。手足を投げ出し、兜を枕代わりに爆睡してしまうのも無理はない。

「てっきりすぐ追っ手を引かせると思ったんだが、ここまで粘られたのは予想外だったな。この状態で捜索を強行するとは馬鹿としか思えん。連中の知性はそれほど高くないのか？」

「魔族ってのは基本的に性格が悪いけど、その中でも巨亥の一族はとりわけ粗暴で短気なんだ。怒ると冷静な考え方が出来なくなる」

「ふむ。出来ればいつか、氏族ごとに詳しい性格や傾向を調べたいものだ。まぁ、今回は状況がいい方向へ転がったから良しとしよう」

囁くような声と共に、蓮は立ち上がった。

組み上げられた材木の隙間からは、篝火の燃えかすに照らされたデクリアの村が見える。

既に兵士の大半は寝静まっており、村の外縁に立った歩哨も注視しているのは森の中だけ。

当然、穀物庫の中に隠れ潜む二十名ほどの人々にはまるで気付いていない。

「行くよ、みんな。頃合いだ」

ベルナットの号令に従い、鹵獲した武器を手に携えた戦士たちは村の方々へと散らばった。

それは息を静め、足音を殺し、闇に紛れた静かな戦争だ。

あらかじめ蓮から柔らかい首元を狙うように指示されていた解放軍の戦士たちは、さながら暗殺者の如く、眠りに耽る豚面の敵兵を次々殺害して行く。

その作業は、村の周辺を囲む見張りが内部の異変に気付くまで延々と続いた。

――ガチンッ！

人々が行動を開始してから数分後、一人の男が狙いを誤って、兵士が枕代わりにしていたヘルムへと刀身をぶつけてしまう。

途端、甲高い金属音が鳴り響き、夜の森を眺めていた歩哨は背後へと振り返った。

「なん……だあぁ！？」

ぎょっと目を見開く彼の瞳に映ったのは、闇の中を蠢く複数の人影である。

すぐさま兵士は大きく息を吸い込み、声を張り上げ――ようとして、その頭部を閃く刃に刎ね飛ばされてしまった。

「気付かれたか」

舌打ち一つ漏らして、蓮は村の内部を見渡す。

暗夜の奇襲によって兵士の数は半分まで減っていた。

それでもまだ、解放軍の戦士たちと比べれば二倍近くの敵が生き残っている計算だ。

（こういう場合はまず、頭を落としておくべきだが……）

そうは言っても、スクローファの姿は篝火の周辺にない。

おおかた、どこか家の中でベッドに沈んでいるのだろう。

もし外でのうのうと眠りについていたのなら、蓮が見逃すはずもなかった。

「見つかったぞ！　殺せ！」

数人が寝ぼけまなこを擦りつつ起き上がるのを見て、ベルナットは周囲の村人へと号令を放った。

たちまち隠密行動から解き放たれた戦士たちが、剣を振りかざして敵兵へと襲い掛かる。

本来なら圧倒的強者である一族の兵士も、夢うつつの状態ではろくな抵抗が出来ず、次々と脆弱な人間たちの手で討たれて行った。

「へへっ！　見たか、豚足ども！　人間様を舐めるなよ！」

この奇襲で四人目の敵兵を仕留めた男が、己の力を誇示するかのように声を張り上げる。

しかし、それが彼にとっての遺言となった。突如、頭上から振り下ろされた剣が、男の身体を袈裟掛けに捌いてしまったのだ。

ずるりと上半身を滑らせ、倒れる彼の背後から現れたのは、全身を怒気で赤く染め、鬣を天に向かって逆立たせた巨亥の族長である。

「ゴガァァァァァッ！」

激昂するスクローファは猛獣そのものの咆哮を上げるなり、片手に持った長剣で無茶苦茶に周囲を薙ぎ払った。

運悪く近場にいた数名の戦士が犠牲となり、更に一族の兵士たちまでもが巻き込まれ、共に細切れのベーコンと化す。

「出たな、スクローファ！」

「あの豚め、敵も味方もおかまいなしか。早く仕留めた方が良さそうだな」

蓮は小さく呟くと、全くの自然体のまま暴走するスクローファの前へと立ちはだかった。

血走った野獣の目がその姿を見逃すはずもない。みすぼらしいなりをした村人たちの中。一人だけ格好の違う蓮に、スクローファは口元から泡を飛ばして吠えたてる。

「貴様か！　貴様か！　俺たちに喧嘩を売ってきたのは貴様か！　見つけたぞ、虫けらめ！　今すぐその脳味噌をぶちまけてやる！」

「そうか。早速で悪いが、死んでくれ」

長剣を振りかざすスクローファに対し、蓮は逆袈裟の軌道で刃を切り上げた。

鈍色の刀身と刀身がぶつかり合い、闇夜に眩い火花が散る。

同時に、スクローファはにやりと口元をつり上げた。

「バカめ！　これは錬鋼の一族によって産み出された名剣中の名剣！　貴様のなまくらとは違うのだ！」

勝ち誇る声が響き渡った直後、スクローファの剣は磨き上げられた刃によって根元から真っ二つに叩き折られていた。

ぎょっと瞠目する間もなく、再度白刃が煌めく。スクローファの野太い両腕が、血飛沫と共に宙を舞った。

「う……げ！？　俺の剣が！？　俺の腕がぁ！？」

「零式軍刀真改。俺の世界では時代遅れの中古品だがな。鉄器ごときに後れは取らんさ」

刀を振り抜いた体勢のまま、蓮は淡々と答える。その言葉通り、強化炭結晶の刀身には刃毀れ一つない。

一方、武器と両腕を失ったスクローファは顔面を蒼白にして、がくりと地に膝をついた。
「ま、待て！　ゆっ、許してくれ！　もう人は食わん！　二度とお前たちに乱暴を働かないと約束する！　だから……！」
「駄目だな」
必死に命乞いをするスクローファに対し、蓮は容赦なく軍刀を一閃した。
刎ね飛ばされる豚面の頭部。宙を舞ったそれが、村の中央でボトリと音を立てる。
混戦の中、勝負の趨勢を見守っていた両軍の戦士たちはこの結末に揃って目を点にした。
「あ、あのスクローファが」
「……秒殺かよ」
呆然とする人々の中、いち早く平静さを取り戻したのはベルナットだ。
「族長は死んだぞ！　総員、敵の残党を討ち取れ！」
残党――その言葉に一方は自らの勝利を知り、もう一方は自らの敗北を察した。
この時点でも、単純な数字の上でならばお互いの兵数は同等だ。
しかし、巨亥の一族は不意打ちを食らい、部隊の八割を殺された挙句、族長までも討ち取られ、戦闘に耐えるだけの士気を維持することが出来なくなっていた。
その結果は見るも無残な壊走である。一族の兵士たちは先を争ってその場から逃げ出そうと、村の入り口に殺到した。
「族長が死んだぞ！　もう無理だ！」
「逃げろ！　逃げろ！　早く行け！」
そして、怒りに燃える解放軍の戦士が、その好機を逃すはずもない。
「追え！　追え！　一人残らず殺せ！」
「殺されたデクリアの住人の恨みを思い知れ！」

どっと押し寄せた軍勢は逃亡者たちの背中に大蛇の如く食いつき、鉄の刃を突き立て、全身をずたずたに引き裂いてしまう。
悲鳴と怒号が木霊する中、掃討戦と化した戦況を眺めつつ、蓮はぽつりと呟く。
「終わったな」
その隣で、ベルナットは感嘆のため息を漏らしていた。
「驚いたよ。まさか、本当に五倍近い魔族の軍団に打ち勝てるとは思わなかった」
「そうか？　一万対五万なら絶望的な戦力差だが、二十対百では大して変わらんさ」
「いや、魔族は人間の三倍近い力を持っているって言われてるんだよ？　それをこうも一方的に蹂躙出来るなんて……」
「力で劣っているのならば知恵で補えばいいだけだ。人は古来から、そうやって繁栄を続けて来たのだから」
淡々と答えつつ、蓮は白みかけた東の空を見て、微かに目をすがめた。
（だが、そうやって繁栄を続けた結果、人は力を求めた意味すら忘れてしまった）
この世界に来てから、もう何度目かになる日の出を見つつ、内心で呟く。
明けの光は森の中に逃げ込んだ一族の兵士から、暗闇の加護を奪い取った。
こうなると短足で鈍重な巨亥の一族が、身軽な人間から逃れる術はない。
――やがて、数分後。全ての敵を討ち果たした戦士たちは拳を頭上に突き上げ、一斉に勝ち鬨を上げる。
この日、ヒトは絶対的であった支配者から、人類解放へ向けて最

初の一歩を勝ち取った。

乾杯

激動の一夜が明け、満身創痍ながらも晴れ晴れした顔でアクリオンの村へと戻ってきた解放軍の戦士たちを、住人たちは歓呼と共に出迎えた。

村民が全滅したため、デクリアを解放するという当初の目的は達せられなかったものの、巨亥の一族を打ち破ったのは紛れもない戦果だ。

熱狂に包まれた人々は、日が沈んだ後も口々に勝利を讃え合い、篝火の周りに車座を組んで、互いに祝杯を交わしていた。

「サカキ、隣いいかい？」

草場に腰を降ろしてぼんやりと篝火を眺めていた蓮は、ふと真横からかけられた声に顔を上げる。

眼前に立っているのは両手に酒杯を持ったベルナット・クーガだ。

特に断る理由もなく、蓮は無言で頷いた。

「これ、去年の秋に採れたブドウを発酵させたものなんだ。君も一杯どうかな？」

「貰おう」

ベルナットの手から木製の杯を受け取り、口元に紫色の液体を近づける。つん、ときついアルコールの匂いが鼻をついた。

蓮は杯の中身を一口分だけ口に含み、しばらく舌の上で転がした後で飲み干した。

「旨い」

「だろう？」ベルナットは嬉しそうに口元をつり上げる。

「君の世界にもお酒はあったのかい？」

「ないな。酒という名の小便ならあったんだが」

蓮はもう一度、杯の中身を傾ける。じわり、と喉から胃に広がる熱が心地よい。

「俺のいた場所では酒類が贅沢品として規制されていた。その上、

口に出来るのは九割が醸造アルコールの安物ばかりだったから、こんな旨い酒を飲んだのは久しぶりだ」

「そう言って貰えると嬉しいよ」

ベルナットは満足そうに杯の中身を半分ほどまで一気に飲み干す。

「ねぇ、サカキ。君のいた世界ってのはどんな場所だったんだい？」

酒杯の中で揺れるぶどう酒を見つめたまま、蓮は一言で答えた。

「地獄だ」

しん、と辺りの音が静まり返る。

「俺のいた場所では百年以上も長い戦争が続いていた。世界は帝国と共和国、その他の雑多な国々に分かれて争い、互いの国土を焼き尽くしたんだ。結果、空は燃え、地は裂け、海は凍った。……分かるか、ベルナット。俺のいた世界では人間以外の全てが絶滅した。木々も、動物も、星の光までもが消え失せるほどにな」

蓮は我知らずの内、杯を持つ手に血管が浮くほど力を込めていた。眼をつむれば、脳裏に浮かぶのはあの荒廃した世界の光景だ。

誰があんな結末を望んだのか。何があの終焉を導いてしまったのか。

今となってはもう誰にも分からない。後に残ったのはただ嘆きと絶望の声だけだった。

「そして、俺はその世界で百年以上もの間、軍人として働いていた」

「百年以上って……あの、君って今何歳なんだい？」

「忘れた。確か、百三十かそこらだ。俺のいた世界では老化抑制技術が発達していたから、ほとんどの人間は五百年近くまで寿命があった。もっとも、百年生きる前に戦禍で早世する者が大半だったんだがな」

「凄まじいね。僕の知っている常識と大分違う」

「当然だ。文明のレベルが千年単位で異なる。俺がこの世界へ辿り着いたのも、行き過ぎた科学技術の結果。もしくは神の悪戯だ」

小さく息をつき、蓮はぶどう酒で乾いた唇を湿らせる。

ふと空を見上げれば、青白い月が暗い夜空に輝いているのが見え

た。月見酒である。
「ベルナット、俺にとってこの世界は天国に思える。防塵スーツもなしに地面の上を歩けるなど、それだけで夢のようだ」
「じゃあ、君は元の世界に戻りたいとは思わないのかい？」
「まぁな。そもそも、俺は自殺紛いの行動を取ってこの世界へ来ている。あの地獄へ戻るのなら死んだ方がマシだ」
「ただ」と蓮はかすかに目をすがめ、
「あの世界に一人だけ、俺が忠誠を誓った人を残してきてしまった。今となってはそれだけが心残りだ」
くしゃり、と頭に被った軍帽に手を伸ばした。
既に蓮は縁者を全て戦争で失っている。その上、未婚で恋人もいない。
結局、彼の周りに残っていたのは副官である要氷堂と、皇帝の位を押し付けられた少女の二人だけだ。
「……君はこれからどうするつもりだい？」
「特に考えていない。が、いずれケントリオンに行こうと思っている。あの街では人間と魔族が対等に近い関係を結んでいると文献にあった。真偽のほどはともかく、一度顔を出してみるのも悪くないだろう」
「そうか。まぁ、確かに君ならあそこに行っても食うに困らないかもな」
ベルナットはどこか遠い目ではしゃぐ村人たちの姿を見ながら、ぽつりと呟いた。
「サカキ、君はさっきここが天国に見えるって言ったね。でも、僕の目にはこの世界が地獄に映るよ」
くぴり。酒杯が大きく傾けられ、紫色の液体がみるみる内に減っていく。
「人間は常に死と破滅の恐怖に怯え、残酷な悪魔たちによって自由を束縛されている。デクリアの住民たちがどうなったかは君も知っているだろう？　ああいう事例はこの大陸じゃ決して珍しくないん

だ。人が死ぬのも生きるのも連中の気分次第。これを地獄と言わずしてなんと言う！」

酔いが回って来たのか、ベルナットはやや荒々しく酒杯を地面に叩きつけた。

しかし、金色の瞳は未だに澄んだまま、煌々と燃える篝火を映している。

胸の中の激情を抑えつけるかのように、ベルナットは熱っぽいため息を漏らした。

「……サカキ、君の世界にも魔族はいたのかい？」

「いや、いなかった。どうも、お前たちが魔族と呼んでいる生物はこの世界独自の生命体らしい」

蓮は昨夜交戦した巨亥の一族――知性を持った野獣の姿を思い出す。

「俺のいた世界とこの世界はよく似ているが、いくつか相違点がある。魔族というのはその中でも最たるものだ。俺の世界で人間は霊長の王だった。しかし、この世界では奴らが支配者として君臨している」

「その通り。ただ、ある意味それも仕方ないことなんだよ。人間はあいつらよりずっと弱いんだ。……本来ならね」

ふいに金色の瞳が、正面から蓮の顔を見据えた。

「なのに、君は圧倒的劣勢だったにも関わらず、あのスクローファの部隊を倒してしまった」

「剣を手にしたのはお前たちだ。俺はその手助けをしたに過ぎない」

「けど、戦場で指揮を執っていたのは君だろう？　僕たちだけじゃ、とても奴らに勝てなかったはずだ」

言って、ベルナットはきつけ代わりにぶどう酒を飲み干す。

「サカキ、無理を承知でお願いする。君も僕たちの目的を手伝ってくれないか。昨夜の戦いで理解した。僕ら解放軍は今のままじゃ、とても魔族の軍勢に勝てない。君の力が必要なんだ。奴らを倒し、このレギオニール地方を解放するためには！」

力強く断定する声。これ以上ないほど率直な物言いに、蓮はしばし返す言葉を失ってしまった。

元々、彼がデクリアの戦いで解放軍に手を貸したのは、ベルナットに恩義があったためだ。

異邦人である蓮はこの世界の人間に対して思い入れがない。もっとはっきり言ってしまえば、他人が死のうが生きようがどうでも良いのだ。

「ベルナット、お前は他所から来た素性不明の男に部隊を任せる気か？　それでは村の連中も納得しないだろう」

「いや、そんなことはないさ」

はぐらかすような台詞をこぼす蓮の前で、ベルナットはかすかに口元をつり上げる。

と、そこでふいに頭上から差す影。二人の前に現れたのは酒壺を抱えたルシュアだ。

「こら、二人とも！　どうしてそんな物陰でこそこそ話してるんだ！」

「この娘、大分出来あがってるな」

「元々、ルシュアはあんまり酒に強くないんだよ。なのに、祭の時はいつも人一倍飲みたがるから……」

足元をふらつかせているルシュアを見て、蓮とベルナットは小声を交わす。

が、ルシュアはそんな男二人にたちまち眉をつり上げると、どっかり草地に腰を下ろした。

「宴の時にはしゃひでにゃにがわりい！」

「呂律が回ってないよ、ルシュア」

「いいから、飲め！　ほら、サカキ殿も！」

完全に酔っ払いと化したルシュアに絡まれ、蓮は渋々酒杯にぶどう酒を受ける。

「どうにかしろ、ベルナット」

「無茶言わないでくれ。泥酔したルシュアは巨亥の一族なんかより、

よっぽどおっかないんだぞ」
苦笑を浮かべつつ、ベルナットは再び満杯になった杯へと口をつける。
一方、ルシュアは空になった壺を傍らに置いた後で、きっと正面から蓮に向き直った。
「サカキ殿、私は感服した！」
「なにがだ」
「あなたはあのスクローファまで討ち取ってしまうほどの勇士だ！　なのに、私は今まであなたのことをただのろくでなしだと思っていた！」
ルシュアは熱っぽく語ると、おもむろに勢い良く頭を下げた。
「申し訳ない！　浅はかなのは私の方だった！　どうか、この馬鹿を許して欲しい！」
「……」
蓮は助けを求めるかのように、隣へ視線をやる。
「どうにかしてくれ、ベルナット」
「ルシュアは真っ直ぐな性格だからね。褒めるのもけなすのも、歯に衣を着せない。それはこの村の住民もそうだ。外の人間に対しては冷ややかだが、一度仲間と認めた者に対してはどこまでも親身になれる」
気づけば、ルシュアの大声に引き寄せられたのか。十数名の村人たちがわらわらと蓮とベルナットの周りにやって来ていた。
「サカキ殿、飲んでますかぁ！？」
「おっ、案外行ける口なんですね！」
「よし、ここはいっちょ飲み比べと行きましょうや！」
と、騒々しいことこの上ない。
元々、蓮は大人数に囲まれるのが不慣れだ。酔っ払いの言葉を適当に受け流しているだけで、すっかり疲れ果ててしまった。
そんな蓮の様子を横目で眺めつつ、ベルナットは小さく笑みを浮かべる。

「サカキ、君のことを他所者だなんて思っているのは多分、君一人だけさ。村のみんなはとうの昔に君のことを同胞と認めているよ」
「ベルナット、お前はよほど俺を戦場に立たせたいらしいな」
「まぁね。それに僕は君が素晴らしい指揮官というだけでなく、善人で、信用に足る義士だと思っている。君と一緒ならば、きっとこのレギオニールに平和を築くことも出来るだろう」
「……平和、か」
蓮は酒杯を傾けつつ、その言葉を口に出して呟いた。
(平和、自由、正義。どれも、あの世界で聞き慣れたものだ)
そんな言葉に騙され、一体どれだけの人間が死んだだろうか。
ベルナットが口にしていることは、蓮の知る支配者たちとなんら変わらない。
ただ違うのは、彼が本心から人々の自由と解放を望んでいることだ。
それはこの場に集まったアクリオンの住民たちも同様である。
「ベルナット、杯を出せ」
「……？」
首を傾げつつも、ベルナットは酒杯を差し出す。
蓮はそこに自らの杯を、こつんと軽くぶつけた。
「サカキ、今のは？」
「『乾杯』という、俺の国での風習だ。仲間と共に前途を祝して、杯の中身を飲み干す」
簡潔に答え、なみなみと注がれたぶどう酒を一息にあおる。
やがて、ふぅと唇から漏れる熱い吐息。空の酒杯を眺める眼差しは、どこか吹っ切れたかのようだ。
「いいだろう、ベルナット。お前に力を貸してやる。今まで俺が耳にしてきた『平和』という言葉は全て欺瞞だったが、お前の台詞からは確かな信念を感じた。真に自由と解放を志す人間が一体どこへ行き着くのか。俺もその行く末を見させて貰おう」
その答えにベルナットはぱっと表情を輝かせ、周囲を取り囲むル

シュアらアクリオンの住人たちは歓声を上げる。
「それじゃあ、新たな仲間を祝って――」
『乾杯！』
がつん、がちん、とあちこちで乱暴に打ち合わされる酒杯。
その日の酒宴も夜が更け、空が明るみ始めるまで続けられた。
そして、この日、この時、本当の意味で、アクリオンの『解放軍』は結成されたのだった。

乾杯（後書き）

こんばんは、はじめまして。筆者のあおこです。

この小説を読んで頂きありがとうございます。

人外魔境戦記譚は空想世界へ迷い込んだＳＦ世界の住民を描く架空戦記です。

とりあえず、第一部までは掲載しようと思っています。お付き合い頂ければ幸いです。

９／２３追記：

三章からは一週間毎の更新になるかと思います。

気長にお待ちください。

やがて、記念すべき勝利から数日が過ぎた。
先日まで行われていた祝宴は未だ村の中に祭の余韻を残し、行き交う人々の間には活気が満ちている。
そして、その熱に引き寄せられるかのように、アクリオンの住人は徐々に増えていた。
蜂起した解放軍とその勝利の噂は数日もせず森林地帯に隠れ住む人々へと広まり、いくつかの集落は自ら志願して軍の一員として加わっていたのだ。
そのため、アクリオンの村の人口は以前と比べて大きく膨れ上がっている。数で表すならば、およそ五百名。かつての約五倍だ。
「しかし、面倒なことになったな」
村の中の喧騒を眺めながら、蓮は不景気そうな顔で呟いた。
デクリアでの戦い以降、蓮は解放軍の参謀とでも言うべき位置に収まっている。
その隣では名実ともに解放軍のリーダーを務めるベルナット・クーガが、怪訝そうに首を傾げていた。
「面倒？　どうしてだい？　だって、こんなに仲間が増えたんだよ。ありがたいことじゃないか」
「ベルナット、戦場で重要なことを一つ教えてやる。それはな、練度の低い兵なんざ、ただの足手纏いにしかならんということだ。むしろ、練度が低いだけならまだマシだな。連中が昨日まで鍬と鋤しか持ったことがない素人に過ぎん。仮にも解放軍を称しているお前らとは剣の腕も、心構えも違う」
「サカキ、君の言いたいことは分かるよ。でも、最初から全員に兵士としての力を求めるのは難しいさ。これからじっくり訓練を行えばいいじゃないか」
「その暇があればいいんだがな」蓮は常のようにくしゃりと軍帽を

押さえた。
「ともあれ、一つ火急の問題がある」
「ああ……武器の件だね」
今度ばかりは楽観的なベルナットも眉を寄せる。
前回、最初の襲撃でベルナットたちが敗北したのは待ち伏せされたことによる動揺。単純な兵数の差以外にも、扱う武器の質が原因だった。
現在、五百いる解放軍の中で実際に戦闘員として数えることが出来るのは二百名ほど。
その内、半数は巨亥の一族が所有していた鉄剣をそのまま装備しているものの、もう半数が武器として用いているのは鋭く削り出した木の槍や、石の鏃を取りつけた弓である。石器時代も同然だ。
「まぁ、そうはいっても急に鉄の武器を拵えるのは不可能だ。この村には鍛冶場もなければ職人もいない。せめて、武器代わりに使えるような代物があるといいんだが」
「ううん。でも、なにかあったかな」
首を捻りながら周囲に視線を彷徨わせたベルナットは、そこで「あ」と声を上げた。
「ルシュア、丁度いいところに」
「ベルナット？　それにサカキ殿もか。一体なんの用だ？」
丁度、近く通りかかったルシュアは肩に担いでいた水甕を地面に置き、二人へと向き直る。
「いや、実は魔族との戦争でなにか使えそうな武器を探してるんだ。心当たりはないかな？」
「使えそうな武器というと……要するに竹槍とか、尖った石とかのことか？」
「別に直接的な武器である必要性はない。なんなら油や毒草でも構わん。油は火計に用いることが出来るし、毒草も鏃に塗れば毒矢として使えるからな」
「……サカキ、君やっぱ結構えげつない性格してるね」

「そうでもないさ。元々、この世界の人間は力で他種族に劣っているんだ。その溝を埋めるためには使える物をなんでも使うべきだろう」

正鵠を射た蓮の言葉にルシュアはにべもなく、ベルナットは今一つ納得が行かない風ながらも頷いた。

「分かった。とりあえず、他のみんなにも話を聞いてみるよ。大勢の意見を聞けば、なにかいい案が出るかもしれない」

「それなら、私は森の中を回って来よう。……サカキ殿、あなたはどうする？」

「少し気になることがあるんでな。一旦、村を離れる。夕方には戻るつもりだ」

「了解。ただ、あまり北の方角には行き過ぎないでくれよ」

「北というと……大荒原の近くか」

蓮は書庫で見た地図を頭に思い浮かべる。

丁度、大陸を二つに割った内の北半分は広大な荒野となっている。

通称、大荒原。人はおろか魔族ですら寄りつかぬ不毛の大地だ。

「あそこは凶暴な魔獣の生息地でもあるんだ。普通の人間が近付くのは危険だよ」

「ああ、気をつけよう」

蓮はベルナットの忠告をしかと胸に刻みつけた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

それから一時間後、蓮は北の大荒原からほど近い林へとやって来ていた。

本来、人間の足ならば半日以上はかかるはずの距離なのだが、身体能力が強化されている蓮にとってはぶらりと散歩に行って帰って来れる程度の行程だ。

この辺りになると風景も変わって、葉花のない痩せた裸木が並び、それに伴うかのように、乾いてひび割れた大地が北の大荒原へと繋がっていた。

「降水量が極端に少ないせいか……まるで死の大地だな」

どこか懐かしさを覚える光景を眺めながら、蓮は荒野を歩いて行く。

彼がわざわざ危険な大荒地の付近を探索しているのは、とあるものの探索が目的田だ。

そのとあるものというのは要するに、自身と一緒にこの世界へ飛ばされてきたであろう機器、武装、そして人間である。

（冷静に考えれば、俺だけこの世界へやって来たという可能性は低いはずなんだが）

僅かに隆起した地面に立ち、蓮は周囲を見回す。

次元核が起動した際、蓮は要塞の中にいたし、その隣には副官である氷堂が立っていた。

にも関わらず、そのどちらもアクリオンの近辺には見当たらない。

既に村から見て東、南、西にかけての範囲は探索が終わっており、残すはここ大荒原近くの北部のみだ。

「が、ここも無駄足か」

延々と続く荒れ果てた大地に、蓮は僅かな落胆を覚えた。

要氷堂は共に長い間、前線で轡を並べた戦友である。自分と同じくこの世界へ飛ばされているのならば、是非とも救い出して仲間に加えたいところだったが、いないのであればどうしようもない。

「ん……？」

と、そこで蓮は荒地の彼方に黒い湖にも似た地形を認めた。

常人の目には遠すぎて豆粒程度にしか見えない距離だが、視力を強化されている蓮は地形の詳細まで鮮明に読み取ることが出来る。

気になって近づいてみると、たちまち炭化水素独特の石油臭が鼻をついた。

（まさか、油田か？）

蓮は悪臭に顔をしかめつつ、地面からこんこんと湧き出る黒い液体をすくいとる。

途端、べたりと指の間に張りつく不快な感触。蓮は確認のつもりで手を伸ばしたことを軽く後悔した。

「本物だな」

小さく呟き、指の間から原油をこぼす。

（しかもかなり質がいい。一応、こんなところまで来た甲斐もあったか）

蓮は手を払って、腰を屈めていた状態から立ち上がった。

そして背後に振り返り、荒野の中に佇む漆黒の影へと向き直る。

「さて、次はこっちだな」

蓮の視線に応えるかの如く、荒い鼻息を鳴らすのは黒い肌と白い鬣を持つ不気味な巨馬だ。

口元からはちろちろと細く炎を吹き、銀色の蹄が地面に打ち付けられる度、燃え上がる火の粉が逞しい馬体の周囲を覆った。

ナイトメア。北部大荒原に生息する魔獣の一種だ。姿形は馬によく似ており、千里の距離を一日で走るとされる脚力は、魔獣の中でも最上位に位置している。

ただし、その性格は凶暴かつ獰猛。飼育には向いておらず、屈強な魔族ですら幾人もその蹄の犠牲になっているという噂だった。

「ま、軍馬は無理でも食料にはなりそうだな」

不敵に笑う蓮の前で、ナイトメアは馬身を大きく仰け反らせ、いなないた。

一歩、銀色の馬蹄が踏み出された瞬間、既にその巨体は漆黒の風となっている。

真っ正面から突っ込んでくるナイトメアに対し、蓮は腰から抜き放った軍刀を一閃させた。

――ひひひひん！

が、巨馬は真横に振り抜かれた刃の軌道を、跳躍によってあっさり飛び越えてしまう。

凄まじい脚力と反射速度に、蓮は思わず感嘆の声を上げた。
「やるな！　しかし……！」
地面を転がり、振り上げられた前足の一撃から逃れながらも、蓮は続く攻撃に備えるべく刀を脇に構える。
そうして迎撃の態勢を整えた彼の目に写ったのは――自ら油田に飛び込み、溺れかけているナイトメアの姿だ。
必死に前足で宙を掻くその様を、蓮は刀を手に携えたまま、拍子抜けした気分で眺めた。
（……なるほど。足は速くとも頭の中は文字通り『馬鹿』ということか）
原油の海は粘り気があり、逃れようとするナイトメアを蟻地獄よろしく奥へ奥へと引きずり込んでいる。
恐らく、後数分もあれば巨馬の全身を呑みこんでしまうだろう。
さしもの強大な魔獣もこうなってしまっては無力だ。
しばし、油田の端で足掻くナイトメアを傍観していた蓮は、やがてため息一つ漏らして羽織った外套に手をかけた。

次なる戦場

「やぁ、遅かったねサカ――うおっ！？」
突如、森の暗闇から現れた馬面に、ベルナットは盛大に身を仰け反らせる。
「さ、サカキ！　そいつはナイトメアじゃないか！　どうしてそんな危なっかしい生き物を連れてくるんだ！」
「なつかれたんだよ」
日が暮れた所でようやく村に辿り着いた蓮は、心底疲れ果てた表情で答えた。
その背後では、黒の巨馬が暇そうに蹄を鳴らしている。このナイトメアは油田に沈みかけていたところを助けられてからというもの、ずっと蓮の後ろに付いて来ているのだった。
とはいえ、超人的な身体能力を持つ蓮でも、原油の海から自分の数倍近い体躯を持つ巨馬を引き上げるのは至難の技だ。
どうにか油田から上がったときには日も沈み、蓮の全身は真っ黒に染まっていた。
「いや、しかし驚いたな。そもそもナイトメアを狩って食べようだなんて、普通の人は思い付かないよ」
事の顛末を聞いたベルナットは頬を引きつらせる。
一方、蓮は言葉の意味を取り違え、小さく首を傾げていた。
「こいつ、ひょっとして不味いのか？」
「それは分からないね。今から解体してみるかい？」
冗談混じりの台詞を聞いて、黒い巨馬は不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「お、すごいな。人の言ってることが分かるのか」
「あまり怒らせるなよ。踏み潰されても知らんぞ」
「分かってるって。ところでこいつ、なんていう名前なんだい？」
「名前？」聞き返す蓮の前でベルナットは力強く頷いた。
「そうさ。ちなみに僕が飼ってる葦毛の馬はマレンゴっていうんだ

ぜ」
「いや、別に聞いてないんだが……」
言いつつ、気だるそうにナイトメアの馬面を一瞥して、
「ま、名前をつけた方が呼びやすいのは確かだな。よし、今日からお前の名は如月だ。かつて、俺が乗艦していた船の名前をくれてやる」
蓮は自らの頭にある名簿から、まともと思われる名称を選択する。かくして如月と名付けられた巨馬を、ベルナットは眩しそうに見上げた。
「良かったな、如月。いい名前を貰えて。……あ、ちなみにその船、最後どうなったんだい？」
「轟沈した」
平然と言い放つ蓮の背後で、如月はまた不機嫌そうに鼻を鳴らした。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

その後、村近くの小川で体と服を洗った蓮は、ベルナット――つまりは村長の家である邸宅へと向かった。
先ほどまで黒ずんでいた軍服はざっと水洗いしただけにも関わらず、もう新品同然の色を取り戻している。
油汚れはおろか、洗濯によって濡れていた部分ですら、すっかり乾き切ってしまっていた。
「あれ、サカキ。その服ひょっとして二枚持ってたのかい？」
「いや、さっきまで着てたものと同じだ。こいつは特殊な生地で出来ていて、どんな汚れも水だけで洗い流せるし、ずぶ濡れになっても数分経てばすぐに乾く」
「……君の世界にはそんな便利な素材があるのか。羨ましいな」

「じきにここでも作れるさ。多分、後千年はかかるだろうが」
皮肉とも冗談ともつかない台詞に、ベルナットはがりがりと頭を引っ掻いた。
「とりあえず、今日一日村を回って使えそうなものを集めてきたんだ。他のみんなにも協力して貰ってね」
「なるほど。その結果がこれらということか」
蓮は部屋の中央に置かれたテーブルへと視線を落とした。
卓の上には蔓で編まれた縄。赤茶色の枯れ草。鋭く尖った金属片などが置かれている。
電子機器に囲まれて生きていた蓮にとっては、どれも馴染みのない代物ばかりだ。
「順々に説明してこうか。これは赤金樹（あかがねじゅ）の蔓で編んだ縄だ。鉄の剣でもなかなか切れないくらい丈夫で、よく馬車を引く綱なんかにも使われている。本来は戦いの場以外に使われるものだね」
「戦場で使うとしたら投げ縄か。小型投石機（スリング）を作ることも出来るな」
「うん。それじゃあ、次は――」
ベルナットはテーブルから赤茶色の草を取り上げた。
「ケムリ草。火をつけると大量の煙を発生させる性質を持っている」
「煙幕か。悪くない。使いようによっては効果的だ」
「でも、結局どっちも殺傷力がないんだよね。後は倉庫から使えそうなのを適当に持ってきたんだけど、ちゃんとした武器がないとまずいよ」
「分かっている。そのためにはやはり、敵軍に武器を供給している拠点を襲撃するべきだな」
さらりと放たれた台詞に、ベルナットは顔をこわばらせる。
敵軍。すなわち、レギオニール地方を支配する魔族たち。
彼らが統治している鉄の一大生産拠点が、アクリオンの南西にあった。
「……鉱山都市テッセラリウスか」
ベルナットは苦い表情を浮かべた。

テッセラリウスは鉱山の麓に建てられた都市であり、良質な鉄鉱石の産出地として知られている。

しかし、一方で採鉱のために人間の奴隷を酷使し、次々使い潰しているという話も広く伝わっていた。

現にアクリオンの隠れ村に住む人々の内、大半はこのテッセラリウスから逃げ出してきた者たちだ。一際、思い入れは深い。

「そういえば、ベルナット。お前もテッセラリウスの出身なのか？」

「いや、僕はもっと南のプリマスって都市で剣闘士をやっていた。あそこは人間の扱いも他と比べたら大分マシだったね。命の危険はあったけど三食はちゃんと出たし。僕も都市から逃げた訳じゃなくて、稼いだ賞金で奴隷身分から解放されたくらいだから」

「……それでマシなレベルなのか」

「まぁ、ね。テッセラリウスに住んでいる人たちは朝から晩まで鉱山に派遣されるんだ。その上、休みなく働かされているからいつもガリガリにやせ細っている。食事は常に腐りかけのパンと水っぽいスープ。しかもそれが一日に一回だけしかない。――まるで使い潰しの道具だよ」

言葉の端々に怒りを滲ませつつ、ベルナットはテーブルの上に視線を落とす。

「実は解放軍を立ち上げた当初も、みんなの間からテッセラリウスを攻撃しようって話は何度も出たんだ。でも、僕はその意見を全て封殺してきた。たった二十人ぽっちの仲間だけじゃ、あの街を落とせるはずもないからね」

「テッセラリウスの守備隊は？」

「数は五百。テッセラリウス総督、『赤守の一族』の長ニュートが守備隊の隊長を兼任している。当然、部隊は全員が奴の眷族だ。正直、今の僕たちでも勝てる見込みは少ないと思う」

「そうでもないさ。前回、戦った連中が五倍の規模でいるだけだろう」

「でも、あの時は奇襲だったじゃないか。おまけに、テッセラリウ

スには戦車もあるんだよ」
「戦車……ああ、チャリオットか」
「ふむ」と蓮は口元に手を当てた。
戦車を数頭の馬に牽引させるチャリオットは古代における兵器の中でも、とりわけ凄まじい破壊力を誇る代物だ。
ただその反面、幾つか構造上の欠点を抱えている。車輪による走行を行う関係で荒地や沼地では大きく機動力が制限されるし、車体自体も見た目よりずっと脆い。
「ベルナット、そのチャリオットはどんな形をしている？」
「ええと、車体は鉄製で前面にはシールドがつけられてるね。騎獣も鎧でガチガチに固めちゃってるから、矢や槍がほとんど利かないんだ」
「そいつは重チャリオットだな。戦車としては後期のタイプか」
車体と馬を装甲で覆い、重量と防御力を増した戦車は特に重チャリオット、ないしは戦用チャリオットと呼ばれる。
一たび戦場に出れば、御者台からの射撃やポールウェポンによる攻撃以外にも、直接その車輪で相手を引き潰す戦法まで可能という代物だ。
「まぁ、チャリオット本体はともかくそれを引く馬は臆病な性格だ。どうとでも対策は立てられるさ」
「……馬？　いや、馬は使わないよ。蜥竜がいるじゃないか」
さも当然とばかりに言い放つベルナットの前で、蓮は怪訝そうに眉を寄せた。
「蜥竜……？　ああ、そういえば書庫の図鑑に記述があったな。力の強い、二足歩行の爬虫類だったか」
「そうそう。サラマンダーなんて名前で呼ばれることもあるね。性格は獰猛で馬より力も強いから、戦場でよく使われるんだ。むしろ、馬なんて斥候とか伝令とかにしか与えられないんじゃないかな」
「なるほど。元々、戦争向けの獣がいたために、軍馬の開発が進んでいない訳だ。ベルナット、その蜥竜とやらにはなにか欠点がない

のか？」
「欠点か……。ぱっと思いつくのは馬より足が遅いことかな。大体、全力で走った人間より少し速いくらいのスピードだと思うよ。それと火に対して臆病なこと。あとは冬場に冬眠しちゃうこと。まぁ、これは今の時期だと関係ないんだけどね」
丁度、大陸の季節は初夏に差し掛かった頃である。むしろ、生き物が活発さを増してくる時期だ。
ベルナットの説明を聞いた蓮はしばしの間、床の木目を見つめながら思索にふけっていた。
「……ま、その程度ならどうにかなるか」
「サカキ、なにかいい作戦でも思いついたのかい？」
「いや、作戦といえるほどのものはないな。手持ちの札でどうにかやりくりするしかあるまい」
蓮はそう言って、小さく嘆息した。
丁度そこで扉がノックされ、軽装に身を包んだルシュアが顔を見せる。
外を歩き回っていたためか、艶やかな金髪には数枚、湿り気を帯びた青葉が張り付いていた。
「ベルナット。あ、サカキ殿もここにいたか。少し話が――っ！？」
ふいにルシュアはばっと身を翻した。その眼前で、彼女の髪に手を伸ばしかけていたベルナットが不思議そうに首を傾げる。
「……？　あ、ごめん。頭に葉っぱがついてたから」
「も、森の中にいたからかな。言ってくれればいいのに」
顔を真っ赤にしつつ、ルシュアは慌てた様子で髪に絡まった葉を払いのける。
「そういえば、武器を探してたんだっけ。なにかいいものでもあった？」
「いいものかどうかは分からないんだが……とりあえず、外に置いてあるから見てくれないか？」
「外？」

蓮は思わず尋ね返してしまった。森の中にそれほど巨大な物体があるとは思わなかったのだ。

果たして、室外に出た蓮はそこで言葉を失った。

村の入り口に鎮座しているのは、人が腰かけられそうなくらいの大きさをした金属塊である。

色はくすんだ灰色。表面にはところどころ円状に焼け焦げた跡が残っていた。

「へぇ、妙な金属だな。これ、どこから拾ってきたんだい？」

「すぐそこ。なんか地面に埋まっててさ。掘り出してきたんだ」

「地面に？　でも、今までこんな変てこなもの見たことないぜ？」

「ベルナットでも分からないか……。とにかくこの金属、重くて硬いんだ。これくらいの大きさでも、村まで運んでくるのに十人がかりだったからな」

「そりゃすごい。ぶん投げて使えば錬鋼の一族でもぺちゃんこだ。まぁ、問題は投げようとした方が先に潰れるってことだけど」

「……うん。やはり、武器として使うのは難しいか。サカキ殿、あなたはこの物体についてなにか知らないか？」

投げ掛けられた質問に、蓮は棒立ちのまま答えない。

ただじっと、緊迫した面持ちで謎の金属塊を眺めているだけだ。

「サカキ？」

ベルナットが怪訝そうに尋ねると、蓮は固い表情のまま口を開いた。

「……これはカイロ要塞の防壁だ」

「要塞の防壁？　それにしては妙な材質だけど」

「耐熱・耐レーザー加工された特殊合金だからな。この世界にはまだ存在していない」

「え？　それじゃあ、君の世界の物体がこの世界に紛れ込んでいたってことなのか？」

「既に俺という前例がある。別に驚くことでもないが――」

蓮はこつんとつま先で砕けた防壁を蹴り上げた。

高熱に晒された痕跡があるため、これが自分のいた戦場から紛れ込んだ代物であることは間違いない。

つまりは『榊蓮』に続く、次元から次元へと渡った二つ目の事例である。

(だが、地面に埋まっていたということはまさか転送の際に空間の座標がランダムに決定されているのか？　……いや、まだ断定するのには早い。俺と要塞の破片。この世界に漂着しているのは、まだこの二つしかないのだから)

しかし、1と2の違いは大きい。これで要氷堂がこの世界に来ている確率はかなり高まった。

問題は彼が地中に埋まっていたり、空から落ちて死んでいる可能性もあるということだ。

「……ま、どうせあいつのことだ。どこかで面倒事にも巻き込まれているのだろう」

楽観的な台詞を自らに言い聞かせ、蓮は常の如く、くしゃりと軍帽に手をやった。

三穂槍平原の戦い

数日後。

鉱山都市テッセラリウスより西。レギオニール地方の中央に広がる三穂槍（みつほやり）平原を貫く街道の端で、二つの軍勢が衝突していた。

一方はここ半月ほど、街道を行き交う隊商を襲撃していた人間たちの勢力二百余名。

そして、もう一方は五人の族長と千の眷族から成る魔族の討伐軍である。

魔族の戦闘力が人間の約三倍という通例を考えれば、まともな戦闘にすらならないほどの戦力比だ。

にも関わらず、脆弱な人間の部隊は奇策妙計を用いて奮戦し、敵軍の半数以上を打ち倒していた。

そう、緒戦は圧倒的に人間側が優勢だったのだ。少なくとも、緒戦においては。

「くそ……こんな、ことが……」

しかし現在、人間たちの陣地は無残に蹂躙され、壊滅状態に陥っていた。

辛うじて剣を取り、立ち向かっているのは十数名。その先頭に立つのは、カーキ色の軍服を身に纏った中肉中背の優男である。

男の名は要氷堂。かつては北アフリカ戦線で榊蓮の副官を務めていた歴戦の軍人だ。

だが、その氷堂もことこの状況に至ってしまっては手も足も出せなかった。

（……化け物め）

部隊を取り囲む鎧甲冑の魔族たちを睨みながら、氷堂は小さく歯噛みする。

この世界に辿り着いた氷堂が最初に目の当たりにしたのは、人外の異形によって虐げられる人々の姿だ。

これに衝撃を受けた彼はゲリラ活動に身を投じ、街道を行き来する物資を襲う部隊の指揮を執っていた。
氷堂率いる部隊が魔族の討伐隊と遭遇したのも、丁度その折である。
当初、人間たちは敵の軍勢を森に引きずり込み、落とし穴やスパイクを始めとした数々のブービートラップで大打撃を与えることに成功していた。
事態が急変したのは敵将の率いる親衛隊が動き始めてからのことだ。
親衛隊百名を構成するのは『錬鋼の一族』。極めて頑強な鎧甲冑の肉体と、怪力を併せ持ったレギオニール地方の支配者である。
彼らは氷堂たちの用意した罠を瞬く間に食い破ると、飢えた虎の如く部隊の本陣へと急襲をかけてきたのだ。
こうなると地力で劣る人間軍は脆い。幾人かはしぶとく抵抗を続けたものの、ほとんどは文字通り鎧袖一触され、残った者たちも一族の兵士に取り囲まれてしまっていた。
「やれやれ、ようやく片付いたか」
居並ぶ鎧甲冑の中で、一際背の高い板金鎧が声を上げる。
腰に長大な剣を佩き、頭に豹面の兜を被った異形の名はレオパルト。
錬鋼の一族における族長であり、レギオニール北部方面軍の軍将を務める男だ。
「しかし、族長を四人もぶっ殺されるたぁ思わなかったぜ。こんなんじゃ、またエイブラムスの野郎にどやされちまう。一々細かいんだよな、あのチビ助」
レオパルトはため息混じりに呟き、兜の側面をがりがりと引っかいた。
結果的に人間たちを撃破することが出来た討伐隊だが、彼らも無傷とは行かない。
むしろ、数だけならば人間側より遥かに被害が甚大だ。ほとんど

の者はなにかしら体の一部に傷を負っており、酷い場合は四肢のどれかを欠損していた。

「ったく、どいつもこいつも脆すぎるんだ。人間の仕掛けた罠くらいで殺されやがって、情けないったらありゃしねぇ。少しは俺たちを見習って欲しいもんだぜ」

レオパルトの台詞に答え、彼の背後に控えた鎧甲冑たちが兜の奥でがらがらと金打ち音を上げる。

その言葉通り、レオパルト率いる一族の兵士は多くの罠に襲われたにも関わらず、かすり傷一つ負っていなかった。

錬鋼の一族はその見た目通り、鋼鉄のように硬い表皮を持つ。生半可な攻撃が通用する相手ではないのだ。

（見くびっていた。連中の強みは鉄の刃すら通さぬ鋼の肉体だ。熱線銃（ラスター）でもあるならともかく、この時代の武器ではとても太刀打ちできない……）

氷堂は錬鋼の一族と矛を交えた後、死んだ魚のような目になってしまった仲間たちを苦い気持ちで見やる。

彼らはこの一戦で理解してしまったのだ。人間と魔族（ブ）の間には越え難い――いや、決して越えられない壁があることに。

「か、カナメさん」

戦士としての矜持を失い、怯え切った表情を見せる仲間たちを氷堂は一瞥する。

勝負は決した。最早、逆転の芽は何一つとしてない。賢い者ならば両手を上げ、降参の言葉を口にするだろう。

だが、要氷堂は一度死を覚悟した人間だ。今更、無意味な生にしがみ付くつもりはなかった。

「あなた方は逃げろ。ここは自分が食い止める」

静かに剣を構える氷堂の背後で、人々は息を飲む。

一方、思わぬ抵抗にあったレオパルトは楽しげに喉を鳴らした。

「ハッハハハッ！　俺たちに立ち向かう気か？　てめぇ一人で？　ピエロと自殺志願者を同時に演じるとは大した役者だぜ！」

「黙れ。言いたいことはそれだけか」
臆することなく言い返す氷堂に、人々をとり囲む一族の兵士がじわりと殺気を放つ。
だが、レオパルトはそんな同胞たちを片手で押し止め、自ら氷堂の前に立ちはだかった。
「てめぇ、人間どものリーダーだろ？　名前はなんつうんだ？」
「帝国陸軍中佐、要氷堂」
「そうか。いいぜ、カナメ。俺は強い奴が好きなんだ。俺と戦って三分間耐えられたら……てめぇら全員、見逃がしてやるよ！」
レオパルトはやおら腰から長剣を抜き放つなり、氷堂目掛けて振り下ろした。
反射的に神経加速装置を起動させた氷堂は、紙一重で迫る凶刃を回避し、更にレオパルトの膝頭目掛けて剣を振り抜く。
だが、手元に返って来るのは巨大な石を斬りつけたかのような手応えだ。あまつさえ刃毀れしてしまった刀身を見て、氷堂は呻き声を漏らした。
「駄目か……！」
錬鋼の一族の防御力は全魔族の中でも頭一つ飛びぬけている。普通の武器では致命傷を与えるどころか、傷一つつけることすら出来ない。
自らの攻撃が通用しないのを確認すると、氷堂はすぐさま背後へと飛び退いた。
一拍遅れて、頭上から叩きつけられた剣が勢い任せに地面を抉る。もし数秒でも反応が遅れていたら、氷堂の体は丸太の如く真っ二つにされていただろう。
（こちらは神経加速装置を使ってるというのに！）
どろりとした汗が氷堂の背筋を伝った。
今の氷堂は反応速度を人間の限界まで速めている。にも関わらず、レオパルトはその動きを正確に追っていた。
理由は明快である。元々、氷堂はデスクワーク専門で荒事に慣れ

ていない。
　単純な戦闘経験の差が、ここに来てはっきり表れていた。
「ジャァッッ！」
「くっ！？」
　僅かな隙を突き、暴風染みた勢いで迫る剛剣。
　氷堂は辛うじて剣の刃で受け止めたが、その瞬間。鉄の剣は木っ端微塵に砕け、細かな鉄片となって宙に散ってしまう。
　衝撃に氷堂の体は毬の如く吹き飛び、背中から地面へと叩きつけられた。
「がっ、は！？」
「阿呆。そんな棒きれで俺の剣を受け止めようとするからだ」
　呆れきった声を漏らし、レオパルトは傍らに立つ副官に向き直る。
「おい、ゲパルト。今、何分経った？」
「は……一分十二秒ほどですな」
「ほぉ、記録更新だな。人間相手に一分以上持ったのは初めてだ」
　悶絶する氷堂を見下ろしながら、レオパルトはがらがらと喉を鳴らした。
　一方、追い込まれた人々は絶望の表情を浮かべ、縮こまることしか出来ない。
　やがてその中から一人の少年兵が飛び出し、氷堂の足元にすがりついた。
「カナメさん！　大丈夫ですか！？　……あっ！？」
　しかし、すぐさま真上から伸びた鉄の腕がひょいと彼の体をつまみ上げる。
　宙に浮かぶ自らの体を見て、少年は顔を青ざめさせた。
　その口から悲鳴が漏れるより早く、レオパルトは少年の耳元に豹面を近づける。
「うぁ……」
「おっと、叫ぶなよ。人間のガキを殺さないようにつまみあげるってのはな。年代物のワインを扱うより難しいんだ」

「レオパルト、貴様！」
「そう怖い顔をするな。なに、少し質問をしたいだけだ」
片手で人形の如く少年の体を弄びながら、レオパルトは氷堂に尋ねた。
「お前、このへんでイノシシ顔の豚足ども見なかったか？　あいつら、人間討伐に出たまま帰ってこねぇんだよ。おかげでわざわざ俺が出張る羽目になって、面倒ったらありゃしねぇ。ったく、あのチビは俺を下働きの奴隷かなにかと――」
「レオパルト、あなたは質問をしたいのか？　それとも愚痴を言いたいのか？」
「両方だ、クソ野郎」
レオパルトは不機嫌そうに答えた。
「……分かった。で、そのイノシシ顔の豚足どもとやらはどの程度の規模なのだ？」
「確か、百人ちょっとだ。そいつら巨亥の一族ってのは頭は悪いが腕は立つ。おまけに全員武装してたはずだから、人間に容易く負けるはずはねぇんだが」
「こちらも百人程度の部隊とは交戦していない。自分たちが襲撃したのは極めて小規模な隊商だけだ」
「つってもな。それを向こう一年間チクチク繰り返されりゃこっちはたまんねぇよ」
「……向こう一年間？」
氷堂の率いる一党が隊商を襲い始めたのは、彼が部隊の指揮を執り始めた半月ほど前からのことだ。一年前にはまだ組織として結成されてすらいない。
（となると、彼らはアクリオンの解放軍と自分たちを一緒くたにしているのか）
ここ最近、人々の口に名が上がっているのは『金狼』ベルナット・クーガ率いるアクリオン村の一派である。
彼らは少数ながら幾度も街道を襲撃して魔族側に被害を与えてお

り、先日にはとうとう五倍近くの規模を持つ敵を撃破したなどという、荒唐無稽な話まで伝わっていた。

（だが、もしこれが真実だとしたら、彼らは百人近くの魔族を殲滅した計算になる。レオパルトの言う巨亥の一族が消息を絶ったのはこの時か？　しかし、ただの人間にそんなことは出来まい。ただの人間――に？）

その時、稲妻のような閃きが氷堂の脳裏を過った。

二十対百の戦い。それも人間対魔族。勝負になる、ならない以前の戦力差だ。

だが、それでも。その圧倒的差を覆すことの出来る男の存在を氷堂は知っていた。

「……まさか、サカキ司令？」

思わずその名を口に出してしまったことに、氷堂は心臓を凍らせる。

案の定、レオパルトは興味深そうに身を乗り出していた。

「自分たちに覚えはなくとも、心当たりはあるみてぇだな。そうか、お前らの他にも隊商を襲ってる連中がいたって訳だ。スクローファの馬鹿をぶっ殺したのはそいつらか……」

レオパルトは楽しげに呟くと、宙吊り状態だった少年を地面に放り出し、傍らの副官を呼びつけた。

「ゲパルト、怪我の酷い連中をオプティアに帰せ。俺たちはテッセラリウスに行くぞ。捕虜を鉱山に預けてこなきゃならねぇからな」

「は……了解です。その後は？」

「キツネ狩りの続行だ」

そう言って、錬鋼の族長は豹面の奥で獰猛な笑みを浮かべた。

鉱山都市テッセラリウス？

鉱山都市テッセラリウス。

レギオニール地方の中央に広がる三穂槍平原。その東北に位置する小都市である。

人口の規模は約三千。内訳としては鉱山働きの奴隷が九割を占め、残る一割は鍛冶屋や技師によって構成されている。

都市の周辺は草木の生えていない平野だが、少し離れると未だに開拓の進んでいない部分もあり、特に街の北部と東部には広大な森林地帯が広がっていた。

ここでは主に燃料として使われる木材が伐採され、日々街の内部へと運び込まれている。ベルナットが襲撃をかけたデクリア村などもその中の一つだ。

「サカキ、着いたよ。ここがテッセラリウスだ」

馬上で揺られながら、ベルナットはそびえ立つ大鉱山を睨みつけた。

鉱山都市の名前通り、テッセラリウスの町並みは山に組み込まれたような形をしている。

要塞染みた石造りの家が山の中腹まで広がり、麓の平原には溶鉱炉の煙突がいくつも並んでいた。

現在、ベルナットら少数の斥候隊が潜伏しているのは鉱山からほど近い林の中だ。

早朝にアクリオンの村を出発した彼らは、デクリアから続く曲がりくねった街道を通って、昼過ぎにテッセラリウス近郊まで辿り着いていた。

先導するベルナットのすぐ後ろ。一際目立つ漆黒の巨馬に跨った蓮は、周辺の地形を見て満足そうに口元をつり上げる。

「森に囲まれた平地か。悪くないな。主戦場になるのは都市周辺、場合によっては森の中まで退却する形になるか」

「退却？　まさかここまで来て逃げるのかい？」
「戦略的撤退というやつだ。とはいえ、出来れば初手で敵の守備隊を叩いておきたい。そのために、わざわざあんな代物まで持ってきたのだから」
「ああ……」ベルナットはかすかに眉を寄せた。
「それにしてもあれ酷い臭いだね。行軍中、鼻がもげそうだったよ」
「我慢しろ、としか言えないな。その代わり効果は保証する」
今回のテッセラリウス攻撃に際して、蓮はアクリオンの北部で発見した原油を枯れ草に浸し、樽詰めにして持ち込んでいた。
もっとも、悪臭を放つそれを数時間近くかけて輸送したのはベルナットら解放軍の戦士たちだ。
蓮自身は乗馬である如月が油田で溺れかけた経験からか、徹底的に油の臭いを嫌がったため、一人だけ難を逃れていた。
「でも、サカキ。冬の草原ならともかく、こんな草木の生えてない場所に火なんかつけても効果があるのかな。今日は風だってそう強くないし」
「とりあえず、空気が乾いていれば十分だ。今回は直接、相手を殺傷する必要性は薄いからな」
「火攻めなのに相手を殺傷する必要はない？　それ、どういう意味だよ？」
「ああ、要するに――」
蓮は口を開きかけたところでふと言葉を切った。
「……？　どうしたんだい、急に押し黙って」
「なにか来る」
短く答えて、蓮はテッセラリウスから続く西の街道へと目を凝らすやがて、地平線の向こうから現れたのは甲冑を身に纏った小部隊だ。
一見、その軍勢は武装した人間たちのようにも見えるが、実態は異なっていた。
あれは甲冑を身に纏った人間ではない。甲冑そのもの――つまり

は鋼鉄の体躯を持つ生物なのだ。
「……錬鋼の一族か」
がちゃがちゃと音を鳴らす巨大な金属鎧を見て、蓮はぼそりと呟いた。
このレギオニール地方で最も強大な魔族はなにかと尋ねられれば、ほとんどの者はこう答えるだろう。
すなわち、錬鋼の一族。鋼の皮膚に身を包んだ、青い血を持つ戦場の悪魔である、と。
このおぞましい一族は数多くいる氏族の中でも、その戦闘力の高さ故、別格の存在として扱われている。
鎧甲冑そのものの姿をした彼らは、みな恐竜を小型化させたような騎獣に跨り、照りつける太陽の下を整然と行進していた。
その先頭には、豹面の兜を被った一際背の高い板金鎧の姿がある。
ベルナットはごくりと唾を飲み込んだ。
「サカキ。あいつ、四軍将のレオパルトだ」
錬鋼の一族は他の氏族と比べても数が多く、四人の族長とその上に立つ王を抱えている。
そのため、レギオニール地方に君臨している一族の魔王――通称『軍神（ウォーデン）』は各族長に将軍の位と独自の指揮権を与え、各地を統治させていた。
レオパルトはその中の一人だ。レギオニール北部の鎮守を担当しており、平時は本拠である田園都市オプティアの統監を務めている。
「四軍将だと？　そんな大物が、たった三百騎程度の部下を連れて鉱山都市へ来たのか……？」
蓮は細く目をすがめた。
レオパルト率いる部隊の内訳は錬鋼の一族による蜥竜騎兵（せきりゅう）が百と、その後ろから続く雑多な種の混じった歩兵が二百だ。
更に、隊列の最後尾には荒縄で手足を縛られ、うめきを漏らしつつ歩く百名ほどの人々の姿があった。
「……ひどい。ひょっとして、あいつらまた余所から奴隷を連れて

きたのかな」
「いや、違うな。よく見ると歩兵の大半は怪我人だ。縛られている人間たちも傷を負っている者が多い」
「じゃあ、どこかで人間が魔族と戦って捕虜にされたってことかい？　ここいらで僕たち以外に積極的な行動を起こしてる連中はいなかったはずだぜ？」
「しかし、四軍将が直々に動いている以上、戦闘があったのは間違いないはずだ。恐らく、奴らはテッセラリウスの近郊で人間たちと一戦を交えた後、捕虜を鉱山に預けるためここに寄ったのだろう」
「なるほど。それなら筋も通るね」
頷きつつも、ベルナットは不安げに眉を寄せていた。
「でも、厄介なことになったな。わざわざこのタイミングで錬鋼の一族がテッセラリウスの守備隊と合流するなんて」
「厄介？　そいつは逆だよ、ベルナット。敵の幹部が自分からこちらの目の前にやってきてくれたんだぞ。おまけに手勢もたかが三百。飛んで火に入る夏の虫とはこのことだ」
「冗談だろう。相手は錬鋼の一族。それも四軍将のレオパルトだぜ？　あいつらまともな武器が一切効かないんだ。なにせ、鉄の剣ですら弾き返されるくらいだからね。普通の魔族は人間の三倍近い力を持ってるっていうけど、あいつらに限っては十人がかりでも倒せる気がしないよ」
「それがどうした。いずれ戦わなくてはならない相手だ。今日、その日が来ただけさ」
「……勝機は？」
「なくはない」
相変わらずの人を食ったような台詞に、ベルナットは肩をすくめた。
そうこうしている内にレオパルト率いる一隊は、開け放たれた門から次々、街の中へと飲み込まれていく。
人間の捕虜たちは奴隷となる身の上を知ってか、しきりに泣き叫

び、地面にかじりつかんばかりの勢いで抵抗を始めた。
しかし、結局は鞭や棍棒を振り上げた魔族たちに背中や尻をぶっ叩かれ、羊の如く追い立てられてしまう。
「あいつら……！」
「落ち着け、ベルナット。連中に吠え面をかかせるのはもう少し後でいい」
そのやり取りを無表情のまま眺めていた蓮は、ふと悲嘆に暮れる人々の中に一人だけ場違いな黒い髪の男がいることに気付いた。
（ん、あれはまさか――）
蓮の視力は素の状態で双眼鏡並みだ。少し目を凝らしただけで、その人物の服装から表情まで確認することが出来る。
柔和な顔立ちにフレームの細い眼鏡。そして、カーキ色の軍服とくれば、該当する人間はそう多くない。
ぎぎっ、と重い音を立ててテッセラリウスの門扉が閉じた後で、蓮は小さく舌打ちを漏らした。
「……あの阿呆め。むざむざ捕虜になるとは、一体なにをやっているんだ」
「どうしたんだい、サカキ。ひょっとして、あの中に知り合いでもいたのか？」
「まぁな。かつて俺の副官を務めていた男だ。名を要氷堂という」
「え？　ってことは、そのカナメも君と同じ世界に住んでいた人なの？」
「そういうことだ。一応、百年来の戦友だからどうにか助け出したいものだが……」
「戦友――ああ、君がさっきから妙に嬉しそうなのはそのせいか」
得心が行ったように頷くベルナットの隣で、蓮はふと口元に手をやる。
つり上った唇の感触。どうやら、自覚のないまま笑みを浮かべていたらしい。
「む……」

蓮は誤魔化すかのようにくしゃりと帽子を押さえ、如月の手綱を引いた。
「本隊と合流するぞ。レオパルトが留まっている内に、テッセラリウスに攻撃を仕掛ける」
「分かった。でも、そのカナメって人を助けるのは？」
「ついでいい」
ぶっきらぼうな言い方に、ベルナットは苦笑を浮かべた。

鉱山都市テッセラリウス？

「これはレオパルト様。よくお越し下さいました」
鉱山都市の内部に到着したレオパルトらを迎え出たのは、ぬめぬめした赤い肌を持つ二足歩行のイモリだ。
『赤守の一族』の族長、ニュート。革の鎧を身に纏い、腰に青銅の剣を佩いた彼は、テッセラリウスの総督と同時に守備隊の隊長まで務めている。
立派な体躯の蜥竜から飛び降りたレオパルトは、久方ぶりに顔を合わせる戦友にかちゃりと片の籠手を上げた。
「よう、ニュート。久しぶりだな。三年前の中央で起きた反乱以来か？」
「そうですね。あの戦いの後、小生はこの街の総督に任命されてしまいましたから。近年はめっきり戦場から離れております」
「ここ最近はでかい争いもないしな。毎日毎日、人間どものゴミみてぇな軍隊を潰す作業ばっかだ。退屈ったらありゃしねぇ」
ニュートの案内を受け、レオパルトが向かう先は鉱山の山腹に建てられた迎賓館だ。
既に配下の部隊は傍らに残る副官以外、全員が宿舎へと預けられている。
一方で、共に連れてきた人間の捕虜は一先ず牢屋へと運び込まれていた。
「しかし、ここはいつ来てもくせえな」
レオパルトは不快そうに豹面の鼻頭を押さえた。
鉱山の麓には鍛冶屋、工房、守備隊の兵士が寝泊まりしている宿舎が建てられており、少し山を登り始めると奴隷たちの住処も目に入る。
住処、といっても彼らが寝起きしているのは山を削りだして作られた横穴の中だ。入り口は鉄柵で覆われているから、むしろ牢屋の

ような形に近い。
　当然、洞窟には風呂場や寝床はおろか、排泄所すら用意されておらず、周囲には糞尿の悪臭が立ちこめていた。
　この中で日々を過ごす奴隷たちは飢餓のために手足が痩せ衰え、腹の突き出た異様な格好をしている。
　暗闇でぎらぎらと双眸を輝かせる様子は、知性を失った獣によく似ていた。
「この街の奴隷も少し扱いを変えるべきなのでしょうがな。何分、人間たちにくれてやる食糧の余裕などないもので……」
「もう少し飯を寄越せってか？　だがなぁ、オプティアの方もこれで一杯一杯なんだよ。西の方には御大将の軍勢がいるから、そっちに優先して兵糧を送らなきゃならねぇ。ここの人間どもには悪いが、しばらく飢えていて貰うしかないな」
「まぁ、人間は使い潰しの利く労働力です。今回また新たな補充要員が来たことですし、しばらくは持つでしょう」
　家畜を見るかのような目が、横穴の中に転がる人間たちを一瞥する。
　いや、厳密に言うならば彼らにとって人間とは知性のある家畜程度の存在なのだ。
　繁殖力は魔族より遥かに高いものの、脆弱で、戦う力などろくにもたない一族。
　それがこの大陸に生きる者大半の、人間に対する認識だった。
「ところで、将軍。歓迎の宴の前に一つご報告が」
　奴隷たちの住処を抜けたところで、ニュートはふいに声をひそめた。
「先日、行方不明になっていた巨亥の一族の百人隊がデクリアの村で発見されました。しかし、既に族長を含む兵士たちは何者かに斬り殺され、住民たちももぬけの殻だったようです」
「ほぉ、つまりはどこぞの人間どもが連中を殲滅し、住民を解放したと？」

「いえ、それが後で調査の者をやったところ。住民は壺詰めにされておりまして」
「あァ？　ってことはあの豚足、住民を食っちまったのか？　貴重な労働力だぞ。監督官はなにをやってたんだ」
「スクローファらと共謀して、住民の数を誤魔化そうとしたようですな。後々、減った数だけ反乱を起こした人間で補充つもりだったのでしょう。実は今回の件で報告が遅れたのも、監督官が報告を怠っていたためでして」
「とんだボケナスどもだな。おい、そいつらは今どうしている？」
「自らの行いを反省したのか、酷く静かにしております」
ニュートが指差す先には首を切り落とされ、軒先にきちんと並べられているトカゲ面の頭部があった。
これを見て、レオパルトはつまらなそうに鼻を鳴らし、
「ニュート、お前は仕事が早すぎる」
「申し訳ありません」赤守の族長はそう言って、深々と頭を下げた。
「スクローファを討ったのは、北部の森林地帯に隠れ住んでいる人間どものようです。明日にでも討伐隊を送り込む予定ですが――」
「それには及ばねぇよ。俺が部隊を率いて出る」
「レオパルト様が直々に？　それはそれは」
ニュートは飛び出た眼球をせわしなく回転させた。
「人間どもに同情しますな。よりにもよって将軍が率いる錬鋼の一族が相手とは。小生でしたら失禁脱糞しながら逃げ出すところです」
「そいつはお世辞のつもりか？」
「お世辞でしたらもう少し上品な言い方をしております」
「だろうな。食えん奴め」
レオパルトはくっと喉を鳴らした。

カン！　カン！　カン！　カン！

丁度その時、山の中腹からけたたましい鐘の音が鳴り響いた。

やや遅れて、見張り台に登っていた兵士の声が街中を駆け巡る。
「敵襲！　敵襲――！」
これにレオパルトは「お？」と声を上げ、ニュートはぎょろつく目をしばたかせた。
「噂をすればなんとやらですな。わざわざ将軍がいらっしゃるときに攻撃をかけて来るとは不幸な連中です」
「そいつはどうかな。奴らめ、俺がここにいると知りながら仕掛けてきたのかもしれねぇぞ」
「はは、閣下は御冗談がお上手だ。人間というのはあれで小賢しい知恵の働く生き物です。まさか、四軍将相手に正面から挑みかかるほど向こう見ずではありませんよ」
「そうか？　だが、街道で戦った人間どもにはなかなか手を焼かされたぜ？」
「とはいえ、それで死んだのは配下の一族でございましょう？　小生の目には将軍ご自身にも、錬鋼の一族の方々にも傷一つないように見受けられますが」
「フム……まぁ、そうだな。俺に挑んでくるとしたら余程の馬鹿か、命知らずくらいか」
レオパルトはごりごり音を立てて兜のこめかみをなぞった。
例え、敵側に巨亥の一族を倒したという実績があっても、レオパルト率いる親衛隊は百戦錬磨の精鋭だ。
鉄器すら持たない人間たちに負ける可能性は限りなく低い。いや、皆無といってもいい。
「皆様はお疲れでしょうから連中への応対は小生らが致します。将軍は屋敷から麦粒の引き潰される様をゆるりとご観覧下さい」
「よし、まずはお前たちで相手をしてみろ。それと、牢にぶちこんだ人間どもの中に黒髪の男が一人いただろ。あいつをここに連れてきてくれ」
「承りました。ところで、コックの準備は……」
「いらねぇよ。別にとって食おうって訳じゃねぇからな」

「了解です」と頭を下げ、ニュートは引き下がる。
遠ざかる細い影。街中を満たし始めた軍靴の音を聞きながら、レオパルトは傍らの副官に尋ねた。
「ゲパルト、あいつ生きて帰ってくると思うか？」
「は……敵兵の数は多くとも五百程度でしょう。これに対し、テッセラリウスの守備隊は同数。その上、チャリオット隊まで用意しております。これで負けるとは思えませぬ」
「だが、敵の指揮官が俺たちを苦しめた黒髪の男と同等の実力を持っているとしたら？」
「それは……」
口ごもるゲパルトの背を、レオパルトは籠手の平で叩いた。
「出撃準備だ。場合によっちゃ、俺たちの出番もあるぜ」
「は……了解です」
さっと身を翻したゲパルトは、兵士たちが駐留している麓の宿舎へと向かう。
レオパルトはその後ろ姿を見送った後、籠手の尖った指先で楽しげに顎を撫でた。
「さて、双方お手並み拝見と行こうか」

テッセラリウスの戦い？

「さて、まずは本命を釣り上げるための露払いだな」
鉱山都市内部から鳴り響く警鐘の音を聞きながら、蓮は小さく呟いた。
北部の森林から現れた解放軍側に対し、テッセラリウスの守備隊は五百ある兵力のほぼ全てを平野に展開し始めていた。
その中でも特に目立っているのは、敵軍の前列で轡を並べているチャリオット隊だ。
守備隊が擁するチャリオットの数は二十台。車体を覆う鈍色の装甲には、引き潰されてきたのであろう人間の血の跡が生々しく残っていた。
更にチャリオット隊の後背には皮の鎧と鉄槍を装備した二足歩行のイモリやトカゲがずらずらと並び、一部には蜥竜に跨った騎兵の姿も見える。
「サカキ、やっぱりこれ全軍で来た方が良かったんじゃないかな」
愛馬の背から敵軍の陣容を眺めたベルナットは、わずかに頬を引きつらせた。
五百の敵軍に対し、平原に集まった戦士たちの数は二百に届かない程度。
この内、半数はデクリアの戦いで魔族から奪取した鉄の剣を装備しているものの、もう半分は木刀に狩猟用の石矢という貧弱な装備である。
しかもただでさえ兵数、装備で差があるというのに、蓮はルシュアらごくごく少ない戦闘員を後方に残していた。
「忘れたのか、ベルナット。俺たちはこいつらの後でレオパルトの部隊とも戦わなくてはならないんだぞ。伏兵を配置したのはそのためだ」
「……冷静に考えれば正気の沙汰じゃないね。本来なら、テッセラ

リウスを落とすだけで一杯一杯のはずなのに」
「ここまで来てなにを言っている。指揮官の感情は配下の部隊に伝播するんだ。弱音を吐くなら戦いが終わった後にしろ」
「分かってる。分かってるよ、サカキ。僕が怯えを見せればみんなが浮足立つ。それは分かっているんだ」
ベルナットはぐっと下唇を噛みしめた。
そうは言っても彼自身、まともな部隊同士の戦闘はこれが初めてである。デクリアでの戦いでは双方奇襲から戦端が開かれてしまったし、隊商を襲撃していた頃は敵が圧倒的少数だった。
要するに、ベルナットは指揮官としての経験が圧倒的に不足しているのだ。
「……敵軍になにか動きがあるな」
一方で動揺の欠片も見せていない蓮は、如月の背に揺られたままふと眉を寄せた。
やがて、一人だけ戦列から離れて両軍の間に姿を見せたのは、トサカ付きの蜥竜に跨った赤い肌の蜥蜴人間（リザードマン）である。
「こんにちは、人間諸君」
ざらざらした聞き取りにくい声が、テッセラリウス周辺の平野に響いた。
「小生はテッセラリウス総督、赤守の一族が長ニュートだ。小生は諸君らに投降を呼びかけたいと思う。何故なら貴軍は見るからに数が少なく、脆弱であり、装備も劣っている。このまま戦ったところで勝敗は明白だ。であるならば、互いに無意味な争いをする必要もないだろう。もう一度言う。投降したまえ。諸君らの処遇は小生が保証しよう」
胸を張って演説を終えたニュートだが、人間側の反応は冷ややかだった。
というのも、彼らのほとんどにはテッセラリウスで鉱山奴隷として働いていた過去がある。
その時、率先して奴隷たちを鞭打っていたのは今、目の前で妄言

を並び立てている赤守の族長だ。そんな男の言葉など信じられるはずもない。

「……なぁ、みんな」

ふつふつと怒りを煮え立たせ始めた同胞に、ベルナットは声を投げかけた。

「確かに奴の言う通り、僕たちは敵に対して数で劣り、装備で負けているかもしれない。しかし、それがどうしたっていうんだ？　今、奴らは驕り高ぶり、自らの勝利を確信している。挙句の果てに、投降しろだなんて台詞まで飛び出す始末だ」

朗々とよく通る言葉が、乾いた大地に降る雨のように人々の間へと染み込む。

「僕らはなんのためにここへ来た？　間違っても、戦わずして奴らに降伏するためじゃない。連中を打ち負かし、テッセラリウスでくびきに繋がれている同胞たちを解放するためだ。……さぁ、みんな。剣を抜け、戦争を始めるぞ！　奴らの首を斬り落として、地面に叩きつけてやれ！」

「応！」と戦士たちの喉から迸る叫び声が、大気を震わせる。

これを見て、ニュートは不愉快そうに蜥竜の手綱を引いた。

「愚か者どもめ。そんなに死にたいのなら結構だ。――総員、攻撃準備。遠慮はいらん。皆殺しにしろ！」

族長の号令を受け、相対する敵軍から人間たちに負けんばかりの雄叫びが上げった。

奮い立つ両軍の様を見ながら、蓮は満足そうに口元をつり上げる。

「士気の面ではこちらも負けていないな。普通、ここまで数に差があるとやる気を失って逃亡する輩が出てくるものだが」

「それが分かっているのなら、君も励ましの言葉一つくらい言ってくれよ」

「檄を飛ばすのは苦手なんだ。大体、この部隊にはお前がいる。こと鼓舞に関して、その才能はたぐいまれだからな」

「そうかな？　正直、そこまで自惚れることは出来ないんだけど」

「ベルナット・クーガ、お前には指揮官としての経験が不足しているが将の才能はある。この俺が保証しよう」
「……ありがたいね」
ベルナットはくすぐったさそうに答えた。
そうこうしている内に、敵軍が変化を見せ始める。先鋒であるチャリオット隊が動き出したのだ。
（なるほどな。チャリオットでこちらの前線を崩した後、歩兵隊で残存兵力を殲滅するつもりか。確かに効率のいい戦い方だが――）
所詮は教科書通りの戦法である。海千山千の老将たる蓮に通用するはずもない。
「よし、敵の動きは予想通りだ。総員、準備は出来ているな？」
呼びかけに対し返ってくる、威勢のいい返事。
蓮は自身の声が部隊に行き渡るのを確認した後で、如月の馬首を反転させた。
「では全軍、後退を開始する」
指揮官からの命令を受け、人間たちの軍勢は一斉に下がり始める。
これに目を剥いたのはニュートだ。将軍であるレオパルトが見ている前で、みすみす敵を取り逃がすことなど出来るはずもない。
「おのれ！　チャリオット隊は敵を追い立てろ！　奴らを森の中に逃がすな！」
すかさず突撃を開始するチャリオット隊だが、彼らは気付いていなかった。
解放軍の戦士たちは後退しつつも、地面にある物体を置き捨てていたのだ。
戦場に点々と残る黒く湿ったそれは、石油の浸された藁束である。
「では、まず最初の一手から始めようか」
蓮はあらかじめ用意してあった松明を兵士から受け取ると、おもむろにチャリオット隊の鼻先へと放り投げた。
たちまち松明の火は藁束に引火し、敵軍の眼前に真っ赤な炎の壁を作り出す。灼熱の舌に焙られ、チャリオットを引く二頭の蜥竜は

甲高い鳴き声と共に身をのけぞらせた。
　これに慌てた御者は手綱を操って動きを抑えようするも、混乱した騎獣相手では上手くいかない。
　結果、チャリオット隊は一部では横転し、一部ではパニックを起こした蜥竜に引きずられ、あらぬ方向に駆け出してしまっていた。
「なるほど。直接、相手を殺傷する必要はないってこういうことだったんだね」
　壊乱する敵部隊を傍観しながら、ベルナットは納得が行ったように頷く。
　半数ほどのチャリオット隊は炎の壁を踏み越えて進撃して来たものの、速度を失っている状態ではただの的にしかならず、解放軍の戦士たちに四方から投げ縄を浴びせられ、たちまち無効化されてしまった。
「でも、これからどうしようか。厄介なチャリオットは封じたけど、敵の数はまだこちらの二倍以上だよ」
「そうだな。敵軍の数が多い時は正面から当たっても勝てる見込みはない。ましてこちらは素人が多く、相手は人間より屈強な魔族の軍勢。出来れば敵を分断し、各個撃破したいところだ」
「簡単に言うけど、それは難しいよ。一体、どうやって敵を分断するつもりだい？」
「なに、別段策を弄するまでもないさ。どうやら敵軍は二手に分かれ、左右からこちらに進撃して来ているらしい」
「……それって要するに挟み撃ちにされかかってるってことじゃない？」
「まぁ、見方を変えればな」蓮はあっさり頷いた。
「ベルナット、戦場で重要なことを一つ教えてやる。戦況を有利に進めたいのであれば、常に敵より多くの戦力を維持することだ。敵が戦力を分化させた現状は、こちらにとってもありがたい」
「なるほど。つまり一方を倒してから、もう一方に攻撃をかけるんだね」

「まさか。そんなことをしていたら、戦ってる最中にもう一方から挟撃を食らうのがオチだ。狙うなら敵の数が一番少ないところだな」
「え？　でも、そんなところ……」
怪訝そうに眉を寄せるベルナットに、蓮は言った。
「ベルナット、お前にはやって貰いたいことがある。左右からやって来る敵がこのまま合流するのは望ましくない。一方を攪乱し、一時的に軍としての機能を喪失させる」
「部隊を分けるのかい？　でも、それじゃあ多数で少数に当たるって戦法が取れないよ」
「ああ、だからお前が率いる兵は十人程度だ。この班で東から来る二百名以上の部隊を足止めしてもらう」
「……冗談だろう？」
流石のベルナットもこれには顔色を失った。
いくらなんでも戦力差があり過ぎる。三倍の戦闘力を持つ相手が、十倍以上の規模でいるのだ。これに挑むのはただの玉砕行為でしかない。
もっとも、蓮としてはなんら無茶なことを言っているつもりはなかった。
「ベルナット、蜥竜の扱いに長けた者を十人選べ。ここには丁度いい小道具があるだろう」
「え？　……あ、そういうことか！」
ようやく得心が行ったように頷くベルナットの前で、蓮は淡々と指令を発した。
「総員、武器を取れ。敵軍の攻略を開始するぞ」

テッセラリウスの戦い？

初手でいきなりチャリオット隊を失った赤守の族長だが、彼はスクローファなどとは違い、激昂して理性を失うような真似をしなかった。

「ふ、うむ」

それでも、押し殺した唸り声を上げてしまうのは致し方ない。

ニュートは突き出た目をぎょろぎょろと動かしながら、平原からもうもうと立ち昇る黒煙を見上げた。

空気が乾燥していることもあって、未だに火の勢いは弱まる様子がない。さしもの強靭な肉体を持つ魔族でも、あの中を突破するのは無謀だ。

「人間どもめ、猪口才な手を使いおる」

ざわつき始めた配下の眷族を一睨みして黙らせつつ、ニュートは冷静に考えを巡らせた。

先鋒のチャリオットを失ったのは痛手だが、まだ戦力は守備隊の側が大きく上回っている。

となれば、ここは戦の常道に従うべきだろう。

自軍が敵に対して二倍の兵力を持っている際は挟み撃ちを仕掛けるべし――

以前、大陸中央で戦場を駆け回ったニュートがレオパルトら軍将たちから学んだ兵法だ。

「よし、部隊を二つに分ける。ハナダは東から、マダラは西から二百の兵を率いて奴らに攻撃をかけろ。一兵たりとも逃がすなよ。支配者たる我々に立てつくことの愚かさを、骨の髄まで叩きこんでやれ！」

族長の号令を受け、赤守の眷族たちによる兵は気勢を上げつつ、側面から敵陣へと回り込んだ。

後に残されたのはニュートを含む五十名強の小隊だ。族長の中に

はスクローファやレオパルトのように自ら先陣を切って戦う者もいるが、ニュートは後方で戦況を眺めていることの方が多かった。
もっとも、今回は戦場の中央で焚かれている火と、それに伴う煙が邪魔でろくに部隊の様子も伺えない。
かすかにニュートの元まで届くのは兵士たちの喚声と、鉄の打ち合う響きだけだ。
「ふむ、始まったか」
音の方角から察するに、どうやら人間たちは東側から進軍した部隊を集中して攻撃しているらしい。ニュートにとっては狙い通りの展開である。
「愚昧どもめ。小手先の計略程度ではどうにもならぬ、圧倒的な実力差というものを思い知らせてやる」
勝利の確信と共に嘯くニュートだったが、その余裕も長くは続かなかった。
異変の前兆を捉えたのは、戦場の後方に残っていた歩兵の一人だ。
ぼんやりと燃え盛る炎を眺めていた彼は、ふと煙の中でなにか黒い影がうごめいていることに気付いた。
「あ、んん？」
「おう、どうした兄弟」
「いや、なんか炎の向こうで動いてないか？」
「はぁ？　お前、なにを言って――」
横に並ぶ同僚は呆れたような声と共に、目をぎょろつかせる。
その飛び出た眼球に、黒曜石の鏃が突き刺さったのは直後のことだ。
「なっ、何事だ！？」
たちまち部隊のそこかしこから上がる悲鳴と狂乱の声。
突如、降り注ぎ始めた矢の雨にニュートは泡を食って吠えたてた。
「なに、伏兵だと！？　……いや、バカな！？」
テッセラリウスの周辺は兵を隠すことの出来ない平野である。奇襲を受けることはまずありえないはずだった。

「くそっ！　落ち着け！　落ち着け！　単なる石の矢だ！　臆することはない！」

冷静に考えれば、相手の武器は貧弱そのものだ。余程当たりどころが悪い限り倒れる者はいなかったが、混乱はそう簡単に収まらなかった。

もっとも、この程度はまだ序の口に過ぎない。矢の雨が止んだ後、更に信じられぬような出来事が起きた。

戦場で揺らめく炎の中から、人間たちの軍勢が忽然と彼らの前に姿を現したのだ。

「なんだとぉ！？」

これには流石のニュートも目を剥いた。

戦場の中央には人間たち自身の手によって炎の壁が作られていたはずだ。にも関わらず、連中はそのど真ん中を突っ切ってきたのである。

……不可解なことだ。

下手をすれば、いや、下手をせずとも丸焦げになって死んでしまう。炎の勢いはまだ強く、魔族の軍勢ですらあの中を突破するのは無理だろう。

だが、現実として人間たちの軍勢はニュートの目の前まで迫っている。

しかも、雄々しく吶喊（とっかん）するその姿は多少煤に汚れているだけで、火傷に苦しんでいるような気配は微塵もなかった。

「お、落ち着け！　落ち着け！　迎撃しろ！　奴らをこれ以上、近づかせるな！」

現れた人間たちの数は二百弱。兵数だけならば五十数名のニュート率いる小隊より遥かに上だ。

おまけに、守備隊側の兵士は突然の奇襲にすっかり浮足立っていた。いくら、魔族の戦闘力が人間の三倍とはいえ、これで十分な実力を発揮できるはずもない。

結果、押し寄せた人間の部隊によって、力で勝るはずの魔族たち

はろくな反撃も出来ず、次々に打ち倒されてしまう。
「落ち着け！　落ち着け！　戦列を維持しろ！」
その中で、蜥竜に跨ったニュートは自ら剣を振るいつつ、崩れかけた部隊を必死に纏めようとしていた。
しかし、人間たちの軍勢は既に彼の間近まで肉薄している。迫る人々の先頭には指揮官と思しき、漆黒の巨馬に跨った男の姿があった。
「きゃあっ！　ナイトメアだ！」
「逃げろ！　かっ、勝てる訳がない！」
馬上で剣を閃かせる軍服姿の男に対し、兵士たちは蜘蛛の子を散らすかの如く逃げ惑う。
中には槍を構えて突撃する兵もいたが、そういった者たちは例外なく黒馬の蹄に踏み倒され、あるいは男の振りかざす白銀の刃によって首を切り落とされていた。
「くっ、なにをしている！」
ニュートはあまりの不甲斐なさにきつく奥歯を噛みしめた。
部隊は既に壊滅一歩手前だ。本来ならば、逃げを打っていてもおかしくない場面である。
（だが、今はレオパルト様が見ているのだぞ……！）
圧倒的な戦力差がありながら人間に負け、おめおめ逃げ帰ったとなれば、あの苛烈な性格の将軍は自分を生かしておかないだろう。
最早、ニュートに取れる選択肢は数えるほどもなかった。
「おのれ！　かくなる上は一騎討ちだ！　敵将、覚悟！」
乾坤一擲の突撃をかけるニュートに対し、男は真正面から黒馬を走らせることで答えた。
やがて、すれ違った両者の間から刎ね飛ばされた首が一つ、くるくると宙を舞う。
数秒後、乾いた音を立てて地面を転がったのは、赤守の族長の頭部だ。
悶絶の表情と共に息絶えた敵将を見下ろし、蓮は感情のない声で

呟いた。

「その選択は間違いではない。ただ、その選択に至るまでの状況を作ってしまったのがお前の敗因だな」

戦況は決した。最後の砦たる族長を失った部隊は無残に雪崩を打って崩れ始める。

逆に勢いづいた人間は算を乱した守備隊に対し、容赦なく剣を振り上げ、襲いかかった。

積もり積もった人々の恨みは、魔族たちに逃げることすら許さない。

苛烈を極める残党狩りの後、生き残った魔族は誰一人としていなかった。

テッセラリウスの戦い？

「あーあ、ニュートの奴あっさり殺されちまったよ。あいつ、あんなに弱かったっけ」

鉱山の中腹に築かれた石道から戦場を眺めていたレオパルトは、ぺしゃりと額に手をやった。

高所からの視点を持つレオパルトには戦況の推移がよく分かった。一言で言うと、赤守の族長はしてやられてしまったのだ。

初手で人間側が戦場に置き捨てた藁束。あれが最初の仕掛けだった。

「一見、戦場の真ん中には炎の壁が出来たように見えたが、実際は部隊を通過させることが出来る程度の隙間が空いてた訳だ。これを利用して相手の主力を回避し、本隊に急襲をかけたのか……。あの指揮官、嫌な性格してんな！」

がらがらと笑い声を上げるレオパルトの隣では、一時的に牢屋から出された氷堂が両腕を後ろ手に縛られた状態のまま、石畳の上で膝を折っている。

氷堂は目を丸く見開いたまま、戦場を駆ける黒馬を。厳密にはその上に跨る人影を、愕然とした気分で見つめていた。

（間違いない。あれはサカキ司令だ。あの方もこの大陸に辿り着いていたのか）

自身が生き延びていることからも決してその可能性は低くないと思っていたが、実際目にすると言いようのない感動があった。

元より榊蓮は殺しても死ぬような人種ではない。伊達に大戦初期から百年近くも生き延びてきた訳ではないのだ。

「で、カナメ。あいつはお前の言うサカキとやらなのか？」

ふいに兜をめぐらせたレオパルトの前で、氷堂は慌てて口元を引き締める。

「さぁ、どうだろう。ここからではよく見えないな」

「おいおい、ようやく飼い主に会えた忠犬みたいな顔してたくせに下手な誤魔化し方するんじゃねぇよ」
「……自分はそんな顔などしていたつもりはないが」
「ここに水盤（かがみ）がないのが悔やまれるね。まぁ、あの指揮官の正体は分かった。どこの出身だかしらねぇが、てめぇの同類とは面白いじゃねぇか」
板金鎧の首元から、金属を爪で引っ掻いたかのような音が漏れる。どうやら喉を鳴らして笑っているらしい。
「さて、ニュートは死んだが守備隊の大半はまだ生き残ってるぜぇ？　あいつはここからどうする気だ？　まさかこのテッセラリウスを直接狙う気かぁ？」
興味深そうに呟くレオパルトの隣から、氷堂も戦場の様子を伺う。
（司令……）
黒馬に跨った蓮はじっと戦場を睨んだまま、次の一手を考えているかのようだった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「ライゼル、こちらの被害は？」
「しっ、死者二名。重傷者一名。軽傷者十三名です！」
蓮の後ろで幾本も火のついた松明を抱えていた禿頭の大男が、太い喉からかすれた声を漏らす。
奇襲で押し切り、早々に指揮官を討ち取ったこともあって、人間側の被害は極々少数だった。
むしろ、炎の中を強行突破してきたせいで軽い火傷を負っている者の方が多いくらいだ。
（少々強引な切り口だったが、その甲斐はあったか）
蓮は馬上から平原に散らばる敵兵の死骸をざっと眺め回した。

損害軽微の自軍とは対照的に、敵は退却の機を掴めず、全滅に至っている。

そもそも奇襲を受けた場合は一度部隊を下げて戦線を立て直すべきなのだが、敵の指揮官はそれをしなかった。

「……いや、厳密には出来なかったというべきか」

蓮はテッセラリウスの中腹を見上げる。そこには眩い光に照らされ、鈍く装甲を輝かせる板金鎧の姿があった。

レオパルトは先端が開かれた当初から観戦者を気取っているものの、ニュートが討たれた後も一向に動く気配がない。

あの様子では守備隊が全滅するか、テッセラリウスにでも攻め込むかでもしない限り、傍観に徹するつもりだろう。

ならば、こちらは先に残る兵力を粉砕するだけだ。

「よし、次は西側から回り込んだ部隊へと攻撃をかける。擲弾班（てきだん）は火の準備をしておくように」

短く指令を発した蓮は、ニュートを撃破したことで士気を倍増しさせた兵を率い、半々に分かれた守備隊の一方へと襲いかかった。

その頃、副長マダラ率いる西隊二百余名は戦場の中ほどで停止していた。

当初、彼らは副長ハナダ率いる東隊と敵軍を挟み撃ちする予定だったのだが、その途中で本隊が奇襲を受けたという報が入って来たのだ。

マダラは困惑した。そもそも、本隊は奇襲を受けるような位置にいなかったはず。にも関わらず、後方からは鬨の声が上がり、剣戟の音が響いている。

結局、マダラは方向転換して本隊の救助へ向かおうとしたものの、その時にはもう解放軍の戦士たちが部隊の後方に食らいついていた。

「擲弾班、放て！」

両軍が接触した直後、蓮はすかさず背後の兵に指示を放った。

解放軍は装備の異なる兵がそれぞれ百ずついる。その内、木と石の武器を備えた百人隊は鉄剣の代わりに腰から陶製の瓶をぶら下げ

ていた。
陶瓶の口に突っ込まれているのは導火線の代わりの羊皮紙（書庫から持ち出したものだ）。そして、瓶の中に封入されているのは大荒原で産出された原油。これに松明で火を灯せば立派な武器となる。
後方の擲弾班は大きく腕を振り被ると、この即席の火炎瓶を敵陣の中央目掛けて投げつけた。
予期せぬ襲撃を食らい、混乱の最中にあった守備隊の兵にはたまったものではない。次々に炸裂する紅蓮の花の中で悲鳴と断末魔の声が木霊する。
もっとも、彼らにとっての地獄はまだそこが入り口に過ぎなかった。
「全軍、突撃！」
馬上で剣を振り上げる蓮に率いられた解放軍の戦士たちは、炎に巻かれて崩れかけた戦列目掛けて喊声と共に斬り込んだ。
混乱の最中、怒涛のように押し寄せる部隊に、さしもの屈強な魔族もろくな抵抗をすることが出来ず、次々と地面に引き倒されて首を切り落とされてしまう。
「くそっ、こいつら調子に乗りやがって……！」
「ハナダの部隊はまだか！　こっちはもう持たないぞ！」
押され始めた西隊にとって、唯一の希望は未だに姿を見せない友軍の存在だ。彼らと合流すれば、二百にも満たない敵兵など一気に殲滅出来るはずだった。
しかし、その東から回った部隊がいつまで経っても現れない。結果、軍勢はじりじりと数を減らし、中には耐えきれず逃亡し始める兵まで現れる始末だ。
（よし。ベルナットの陽動は成功したようだな）
蓮は必死の抵抗を続ける敵軍を他所に、戦場の東部へと首をめぐらせていた。
敵に増援が現れていないのは策が上手く機能している証拠だ。東西に分かれた部隊が合流する前に、この戦いは決着するだろう。

そこで再び戦場に眼をやった蓮は、一部の敵兵が強引に前線を突破しようとしているのを見た。

どうやら敵将はいつまで経っても現れぬ援軍に焦れて、無理矢理こちらの指揮中枢を叩きに来ているらしい。

「なるほど。族長が族長ならば、その部下も考えることは同じか」

蓮は小さく呟くと、先ほどの交戦で敵兵から強奪した槍をおもむろに構えた。

直後、その片手が閃き、空を駆けた槍が狙い違わずマダラの頭部を貫く。

もんどり打って倒れたマダラは、そのまま二度と起き上がることはなかった。

「指揮官は倒れたぞ。一斉にかかれ！」

蓮の号令に従い、解放軍の戦士たちは屠殺機の如き容赦のなさで敵兵を蹂躙する。

戦場の西側から守備隊の兵士が消えたのは、それから数分後のことだった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「ほぉ、やるなあいつ。ニュートの奴があっさり殺されるわけだ」

山腹から戦場を眺めていたレオパルトは、蓮の手際に感嘆の息を漏らした。

現状、西側から回り込んだ部隊は副長マダラを含む半数以上が殺され、僅かな兵のみがテッセラリウスの麓へと逃げ帰っている。

その上、ようやく煙の向こうから姿を見せ始めた東軍も、何故か一戦交えた後のような半壊状態となっていた。

「なんだありゃ？　東側の部隊がボロボロになってやがる。連中、まさか伏兵を仕込んでやがったのか？」

怪訝そうなレオパルトの言葉を、氷堂は内心で否定する。
（いや、司令は無意味に兵力を分散するのを嫌う。もし伏兵を使うとしたら、西側の部隊を前後から挟み撃ちする形で用いただろう。それがないということは、解放軍の兵力は今見えているものでほとんど全てのはず。東側に回った部隊はなにか足止めの策を食らっていたに違いない）
その単なる足止めの策に敵が甚大な被害を受けているのも、氷堂にとっては見慣れた光景だ。
少数の兵力を活用し、絶大な効果を発揮させるのは榊蓮の最も得意とすることだった。
やがて、敵を打ち破った解放軍は勢いに乗ったまま、新たに現れた部隊へ猛然と襲いかかった。
戦法は先ほどと変わらない。先鋒が接触した直後、後方の兵が次々と敵陣に火炎瓶を放り込む。
そうして混乱した相手に対し突撃をかけ、一挙に粉砕する。敵が疲弊していた分、その効果は割り増しだ。
山腹まで届く阿鼻叫喚の中。戦いの結末を見届ける前に、レオパルトは高台から身を翻した。
「レオパルト、最後まで見ないのか」
「ふん、どうせこの勝負は守備隊の負けさ。お互いの残存兵力は同程度だが、指揮官の質が違いすぎる。大方、残った連中もニュートの二の舞だろう。これ以上は見る価値なんてねぇよ」
楽しげに笑うレオパルトの前には、既に彼の副官が直立不動の体勢で立っていた。
「よう。ゲパルト、出撃の準備は出来たか？」
「は……現在、部隊は街の入り口付近に集結しております」
「上出来だ。今回は怪我人抜きで戦うぞ。連中の手の内は大体分かったし、流石にこのテッセラリウスを無防備にしておくことは出来ねぇからな」
「は……了解です。では我ら親衛隊のみで出ると致しましょう」

大仰に頷く副官と連れ立って、レオパルトは石道を降りて行ってしまう。

残された氷堂はもう一度、戦場を見下ろした。レオパルトの推測通り、戦況は解放軍の圧倒的優勢だ。決着もそう遠くない。

「そうか。ならば、自分もやるべき仕事が出来るというものだ」

背の高い板金鎧が完全に見えなくなったところで、氷堂は石畳から立ち上がった。

いつの間にか、その両腕は拘束から解かれている。地面に投げ捨てられたのはばらけた荒縄だ。

(連中め、ボディチェックが甘いな。はなから人間の力を舐めているからだ)

軍服の懐に隠し持っていた短刀を手の中で弄びながら、氷堂は鉱山の麓へと向かった。

目指すは人間の奴隷たちが囚われていた檻である。彼らを解放、扇動すればレオパルト不在の守備隊程度なら制圧することが出来るだろう。

「司令が戦っているというのに、副官の自分が捕まったままでなどいられないからな」

自嘲を交えた笑みと共に、氷堂は小さく呟いた。

テッセラリウスの戦い？

「ライゼル、こちらの被害は？」
「死者十八名。重傷者三十一名。軽傷者五十七名です！」
「そうか、まずまずだな」
戦場に積まれた敵兵の屍を眺めながら、蓮は軍刀に張りついた血糊を宙に振り払った。
決して少なくない被害だが、戦力比を鑑みればこれが最低限の損失だ。
とはいえ、蓮自身はこの段階で五十名の兵士が残ればいい方だと思っていた。
その想定が外れたのは、解放軍側の士気が予想以上に高かったためだ。
「勝った！　勝ったぞ、俺たちが勝ったんだ！　解放軍万歳！」
「ざまぁみやがれ、ニュートのクソ野郎！　今までででかい顔しやがって！」
「おい、まだ息してる奴がいるぞ！　殺せ！　殺せ！」
戦いが終わった後も、興奮さめ切らぬ人々は執拗に生き残った魔族を探し出してはその首を剣で掻き切っていた。
現状、解放軍を構成する兵士の大半はテッセラリウスで鉱山奴隷だった過去を持っている。
今回の戦いで自軍の士気が高かったのもそのためだろう。復讐心ほど人々を結束させるものはない。これに正義や自由といったスパイスを加えれば最高である。
「……どこの世界でも人間の本質は変わらんな」
蓮は暴徒と化した人々を一瞥した後で、そびえ立つ大鉱山へと向き直った。
テッセラリウス守備隊との戦いは所詮、前座だ。本命はまだこれからである。

「サカキ殿、俺たちゃこれからどうするんです？　テッセラリウスに攻め込むんですかい？」
「いや、撤退準備だ」
返り血のついた顔で詰め寄ってきた禿頭の兵士――ライゼルに、蓮は短く答える。
途端、さざめきにも似たざわつきが人々の間から上がった。
「て、撤退？　ここまで来て撤退だって！？」
「そうだ。これから戦うのは錬鋼の一族。さっきまでの雑魚どもとは違う。真正面からぶつかって勝てる見込みはない」
「じゃ、さっきみたいに一旦下がって、その後、攻撃を……？」
「まぁな。もっとも、今回下がるのは北部の森林地帯までだ。少々、強行軍になるから、今の内に休息をとっておけ」
この言葉にはライゼルも顔をひきつらせた。
なにせ彼らは今までに三度の戦闘を経ている。体力的にはもう限界だ。
この上、長距離マラソンでもさせられようものなら心臓が破裂しかねない。
「参りましたぜ。サカキ殿は本当に容赦のない人だ」
「かもしれんな。だが、血反吐を吐く程度で勝利を掴めるのなら安いものだろう」
「そりゃそうですが……」
「ああ、それと敵が出現した瞬間に逃げを打つと罠の存在を怪しまれる可能性がある。一旦は敵の突撃を受け止め、その後に退却するぞ」
「ほ、本気ですか！？　相手はあの錬鋼の一族なんでしょう！？　あいつら、全身が鉄の塊みたいなもんなんですぜ！？」
「知っている。だから、今の内に覚悟を決めておけよ」
「……死ぬ覚悟を、ですかい？」
「いや、生き残る覚悟を、だ」
蓮は軽く黒馬の手綱を引いた。

丁度、その頃。テッセラリウスの外周部でも動きがあった。
固く閉じられていた門扉が開き、レオパルト率いる親衛隊がとうとう戦場に姿を見せ始めたのだ。
（予想より早い。奴め、既に出撃の準備をしていたか）
幾名かから聞いた話によれば、レオパルトは突撃好きの猪武者ということだったが、なかなかどうして先見の明がある。
普通、攻撃に特化した武将は絡め手に弱いものだが、こういったタイプは勘が鋭く、異様にしぶといのが常だ。
「流石にハンニバルほどではないにしろ、氷堂を倒しただけの実力は持っているらしいな」
敵軍は全部で百名前後。構成員は鎧甲冑の姿をした錬鋼の一族で、なおかつ全員が立派な体躯の蜥竜に騎乗している。
これを見た人々は勝利の熱狂を忘れ、総身を縮み上がらせた。先ほどまで矛を交わしていた敵が可愛く見えるほどの重圧を、肌越しに感じてしまったのだ。
「よし、全員適当に散らばれ。敵はこちらへ突撃をかけてくるはずだ。これを一度いなしてから北部の森林地帯に逃げ込むぞ」
今度ばかりは反論もなかった。むしろ、今すぐ持ち場から離れたそうな顔をしている者がほとんどだ。
それでもかろうじて戦場に留まっているのは、人間としての意地に他ならない。
「お、俺たちはニュートの奴をぶっ倒したんだ。あいつらだって……！」
「錬鋼の一族がなんだ！　四軍将がなんだ！　人間の力を見せてやる！」
震える手で剣を握り締め、やせ我慢としか思えないような気勢を上げる戦士たち。
それに応えるかの如く、レオパルト率いる親衛隊も槍と盾を銅鑼代わりに打ち鳴らす。
「来るぞ」

蓮の短い呟きが放たれた直後、五重の陣を敷いた敵兵は怒涛の勢いで突撃を始めた。
先頭に立つ蓮は眉一つ動かしていないものの、その背後に佇む人々はとても平静でいられない。
地響きと共に迫る敵軍に身を竦め、きゅっと唇を絞り、悲鳴を噛み殺すので精一杯だ。
（さて、この戦で何人が生き残るか……）
内心で非情な考えを巡らせながら、蓮は軍刀の先端を敵軍へと差し出す。
「迎え討て」
やがて、激突した両軍の間から悲鳴と怒号が響き渡った。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△

「ふん、屑どもが。最初からそうしてりゃいいものを」
散り散りになって逃げ出す人間たちを見て、レオパルトは小さく鼻を鳴らした。
一族の部隊を迎え撃った解放軍の戦士たちだが、彼らは先ほどの奮戦が嘘だったかのように呆気なく打ち負け、遁走していた。
レオパルトの側からしてみると、予想より手応えが薄く、肩すかしをくらったような気分だ。
ただ冷静に考えてみると、どうにも敵軍の対応には引っかかる部分がある。
二十の兵を五列に並べて突撃する横陣は破壊力に優れ、相手を高波の如く飲み込むのが常だったが、今回レオパルトらが仕留められた敵兵は全体の四分の一にも満たなかった。
（連中め、まともに戦う気がなかったのか？　それなら、さっさと逃げてりゃ良さそうなもんだが……。いや、待て待て。相手はカナ

メの同類だ。なにか策を用意していてもおかしくねぇな）

数秒、逡巡にとらわれたレオパルトだが、結局すべきことは変わらない。

どうせ、人間の持つ武器では自分たちを倒すことなど出来ないのだ。現に今の交戦でも傷を負った者は皆無だった。

「ゲパルト、連中の後を追うぞ。あの黒髪の指揮官だけは殺すなり捕まえておくなりしておかねぇと、後々面倒なことになりそうだ」

「は……了解です」

重々しく頷く副官の隣で、レオパルトは蜥竜の手綱を引いた。

人間たちが逃げ込もうとしているのは北部に広がる森林地帯だ。殿には黒髪の指揮官。未だにその乗馬であるナイトメア共々健在である。

それどころか、両者にはレオパルトらの突撃を受けたにも関わらず、怪我一つ見受けられなかった。

（交錯の際にこっちの攻撃をいなしやがったのか。厄介な奴だぜ）

頭ではそう思いつつも、レオパルトは言いようのない高揚を感じていた。

元々、錬鋼の一族には強者を好む性質がある。中でも、レオパルトは特にその傾向が強い。

豹面の奥で笑みを押し殺しながら、レオパルトは逃げる人々に向けて槍を突き出した。

「そらっ、追ったてろ！　一人たりとも生かして帰すなよ！」

先頭を走る族長に続き、鎧甲冑に包まれた部隊が平野を駆け抜ける。

とはいえ、彼らの騎乗している蜥竜は馬に比べると鈍足だから、全力で逃げる人間たちとの差はなかなか縮まらない。

それでも、疲労に負けて脱落した数名の戦士はたちまち後続の騎兵に押し潰され、見るも無残な挽き肉と化していた。

「走れ！　走れ！　死にたくなければ、走るんだ！」

黒髪の指揮官は最後尾で部隊を叱咤していたが、結局、彼らが森

に逃げ込む頃には更に十数名の人々が犠牲となっていた。
しかも森に入ったからといって安泰とは限らない。流石に木々の生い茂る中で横陣を構えることは出来なかったものの、レオパルトとその眷族は個々に散開し、逃げ惑う人々へ槍を振り下ろし始めたのだ。
「ひゃぁ！　いい獲物だ！」
「人肉！　人肉ぅ！」
無残な人間狩りが行われる中、友軍の撤退を支援していた黒髪の指揮官は、ふいに口元へ折り曲げた指を押し当てた。
――ピィィィィッ！
直後、甲高い指笛の音が森の中に響き、追走していたレオパルトは怪訝そうに眉を寄せた。
「なんだぁ？　何かの合図か？」
「は……もしや罠かもしれません。ここは一度、隊を集めて警戒した方が……」
ゲパルトがそう忠告しかけたところで、異変は起きた。
指笛の音が鳴ってしばらくもせずに、森の奥から突如発生した白い煙が発生したのだ。
白煙は逃亡する人々と、それに追いすがる魔族たちを纏めて飲み込み、彼らの視界を封じてしまった。
「ちっ、煙幕だと！？　奴らめ、小癪な真似を！」
一瞬で狭まった視界に、レオパルトは苛立たしげな舌打ちを漏らす。
人間たちに追撃をかけていた錬鋼の一族の兵士も、こうなっては戦うどころではない。
それどころか上手く蜥竜を走らせることができず、真正面から木に衝突する者まで出始めてしまう有様だった。
「全員、速度を落とせ！　さっさとこの煙幕を抜けるぞ！　この先の街道で部隊を立て直す！」
すかさず放たれる号令。それと被る形で、二度目の指笛は鳴り響

いた。
　同時に、レオパルトは言いようのない悪寒が背筋に走るのを感じた。
　例えるならば、首元に剣を突き付けられたような感覚。喉笛が斬り裂かれるまで、ほとんど猶予はない。
「いかん！　全体、止まれ！」
　半ば反射的に声を振り絞ったレオパルトだが、それも一手遅かった。
　既に後方で待機していた伏兵たちによって、密生する木々の間には頑丈なロープが堅く張り巡らされていたのだ。
　その結果、錬鋼の一族を乗せていた蜥竜は足払いをかけられ倒れる形で転倒し、騎手を地面へと投げ出してしまった。
「ぬわっ！　何事だ！？」
「うぎゃあ！」
　丁度、金属製の鍋ややかんを金槌で叩いたかのような音が、そこかしこで響き渡る。
　一方、部下たちより早く伏兵の存在に気付いたレオパルトは、蜥竜から転落しつつも素早く受け身を取っていた。
「くそっ！　あいつら、やってくれるぜ！」
　彼らが投げ出された先は街道のど真ん中だ。どうやらロープは街道の手前。森と森の切れ目に設置されていたらしい。
　わざわざこの場所を選んだのは森の腐葉土よりも、踏みしめられた街道の土の方が、落馬した相手に致命傷を与えられると見込んでのことだろう。
（……が、残念だったな。サカキとやら）
　レオパルトら錬鋼の一族は鎧甲冑の肉体を持つ魔族である。地面と衝突した程度ならばどうということはない。
　衝撃にうめきつつも、煙幕の中から次々立ち上がる同胞の影を、レオパルトはざっと見渡した。
「ふん、してやられたか。あいつらめ、この隙に逃げやがったな」

「は……どうやら最初から伏兵を仕込んでいたようです。煙幕を張りつつ、罠で足止めする。なかなか効果的な手段ですな」
族長の傍らまでやって来たゲパルトは、兜に張りついた土を片手で払い落とした。
「今回は痛み分けといったところですか。我らは赤守の族長とテッセラリウスの守備隊を失いましたが、きゃつらの部隊もこの戦いで半壊状態になったはず。これでしばらくは連中も動けますまい」
「まぁな。だが、問題なのはあの黒髪の指揮官を逃がしちまったことだ」
「は……ですが、後の楽しみが増えたと考えれば良いのではないでしょうか」
「おいおい、ゲパルト。お前は俺が戦争を楽しむような人間に見えるのか？　――ああ、その通りだよ。よく分かってるじゃねぇか」
がらがら喉を鳴らしながら、レオパルトは副官の背を籠手で叩く。
「ま、いい。今日の戦はここまでだ。各自、蜥竜を回収しろ。テッセラリウスに引き上げるぞ」
『了解！』
族長の指令を受け、一族の兵士たちは揃って帰り支度を始める。
街道を覆う煙幕の中から、低く沈んだ声が放たれたのはその時のことだ。
「なんだ、もう帰るつもりか。もう少しこの場に留まっていればいいものを」
背後から響く声を受け、レオパルトはぴたりと足を止めた。
振り返れば、目に入るのは白い煙幕の中にぽっかり浮かんでいる人影。
翻る外套の形からして、ニュートらを斬殺した黒髪の男であることは間違いない。
「よう。てめぇ、尻尾を巻いて逃げたんじゃなかったのか？」
挑発的な台詞を放つレオパルトの前で、男は軽く笑ったようだった。

「いいや。ただ、少し時間が欲しくてな。こうして足止めに来た訳さ」
「時間だって？　そいつはどういう――」
言いかけたレオパルトは、そこでふと微かな地響きの音に気付いた。
最初は遠く、やがて徐々に近くへ、地面を揺らす振動と共にそれは接近してくる。
（これは。まさか。いかん。まずい！）
たちまち、脳裏をよぎる悪魔的な閃き。
長年に渡って戦場に立っていた経験が、自軍に襲い来る脅威の正体をレオパルトに察知させていた。
「ぜっ、全員、逃げろ！　大急ぎでこの場から離れるんだ！」
悲鳴染みた号令をかけるレオパルトだが、既に地響きの源は彼らの間近まで迫っていた。
刹那、街道に満ちる煙幕を切り裂いて現れたのは、分厚い鋼鉄に覆われた鈍色の車体だ。
濁流の如く討ちかかって来た重チャリオットに、一族の兵士たちは成す術もなく呑み込まれてしまった。

テッセラリウスの戦い？

「やれやれ、どうにか上手く行ったか」

街道の端で重チャリオットの突撃を回避した蓮は、塵芥の如く引き潰される敵兵を無感動な眼差しで眺めていた。

この重チャリオットは戦端が開かれた当初、テッセラリウスの守備隊から鹵獲したものだ。

遊撃隊となったベルナットら十名ほどの戦士たちはこれを操り、守備隊の東軍を撹乱した後、街道に残るレオパルトたちへと急襲をかけたのだった。

頑強を誇る錬鋼の一族も、煙幕からの不意討ちの上、個々に散らばった状態ではなんの抵抗も出来ない。

結果、超重量の戦車による走行は容赦なく彼らを粉砕し、蹂躙し、轢殺（れきさつ）していた。

「やったのか……？」

チャリオットが街道の向こうへ消えてから数秒後。伏兵として街道付近に身を潜めていたルシュアらと、逃げたと見せかけていた解放軍の戦士たちが、蓮の後ろから恐る恐る顔を覗かせる。

煙幕が晴れた後、街道に残っているのはひしゃげ、原型を留めていない鎧甲冑ばかりだ。

チャリオットの猛威にさらされた一族の兵士たちは、大半が物言わぬ屍と化していた。

しかし、運良く致命傷を逃れた数名の魔族は、未だに息を残している。

その中には、兜の豹面を醜く歪ませたレオパルトの姿もあった。

「ふ、ふざけやがって！　てめぇら、よくも俺の同胞を！　御大将から預かった兵士たちを！　……許さんっ！　全員、ここから生きて帰れると思うなよ！」

ひび割れた鎧の下から青緑色の血を流しながら、レオパルトは激

怒の咆哮を上げる。
鬼気迫る勢いに押され、街道の端に集まった人々はびくりと身を竦めた。
「サカキ殿、あいつまだ生きて！」
「ああ、大した打たれ強さだ」
蓮が冷静に状況を分析している間にも、生き延びた一族の兵士たちは次々に立ち上がり始めていた。
確かに、重チャリオットの急襲は敵部隊に壊滅的な被害を与えた。しかし、その全てを沈黙させることは出来なかったのだ。
「くっ、しぶとい！　火炎瓶隊、奴らの息の根を止めてやれ！」
すかさず号令を放つルシュア。同時に火のついた陶瓶が幾つも宙を舞う。
放たれた火炎瓶は狙い違わず生き残った兵士に直撃し、彼らを火達磨へと変えた。
しかし、一族の兵士は全身を焼かれているにも関わらず、まるで応えた様がない。これにはルシュアもぎょっと目を剥いた。
「効かない！？」
「やはりダメか。この程度の火力ではびくともせんな」
錬鋼の一族が身に纏っているのは単なる外骨格ではない。正真正銘、鋼鉄の鎧だ。
恐らく溶鉱炉に投げ込みでもしない限り、彼らを焼き滅ぼすことは出来ないだろう。
最後の切り札と呼べるものが消え――しかし、蓮の表情に動揺の色はない。
「てめぇ……なにを余裕ぶってやがる。お前の策はもう種切れだろうが！　貧弱な人間風情が俺たちに！　錬鋼の一族に！　敵うとでも思ってんのか！」
レオパルトは体に纏わりつく紅蓮を振り払いながら、腰の剣を抜き放った。
族長に続き、抜剣した一族の兵士は全部で十名強。個々の戦闘力

を考えれば、これだけでも解放軍の残存兵力を虐殺するには十分な数である。

「サカキ殿、敵が来るぞ！」

「そうだな。こうなっては仕方あるまい」

ざわめき始める人々の前で、蓮は軍刀の鯉口を切った。

「俺が出る」

鈍色の刃が素早く抜き放たれ、討ちかかる鎧甲冑をすれ違いざまに切り捨てる。

一撃で胴を撫で斬りにされた一族の兵士は、上下に肉体を分割されたまま地面を転がった。

「なっ、てめっ！？」

瞠目するレオパルト。その間にも、蓮は切り返した刃で迫る二人目の敵を股間から頭頂部まで両断している。

元々、錬鋼の一族は頑強な肉体こそが最大の武器であり、動き自体は人間よりも鈍重だ。

加えて、負傷によって全力を出せない状態ならば、零式軍刀を携えた蓮の敵ではない。

「こ……の！？」

大上段に剣を構えて打ちかかったゲパルトは、彼自身にも気付かぬ内にその両腕を切り落とされていた。

ないはずの腕を振り抜こうと体勢が崩れたところで、強烈な回し蹴りが鎧の胴部に放たれる。

ゲパルトは堪え切れず背後の味方に衝突し、仰向けに倒れた。その胸板に鈍色の刃が突き立ったのは直後のことだ。

続く一族の兵士たちも、首を刎ねられ、胸板を裂かれ、鋼鉄の甲冑をいとも容易く寸断されて、うつぶせにばたばた倒れていく。

結局のところ、彼らの死は数秒遅いか早いかに過ぎず、最終的にはチャリオットの難から逃れた兵士も一人残らず蓮の手で斬り殺され、街道に無残な屍を晒すこととなった。

「う、お、あ……」

一方、無敵を誇る軍勢を全滅させられたレオパルトは、言葉も出せない。

悶絶する錬鋼の族長に、蓮は軍刀の先端を突き付けた。

「降参しろ、レオパルト。お前には色々と聞きたいことがある」

「ふっ、ふざけるな！　こんなことが……こんなことがあってたまるか！　俺たちは錬鋼の一族だぞ！　このレギオニールの覇者だぞ！　それが、たかが一個の人間に……！」

「一個の人間ではないさ。お前をここまで追い詰めたのは群の力だ。レオパルト、お前は自分の一族の力を過信し、人間の力を舐めた。その結末がこれだ」

「ほざけ！　てめぇら人間が俺たちに勝っている部分なぞ、一つもねぇだろうが！」

「かもな。だが、強者が必ずしも勝者になるとは限らない。お前も将軍ならば、そのことは百も承知のはずだ」

淡々と放たれた台詞に、レオパルトはぐっと押し黙った。

いくら叫ぼうが喚こうが、既に勝敗は決してしまっている。

所詮、蓮からして見ればレオパルトの主張など、負け犬の遠吠えに過ぎない。

「……まだ、俺たちは負けた訳じゃねぇ」

だが、レオパルトは蓮の言葉を否定するかの如く、己の剣を正面に構えた。

「錬鋼の一族は最強だ！　例え俺一人になろうとも、てめぇらをブチ殺すには十分なんだよ！」

「やる気か、レオパルト。無駄な足掻きを」

「黙れ！　てめぇだけは……！　てめぇだけは生かして帰さん！　軍将の名にかけて、あの世に送ってやる！」

怒号と共にレオパルトは上段に剣を振り被り、全身の力を込めて叩きつけた。

錬鋼の一族の筋力は人間よりも遥かに高い。これを正面から受け止めた蓮は、勢い余って街道の中央から端まで跳ね飛ばされてしま

う。
その隙を追って振り抜かれる凶刃。巻き込まれた木々と解放軍の戦士たちが、揃って稲穂の如く伐採される。
「サカキ殿！」
「離れていろ！　死ぬぞ！」
身を屈めて剣撃をかわした蓮は、下段から軍刀を逆袈裟に斬り払った。
しかし、レオパルトは素早く刀身をかち合わせ、そのまま鍔迫り合いに持ち込む。
単純な腕力勝負では流石に不利だ。じわりと重いプレッシャーが、蓮の全身を覆い包んだ。
（ちっ、この真改とまともに打ち合えるとは……）
本来、蓮の零式軍刀は鉄の塊程度なら容易く両断してしまうほどの切れ味を秘めている。
にも関わらず、レオパルトの剣は幾重打ち合ってもまるで応えた様子がない。恐ろしい頑丈さだった。
「く、はは、俺たち一族の肉体をぶった切った剣も、このスティンガーには敵わないらしいな」
額同士がぶつかりそうなくらいの距離まで豹面を迫らせながら、レオパルトはがらがらと喉を鳴らした。
「錬鋼の一族はその生涯に渡って、一振りだけ己の半身となる武器を生み出す！　この武器は朽ちず、折れず、砕けない！　そこいらにある凡百のなまくらとは出来が違うんだよ！」
「そいつはすごい。後でベルナットにでもくれてやろう」
感心した風に呟きながら、蓮は噛み合う刀身を滑らせた。
刃を弾き、距離を取ったところで、今度は平突きの形で軍刀を突き出す。
レオパルトはそれを真上から叩き落とすと、捻るようにして刀身を跳ね上げた。
蓮は喉元を狙う刃を迎え撃って、真横から胴を払いにかかる。

しかし、真改の先端はレオパルトの甲冑を浅く切り裂いただけに終わった。
「ハッハハハッ！　いいぞ！　緑青の血が燃える！　もっとだ！　もっと本気を出せ！」
けたたましい笑い声を上げながら、レオパルトは幾度も剣を打ちつけた。
一方、蓮は力任せに押しこまれる連撃を、技量と速度で受け流していた。
息をつく間もない凌ぎ合いの中、競り勝っているのはレオパルトの方だ。
人間としては最高峰の身体能力を持つ蓮だが、それでも魔族との間には越えられない力の差がある。
「……仕方がないな」
蓮は小さく呟き、真横に振り抜かれた刃を後方宙返りで回避した。
続いて、斬り倒されかけた木の幹を蹴り、空中で刀を横一閃させる。
飛矢の如き勢いで放たれた斬撃を、それでもレオパルトは難なく剣の腹で受け止めた。
「どうした！　お前の力はその程度か！」
レオパルトは哄笑しつつ、背後へ降り立った蓮に向け、剣を掲げる。
その瞬間――レオパルトは振り向きかけた態勢のまま、ずるりと足を滑らせた。
別段、地面がぬかるんでいた訳ではない。厳密にいえばそもそも足を滑らせたのとも違う。
本人も気付かぬ内に、レオパルトの脚甲は膝から下にかけて綺麗に切断されていたのだ。
「う、お！？」
バランスを崩し、どう、と音を立てて上半身から倒れ込むレオパルト。

彼が自らの肉体に生じた異変を知ったのは、その時のことだった。
「なっ！？　い、いつの間に！」
「鈍い奴め。今頃気付いたのか」
蓮は刀の背で肩を叩きながら、軽い調子で答える。
「上からの攻撃に気を取られている間に、両足を払ってやったんだよ。お前の眼には見えない程度の速度でな」
「なんだと……！？　てめぇ、まさか今まで本気を出してなかったのか！？」
「いや、無傷で捕虜を確保したかっただけだ。困難なようだから諦めたが」
「それを手抜きって言うんだろうが！」
「手抜きはしていない。手加減はしていたがな」
「ぐ、う、お……！」レオパルトは豹面の奥から怒りと屈辱の混じった呻きを漏らした。
「な、舐めやがって！　貴様の思い通りになどさせるか！　俺にも武人の意地がある！」
咆哮と共に、自らの胸板目掛けて愛剣の先端を突き出すレオパルト。
だが蓮はそれを許さず、軍刀を一閃させるなり、レオパルトの右腕を肩から斬り飛ばしてしまった。
「がっ！？」
「勝手な真似はやめて貰おうか。敵情を得る前に、将軍であるお前を死なせる訳には行かん」
「くそっ！　殺せ！　殺せよ！　てめぇに武人の心はないのか！？」
「ない。俺は武人ではなく、軍人だからな」
全身から青緑色の血を撒き散らしながら喚き散らすレオパルトに、蓮は冷たく言い放った。
一方、街道から離れた場所で様子を伺っていた人々は、戦いが終わったことでようやく姿を見せ始める。
その先頭には、驚きに目を見開くルシュアの姿があった。

「すごい……。まさか、四軍将の一人をこうもあっさり倒してしまうなんて。その気になれば、あなた一人でも一族の兵士全てを制圧出来たんじゃないのか？」

「冗談だろう。その前に体力が尽きてしまうさ」

苦笑交じりに答え、蓮は額に浮かんだ汗を拭った。

一応、平静を装っている蓮だが、その内情は見た目ほど穏やかではない。

そもそも、蓮が用いている神経加速装置には幾つかの欠点がある。その一つは神経、ひいては肉体に対する負担が激増することだ。（最初の守備隊との交戦時も含め、合計稼働時間は五分弱といったところか……一応、まだ余裕はあるな）

神経加速装置の最大稼働時間は約十分。それ以上の連続使用は肉体に障害を残す危険性もある。

もし蓮一人で百の軍勢と戦えば、例え勝てたとしても廃人と化してしまうだろう。

現にたった五分間稼働させただけでも、蓮の体には抗いがたい疲労感が溜まっていた。

「ともあれ、これでレオパルトとその親衛隊は制圧した。後はテッセラリウスに残る兵を倒すだけだ」

「……そうか。そういえばまだ鉱山には敵が残っているのだったな」

勝利に浮かれかけていたルシュアは、気を引き締め直した。

「まぁ、守備隊を倒し、錬鋼の一族を撃破した以上、テッセラリウスに残っているのは負傷兵がほとんどのはず。恐れることはない。ベルナットと合流した後、一気に畳みかけるぞ」

『応！』

蓮の号令に応える人々の顔には疲労の色が残っていたものの、その声に宿る力は一向に衰えていなかった。

テッセラリウス解放

その後、チャリオット隊を率いるベルナットと合流し、テッセラリウスへと迫った解放軍の戦士たちだが、結果的にその戦意は空回りすることとなった。

彼らが鉱山へ到着した頃には、既に内部からの反乱で残る守備隊も全滅していたのである。

代わりにテッセラリウスの麓で蓮とベルナットたちを出迎えたのは、フレームの細い眼鏡をかけた軍服姿の男だ。

「お待ちしておりました、サカキ司令」

丁重に頭を下げる男の前で、蓮はナイトメアの背から飛び降りた。

「久しいな、氷堂。まさか、また生きて会えるとは思わなかったぞ」

かつての戦友との再会で、普段の仏頂面には珍しく笑みの表情が浮かんでいる。

一方、ベルナットを除く解放軍の面々は、蓮とよく似た格好の男を前に小さく首を傾げていた。

「サカキ殿、知り合いか？」

「かつての副官だ。名を要氷堂という」

「……カナメ？　変な名前だな」

ルシュアの正直すぎる台詞に氷堂は顔をひきつらせる。

姓名が前後逆転しているような名前の作りは、彼自身のコンプレックスの一つでもあった。

「司令、そちらの方々は？」

「ベルナットとルシュアだ。紆余曲折あって共に戦っている」

「なるほど。となると、やはりアクリオンの解放軍を率いているのは司令だったんですね」

納得した風に頷く氷堂だったが、蓮は隣に佇むベルナットにちらりと視線を向け、

「そいつは間違った情報だな。俺は作戦の指揮をしているだけだ。

事実上のリーダーはこいつさ」
「『金狼』ベルナット・クーガですか……。自分もゲリラ活動を続ける内に、あなたの名前は聞き及んでいます。いつか、こうして会いたいと思っていた」
「ああ、ありがとう。これからよろしく、ってことでいいのかな」
さっと差し出された手の平を、ベルナットは握り返す。その口元には苦笑が滲んでいた。
「でも、懐かしいよ。まさか、剣闘士時代の二つ名をもう一度聞くことになるなんて」
「ベルナット、あなたの名は蜂起した人々の中で最も有名だ。いわく、人類の希望の灯だと」
「よしてくれ。僕はサカキがいなければ死んでいた人間だ。解放軍のリーダーだって形だけみたいなものさ」
謙遜の言葉を漏らすベルナットの姿に、氷堂はどこか既視感を覚えた。
目鼻立ちのはっきりした顔。優しげながら芯の強さを感じさせる声。
ベルナット・クーガは、かつて氷堂と蓮が忠誠を誓っていた少女にどこか似ているのだ。
「ところで、氷堂。テッセラリウスの蜂起を指導したのはお前だな？」
「は、はい」
横合いから投げかけられた蓮の言葉に、氷堂は慌てて頷く。
「ただ、自分のやったことなど微々たることですよ。主力は外で司令が片付けてくれましたから、後は人々を扇動し、中に残った敵兵を捕縛するだけでした。相手は怪我人がほとんどでしたし、その上、このテッセラリウスでは武器の確保に困りませんからね」
「なるほどな。しかし、お前は今までどこでなにをしていたんだ？」
「その話は街の中でしませんか？　外で立ち話というのもなんですし」

この提案に反対する者はいなかった。なにせ解放軍の戦士たちは蓮やベルナット、ルシュアといった指揮官格も含め、激戦に次ぐ激戦ですっかり疲弊してしまっていたからだ。

氷堂の先導を受け、人々は重い足を引き摺りつつテッセラリウスの門扉をくぐった。

やがて、短い石造りのアーチを抜けたところで、眩い光が彼らを照らし――

直後、鉱山の麓に広がる街中から割れんばかりの歓声が響いた。

「来たぞ！　アクリオンの解放軍だ！」

「ありがとう！　テッセラリウスは自由だ！」

「万歳！　万歳！　解放軍万歳！」

街の広場に集まり、解放軍の面々を出迎えたのはみすぼらしい身なりの鉱山奴隷だ。

体は痩せ、手は細り、体に身に纏っているのはぼろの布きれと鉄の手枷のみ。

にも関わらず、その表情には満面の笑みが浮かんでいる。繰り返される「万歳」の声に終わりはない。

周囲を覆い包むかのような大歓声に、ベルナットら解放軍の戦士たちは眼を丸くした。

「すごいや、まさかここまで歓迎されるだなんて……」

「手でも振ってやれ。喜ぶぞ」

「え？　こうかい？」

ベルナットが蓮の言葉に従って手を振ると、人々の歓声はより熱狂さを増した。

中には感極まって泣き出す者までいる始末である。元々、騒がしいのが好きではないルシュアなどは、むしろ居心地悪そうに顔をひきつらせていた。

「慣れないな、こういうの。それにしても、どうしてこの街には女がいないんだ？」

「住人の大半が奴隷だからですよ。鉱山労働に力の弱く、体力のな

い者は不要とされているんです。女性や子供、老人はむしろ、オプティアに送られることの方が多いですね」

「田園都市オプティア。テッセラリウスの西。三穂槍平原の中央に建てられた都市か。レギオニール地方最大の農業地帯という話だが……」

一歩引いた位置に立っていた蓮は、そこでふと門前に集まった人々へと視線をやった。

丁度、眼前では解放軍の兵士たちが民衆の中でもみくちゃにされている。

ベルナットに至っては最早、人波にさらわれて見えなくなってしまっていた。

「凄まじい熱狂だな、しかし」

「司令、この世界の人間は今まで魔族によって抑圧される日々を送ってきたのです。奴隷として扱われようとも、家畜として殺されようとも、人々にとって錬鋼の一族は絶対的強者で、抗う術もなかった。それが今日、初めて一矢報い、勝利を掴むことが出来たのです。彼らにとってはこの日は歴史に残る一日となるでしょう」

氷堂は沸き立つテッセラリウスの街を眺めて、感慨深そうに呟く。

ぼろ雑巾と化したベルナットが民衆たちから解放されたのは、それからしばらく経ってからのことだった。

「カナメ、早くどこか屋根のある場所に行けないかな？　いい加減、身の危険を感じて来た」

と、流石のベルナットも疲労の色濃く浮き出た顔で提案する。

「それでは鉱山の中腹にある迎賓館に向かいましょうか。あそこにはレギオニール地方全体の地図もありましたから、今までの、そして、これからのことを話すには丁度いいはずです」

「分かった。案内してくれ」

一行は氷堂を先頭に、蓮、ベルナット、ルシュアの三人は群衆の垣根を通って、山道を登り始めた。

鉱山の麓から中腹にかけては山肌を抉って作られた牢獄が並んで

いたが、今は元々の住人である人間たちに代わって、生き残った魔族の捕虜が閉じ込められている。

丁度、テッセラリウス陥落を前後に立場が逆転した形だ。一行が牢獄の前を通ると、たちまち怨嗟と罵りの声が鉄格子越しに響いて来た。

「そういえば、あのレオパルトを捕虜にしたと聞きましたが、今はどこにいるんです？」

「麓で治療を受けさせている。あのまま放置して死なれても困るからな」

傍から響く声を一顧だにせず、蓮は淡々と答える。

「本来は無傷で確保したかったが、予想以上に手間取ってしまった。あの錬鋼の一族というのはかなり厄介だ。お前が一度敗北しただけある」

「お恥ずかしい話です。しかし、この大陸に生息している錬鋼の一族は、二千とも三千とも言われています。テッセラリウスで撃破したのはまだほんの一部に過ぎません」

「早急に強力な兵器を開発する必要性があるな。でなければ、これから奴らと戦っていくのは難しいだろう」

蓮は足を止め、鉱山の中腹に建てられた石造りの屋敷を見上げた。錬鋼の一族の質実剛健を尊ぶ気質から、レギオニールにおいて贅沢な装いや華美な飾りは忌避されている。

そのため、建築物のほとんどは機能性のみを重視した無骨な様式だ。切り出した石材を積み上げて建てられた屋敷は、どこか砦のようにも見える。

「ここが迎賓館なのかな？　むしろ要塞みたいだけど」

「正確に言えば迎賓館として扱われている屋敷、ですね。このレギオニール地方では軍事的な施設以外が建てられることは滅多にありません。鍛冶場や製鉄所にしても、日々の暮らしに使われる道具ではなく、あくまで武器を作り出すためのものなのです」

「まるで総動員令をかけられた戦時下の国家だな。連中は余程戦争

が好きなのか？」
「そうですね。元々、錬鋼の一族は大陸に多くある氏族の中でも、飛びぬけて好戦的な種族です」
「ただ、それだけが理由ではありません」氷堂は屋敷の重い鉄扉を押し開けつつ、言葉を続ける。
「司令はこの大陸に『王』と呼ばれる存在がいるのはご存じですか？」
「ああ……確か、複数の族長を束ね、広い領土を保持している強大な魔族のことだったか。このレギオニール地方にも二人、王と呼ばれている者がいたはずだ。ケントリオンの冬の女王と、レガティアの――」
「『軍神（ウォーデン）』。四軍将を取り纏める、錬鋼の一族の頂点に立つ存在です。彼はその名の通り、戦場から戦場に渡り歩く習性を持っています。そして、かの王は力こそ全てと考え、それ以外の付属品を全て惰弱な代物と切り捨てているのです」
「なるほど。友達にはいて欲しくないタイプだな」
「上司にもいて欲しくありませんね」
冗談に冗談を返しつつ、一行は屋敷の奥へと進んだ。
屋敷の内装は外観と同じく、家具や装飾品が見当たらない。おかげで、手入れ自体はきちんと行き届いているものの、どこか寂れた印象を受ける。
絨毯のない石畳を歩き始めてから十数秒後、屋敷の最奥に辿り着いた一行が目にしたのは、広い部屋の中央に配置された古木の丸テーブルと、壁にかけられた大陸の地図――
そして、椅子に腰かけたまま分厚い本を広げている人影の姿だった。
「どうも」
不景気そうな顔で一行を見やったのは、学士のようなガウンと角帽を身に付けた若い女性だ。
青い髪に青い瞳。更に人形染みた顔立ちと、どこか人間離れした

風貌をしている。
肌の色も青白く、見た目は病人か幽霊のよう。耳の先端は三角形の形に尖っており、目元まで伸びた長い前髪の向こうではガラス玉の瞳が瞬いていた。
「……？　誰だ、お前は？」
怪訝そうに眉を寄せつつ足を踏み出しかけたルシュアを、蓮は片手で制す。
「待て、ルシュア。この女、人間じゃない」
「えっ？　人間じゃないって、どういう……」
「彼女の体温は常人より遥かに低いんです。これじゃあ、まるで死体だ」
警戒心を露わに、氷堂は青髪の女性を睨みつけた。
蓮と氷堂の眼球にはステルス兵器感知用の熱画像装置（サーモグラフィー）が組み込まれている。
これで体表温度を確認すれば、女性の肉体が常人と異なっているのは一目瞭然だった。
「何者です、あなたは？」
「ケントリオン最高学士府長官兼ソフィアラ大学学長。名をライムと申します」
すらすら自己紹介の言葉を述べた後で、ライムと名乗った女性はぱたりと本のページを閉じる。
一方、彼女の言葉を聞いた蓮は壁にかけられた地図を横目で一瞥していた。
「ケントリオン――通称、賢者の街か」
賢者の街ケントリオン。知識こそ至上の力と考える『冬の女王』によって統治された都市国家だ。
地理的にはテッセラリウスのやや東に位置しており、年中雪だらけの土地として知られている。
（冬の女王を始め、ケントリオンを支配しているのは『氷雪姫の一族』と呼ばれる者たちだったはず。一応、ケントリオン国内では人

間に対して、魔族と平等の権利を認めていると聞いたが……）

蓮は油断なく学士風の格好をした女を観察した。

青い髪に青い瞳。そして、恒温生物にはあり得ないほどの低い体温。

恐らくは彼女もケントリオンを統べる『氷雪姫』の内の一人なのだろう。

「で、そのケントリオンの学長が何の用だ？　物見遊山にここまで来た訳ではあるまい」

「少し違いますが、似たようなものです。アクリオンで蜂起した解放軍は次にここを狙うと踏んで、見物に来ました」

「……まさか、僕たちの動きを読んだのか？」

「普通に考えれば、敵の生命線であるテッセラリウスを狙うのは当然の判断ですよ。読むまでもありません」

冷ややかに答えた後で、ライムはかすかに眉を寄せる。

「ただ、あなた方がレオパルトに勝ったのは意外でしたね。まさかあの戦争狂いが、人間に倒されてしまうなんて」

「酷い言いようだな。お前ら氷雪姫の一族は錬鋼の一族と仲が悪いのか？」

「ええ。とても」ライムは無表情のまま頷いた。

「彼らは度々、我がケントリオンの領土にも侵入してきています。人間は魔族と呼んで私たちを一括りにしますが、実際は氏族ごとの関係は複雑に入り組んでいて、仲の良い氏族もあれば、互いに殺し合うほど仲の悪いものもいるのです。我々、氷雪姫の一族と錬鋼の一族の場合は後者ですね。私たちにとってベルヴェルクは怨敵といっても過言ではありません」

「ベルヴェルク？」

「錬鋼の一族を率いてる大王の名です。『軍神』ベルヴェルク（ベルヴェルク・ウォーデン）……あなた方は、自分たちが戦っている相手の名前も知らないのですか？」

蔑むような視線を向けてくるライムを前に、蓮と氷堂は顔を見合

わせた。
「氷堂。思うにこの女は俺の苦手なタイプだ。後は任せたぞ」
「司令！　そうやって面倒事を自分に押し付けないで下さいよ！」
とはいえ、氷堂もトラブルの解決には慣れたものだ。
渋々ライムに向き直り、フレームの細い眼鏡をくいっとかけなおした。
「ええと、ライムさん？　あなたはどうして自分たちの前に姿を現したんです？　それもただの興味本位ですか？」
「いえ、我が主、冬の女王から伝言があります。万が一、人間がテッセラリウスを陥落させたのであればこの書状を渡せと」
言って、ライムは懐から取り出した封筒を、氷堂に差し出す。
氷堂は封筒に施されていた封蝋をペーパーナイフで切り開くと、中に折りたたまれていた書状を蓮に手渡した。
「司令、ソフィアラ語の読解は出来ますか？」
「問題ない」
蓮は書状を受け取り、さっと目を通す。
最初に季節の挨拶が始まり、戦勝を祝う言葉が続く。
次いで、自己紹介が入り、その後は自らの身辺に関する情報が――
「……前置きが長過ぎる」
「本題は多分、八ページ目くらいにあります」
「お前のところの女王は無駄話が好きなのか？」
「いえ、単に話を纏めるのが天才的に苦手なだけです」
無表情のまま淡々と答えるライムだったが、その声からはかすかに疲れが滲んでいた。
ライムの言葉通り書状の八ページ目に目を通した蓮は、文章の末尾まで読み終えたところで小さく息をつき、くしゃりと羊皮紙を握り潰した。
「サカキ、一体なにが書いてあったんだい？」
「同盟だ」
「えっ？」

「冬の女王はケントリオンと解放軍の間で、同盟を結ばないかと提案している」

蓮の放った一言は、広い会議室にしんと響き渡った。

ケントリオンからの使者

同盟。その言葉は会議室に集った四人から様々な反応を引き出した。

無表情の蓮。ぱっと顔を輝かせるベルナット。不可解そうに首を傾げるルシュア。

氷堂に至っては、あからさまに眉を寄せている。

「すごいじゃないか。ケントリオンが仲間に加わってくれるなんて」

「……そう能天気に解釈していいものかな。なにか裏があるんじゃないだろうか」

「裏もなにも、我々を矢面に立たせようという考えが見え透いていますね」

氷堂に言われるまでもなく、蓮もケントリオン側の意図はおおむね読めていた。

元よりアクリオン村から発生した解放軍と、都市国家であるケントリオンでは人口面でも軍事面でも対等ではない。

仮に同盟を結べば、解放軍側はケントリオンの勢力に組み込まれ、錬鋼の一族に対する都合のいい駒として扱われてしまうだろう。

「ライムとやら。一応聞くが、お前たちは我々を支援するつもりはあるのか？」

「はい。ただ、我がケントリオンの軍備もそれほど余裕がある訳ではありません。軍事的な援助は望めないかと」

「ならば、お前たちはこの同盟で我々になにを提供するつもりだ？　武器か？　資源か？　それとも食糧か？」

「いえ、知識です」ライムは簡潔に答えた。

「我々、ケントリオンの賢者は常に知識を糧として生きています。同盟が結ばれた暁には多くの賢者が、あなた方に軍師として力を貸すことでしょう」

「悪いが軍師ならば足りている。必要のないものを貰ったところで

どうしようもない」
「数は足りていても頭の中身は足りていないのではないですか？軍師というものは粗悪品だけ揃えても仕方がありませんよ」
「っ……貴様！」
度を超えた暴言に身を乗り出しかける氷堂だが、蓮はそれを片手で押し留めた。
「よせ、氷堂」
「しかしですね！」
「ケントリオン側の意志は分かった。だが、その条件ではとても同盟など結べないな」
「何故です？」
「決まっている。戦場では血の臭いを知らぬ頭でっかちの賢者など、ただの物置にしかならんからだ」
舌鋒鋭い返答を受け、ライムはかすかに目を細めた。
ケントリオンは著名な賢者が多く住まう街だ。その学識は大陸最高峰と称されており、住人もその誇りと自負を抱いて生きている。
それ故、『頭でっかちの賢者』などという台詞は、ライムを始めとした学士にとって最も許せぬ侮言だった。
「……所詮は人間か。物を知らぬ土人に世の道理を分からせるためには、小細工も必要ということですね」
か細い声で放たれた独り言だが、聴力を強化された蓮と氷堂にはしっかり聞こえてしまっている。
そうとも気付かぬライムは席を立つと、テーブルの端に積まれていた木版を一つ手に取った。
「そこの帽子を被ったお方。名前を聞かせて貰ってもよろしいですか？」
「榊蓮。今は解放軍の参謀を務めている」
「……そうですか。それは好都合です」
にやりと極寒の微笑みを浮かべたライムは、テーブルの上に木版を置く。

木版には碁盤目が刻まれており、傍らには数種類の駒があった。恐らくは会議室を利用していた魔族が、暇潰し用に持ち込んだ品だろう。

「サカキさん、『死の遊戯（メメント・モリ）』はご存知ですか？」

「この大陸で最も有名なボードゲームだろう？　お互いの駒を交互に動かし、王を取られた方が負けというルールだったはずだ」

「そうです。そこまでご存知ならば話が早い」

ライムはテーブルの上に素早く駒を並べた。白と黒とに塗り分けられた駒が、盤上で乾いた音を立てる。

「ここは一つ勝負と行きませんか？　このメメント・モリで私が勝てば、我々との同盟を受け入れて頂きたいのです」

「ほう。で、俺が勝った場合はどうするつもりだ？」

「そうですね。万が一こちらが負けた場合には、この学長ライムがあなた方に手を貸しましょう。こう見えても、私は冬の女王に次ぐケントリオン第二の賢者です。軍師として使えずとも役に立ちますよ」

「ふむ」

蓮はおもむろに口元へと手を当てた。

別段、なにか考え込んでいた訳ではない。ただ、向き合った相手に笑みの表情を見られたくなかっただけだ。

（……こいつは好都合）

蓮はまだこの大陸の情報に疎い。今まではベルナットになにかと尋ねていたが、いずれ彼の知識ではカバーしきれぬことも出てくるだろう。

その時には『頭でっかちの賢者』が知恵袋として必要になる。要は使いようの問題、ということだ。

「構わん。その条件で勝負を受けよう」

「え、大丈夫なのかい？　サカキ、このゲームはやったことあるの？」

「いや、ない。書庫で見たからルールは知っているがな」

「さ、流石にそれはまずいんじゃ……」
「大丈夫ですよ」不安そうな顔のベルナットに氷堂は言った。
「司令はボードゲームの天才ですから。自分の知る限り、あの人が盤上遊戯の類で負けたことは一度もありません」
「それは奇遇ですね。私もこのメメント・モリで、我が主以外の者に負けたことはないのです」
ライムは不敵に口元をつり上げつつ、骨片で作られた六面ダイスを手に取った。
「さて、それでは始めましょうか、死の遊戯を」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

一時間後、そこには王を除く駒全てを全滅させられ、愕然とするライムの姿があった。
「うそ……私がこんな一方的に弄ばれるだなんて」
「チェックメイト。勝負ありだな」
かつん。蓮の手によって、盤上で黒の兵士（ポーン）が乾いた音を立てる。
対面の駒が壊滅している一方で、蓮の盤上には未だ半分以上の駒が残っていた。
ライムからして見ればぐうの音が出ぬほどの惨敗だ。最後に残った駒を前に、ライムはすっかり頭を抱えてしまった。
「……私の負けです。でも、どういうことなの？　あなたは本当にこのゲームをやったことがないのですか？」
「ああ。ただ、このメメント・モリはチェスというゲームによく似ていてな。そっちはかなりやり込んでいる」
それこそ百年以上だ。元々ボードゲームを得意とする蓮からしてみれば、負けるはずのない勝負だった。
ライムはなおもしばしの間、納得が行かぬ風に盤上を睨んでいた

が、やがて諦めたかのようにため息を漏らした。
「仕方ありませんね。負けは負けです。あなた方に手を貸しましょう」
「もっとごねるかと思ったが案外素直だな。女王にはなんと報告するつもりだ?」
「正直にお伝えしますよ。どの道、私は同盟が破局してもあなた方とご一緒するつもりでした。私は個人的に錬鋼の一族に対して恨みがあります。あの戦争狂いどもだけは地獄に突き落としてやらなければ、気が済まない」
凍えた声でライムは言った。前髪越しに見える瞳には押し殺した怒りが渦巻いている。
本来ならば、ここは過去の事情を聞くべき場面なのだろう。
だが、蓮は大して興味を示すこともなく、「そうか」と頷くだけだった。
「氷堂、この娘に適当な仕事を与えてやってくれ」
「……司令、丸投げは勘弁してくださいよ」
「遠慮するな。以前、補佐が欲しいと言っていただろう」
「いつの話をしているんですか。十年くらい前ですよね、それ」
毎度のことでありながら、氷堂はつい渋面を浮かべてしまう。
もっとも当事者であるライムは我関せず、深々と頭を下げると、
「これからよろしくお願いします、氷堂さん」
「……ええ、よろしくお願いします」
慎ましやかな挨拶に、氷堂は強張った表情を返すことしか出来なかった。

この日から、アクリオンの解放軍は鉱山都市テッセラリウスを拠点に活動を始める。
その航路は一見、順風満帆に見えたかもしれない。

されど、未だ大陸中央の諸都市にはレオパルトを除く四軍将の部隊が留まり、レギオニール地方最果ての地には、一族の大王『軍神』ベルヴェルクが二万の軍勢と共に息を潜めていた。

作戦会議？

数日後、テッセラリウス山腹に築かれた屋敷の会議室にて。

蓮、氷堂、ライムの三名は、テーブルの上に並べられた帳簿を囲んだまま額を突き合わせていた。

首尾良くテッセラリウスを陥落させ、多くの武器・防具を手に入れた解放軍だったが、ここでまた新たな問題が浮かび上がって来たのだ。

「武器の次は食糧か……全く、次から次へと面倒事が沸いてくるな」

数字の刻まれた安っぽいパピルス紙をつまみ上げた蓮は、兵糧の残高を見て唸り声を漏らした。

現在、テッセラリウスの人口は元々の住民三千名に加え、アクリオン村から移住してきた面子が約千名。

更に周辺地域から集まって来た人々が千名ほどあり、その上に魔族の捕虜二百名が加算されていた。

「つまり現在、この街の人口は約五千名。テッセラリウスの穀物庫が空っぽになるまで、三日ほどという計算ですね」

「氷堂、各地から届けられた食糧は計算に入れているのか？」

「勿論です。移住してきた方々が持ち寄った干し肉、果物などがなければ、我々は今頃解放軍ではなく、盗賊団などと呼ばれていたかもしれません」

「人の心を繋ぎとめるためには衣食住を保証せよ、か。しかし、ここまで兵糧が圧迫されるとはな」

蓮はくしゃりと軍帽に手をやった。

その向かいでは帳簿を手に取ったライムが、記入された数値を見て顔をしかめている。

「これは酷い。解放軍が占領する前から、テッセラリウスの食糧事情は火の車だったようですね。オプティアから回される穀物はごくごく少数。これでは守備隊の兵糧分にも足りません」

「だが、守備隊の連中が飢えている様子はなかったぞ。元々足りない分はどうしていたんだ？」
「書類には書かれていませんが、恐らく現地調達していたのでしょう。麓の土蔵に塩漬けされた肉がありましたから」
「ああ……」と、蓮は不快そうに眉を歪めた。
要するにテッセラリウスを支配していた魔族の面々は奴隷として送られた人間を屠殺し、その肉を喰らって腹を満たしていたのだ。
その証拠として、土蔵の奥には人間を丸ごと密封した甕がいくつも並べられていた。
「ライム。一応聞いておくが、お前らにも人肉食いの習慣はあるのか？」
「まさか。我々をあのような蛮族と一緒にしないで頂きたい」ケントリオンの長官は唾棄するかの如き口調で言った。
「そもそも、私たち氷雪姫の一族は人間とよく似た姿をしています。そのため、古来から人肉を口にすることは忌み嫌われていたのです」
「そいつは良かった。俺も昔、若気の至りでプラスチック爆弾とダイナマイトを食ったことはあるが、流石に人間の肉にまで手を出した経験はないな」
「……司令、それはある意味、人肉よりも問題ですよ」
氷堂は上司の悪食っぷりに口元を引きつらせた。
プラスチック爆弾にはセルロース。ダイナマイトにはグリセリンが混じっているため、噛むと僅かに甘い風味がする。
特に大戦の最中では物量統制が行われ、甘味など滅多に前線に回って来なかったから、堪え切れなくなった兵士がこれらを食べてしまう事例があったのだ。
おまけに肉体を強化された人間は混入している毒物もほとんど通じないから、爆弾の食べ過ぎで除隊処分になった者まで出る有様だった。
「とはいえ、このままでは我々が飢え死にするのも時間の問題だ。安定した食糧供給なしに軍隊を維持しようなど、正気の沙汰ではな

い」
「腹が減ってはなんとやら、ですね。しかし、我が軍に自給能力がない以上、どこか他の場所から食糧を調達するしかないのですが……」
言いつつ、氷堂は向かいに座る学士姿へと視線をやる。
暗に尋ねられたライムはしばし考える様子を見せたものの、やがて力なく首を横に振った。
「無理ですね。ケントリオンは極寒の地。大地の実りは少なく、自国の民ですら毎年飢えに喘いでいます。そのため、学府では大学で作成した書物を輸出し、他国から食糧を得ているのですが、近年は街道を荒らす賊のせいで収入も少なく――」
「責めるような視線でこっちを見るな。大体、お前らの本を略奪したのはベルナットで、俺は関与していない」
青い瞳にじっと睨まれ、蓮は小さくため息をこぼした。
一年ほど前から街道を行き来する魔族を襲っていたベルナットたちだが、実のところ、彼らは人間に対して友好的なケントリオンの商隊にまで攻撃をかけていたのだ。
そもそも、襲う側から見ればどの商隊がどの街から出発したかなど分からないし、いざ蓋を開け、荷台に書物がぎっちり積まれていたとしても、ケントリオンまで返却しに行くことなど出来るはずもない。
その結果がアクリオンの書庫に溜まった百巻以上の本である。あれらは元々、ケントリオンから輸出された代物なのだった。
「しかし、サカキさん。私の目にはあなたが実質的な解放軍の指導者に見えるのですが」
「俺がアクリオンの解放軍に参加したのは半月ほど前。ベルナットたちが行商を襲撃していたのはそれ以前の話だ。今度あいつに会ったら恨み言でも言ってやれ」
「相変わらず息をするかの如く他人に面倒事を押しつけますね、司令」

「氷堂……戦場で重要なことの一つはな、自分以外の人間でも出来る仕事は極力他人に任せることだ。でなければ、指揮官は多くの作業に忙殺されてしまうし、部下は上官任せにして自分から働かなくなる」

「では上官が働かない時はどうすればいいのでしょうか」

「諦めろ」

身も蓋もない台詞に氷堂はがっくりと肩を落とした。

と、そこでタイミング良く外に出ていたベルナットが会議室に姿を見せる。

ベルナットやルシュアを始めとする北方森林地帯の住民は、猟師として優れた弓の腕前を持っていたため、少しでも食糧を確保しようと森へ狩りに出ていたのだ。

その甲斐はあったのか、ベルナットは会議室に入るなり両手を大きく広げて見せた。

「やぁ、ただいま。今日はこんなにおっきいイノシシが取れたよ。それにしても、この前サカキから貰った剣はやたらとよく切れるな。丸太で試し切りしたら、見事真っ二つに――」

「ベルナットさん」

不意に横合いから冷たい声をかけられ、ベルナットはびくりと肩を震わせる。

「な、なんだい、ライム」

「いえ、その、唐突で申し訳ないんですが、そこの四角く開いた窓から山道に飛び降りていただけませんか。こう、頭を下にした体勢で」

「えっ……ちょ、ちょっと、僕なにか悪いことした!?　遠回しに死ねって言われてるよね!?」

「まぁ、要約すればそのような意味になりますね」

淡々と言葉を続けるライムを前に、ベルナットは助けを求めるような視線を彷徨わせた。

「あの、ごめん。誰か事情を説明してくれると嬉しいんだけど」

「アクリオンの書庫に大量の本があっただろう。どうもあれはケントリオン産の品物だったらしい」
「あー……やっぱり、そうだったんだね。僕も薄々気づきかけて――うおっ！？」
慌てて身を伏せたベルナットの頭上で、氷を固めて作られたダーツが石壁に突き刺さる。
ライムは間一髪氷弾を回避したベルナットを見て、小さく舌打ちを漏らした。
「ちっ、はずしたか」
「ま、待ってくれ！　今、殺す気で放たなかったか！？」
「いえ、脊髄反射的に体が動いてしまいましたから。殺す気だったかどうかはちょっと」
「余計に性質が悪いよ！？」
「すいません」
ライムは台本に書かれた文字を読み上げるかのような口調で言った。
丁度そこでベルナットの背後から、外套をひっかけた格好のルシュアが顔を出す。
ルシュアは床に屈んでいるベルナット、壁に突き刺さっている氷の矢、どこか不機嫌そうな雰囲気のライムへと順々に視線を移した。
「二人ともなにをやっているんだ？」
「あなたは……」
「アクリオンのルシュア・ロットだ。古くから解放軍に参加している」
「ルシュアさん、ですか。女性みたいな名前ですね」
「女だからな」
ぶっきらぼうに言い放つルシュアを前に、ライムは目をしばたかせた。
「失礼しました。どうも私は人間の性別を見分けることが不得意なのです」

「いや、ルシュアは元々、男の子っぽい顔立ちをしてるから――」
「ベルナット、女顔のお前に言われたくない」
「……」
なにも言い返せず項垂れるベルナットの肩に、同じく童顔の氷堂はぽん、と片手を置いた。

作戦会議？

その後、五人はテッセラリウスの食糧問題について一時間ほど討論を続けたものの、名案と呼べるような代物は出なかった。

「とりあえず、ここで一度、状況の整理をしておきましょうか」

手元に氷のステッキを作り出したライムは、出来の悪い生徒に言い聞かせるかのように、壁際の地図をこつこつ叩いた。

会議室にあるレギオニール地方全体を描いた地図には、いくつもの街が名前付きで掲載されている。

冬ヶ岳連峰の麓。東の果てにあるのは雪に囲まれた賢者の街『ケントリオン』。

そこから西に行くと三穂槍平原の端、鉱山都市『テッセラリウス』に辿り着く。

更に西へと赴けば平原の中央。農業が盛んな田園都市『オプティア』。

逆にテッセラリウスから南へ進むと、海に面した貿易都市『プリマス』に到達する。

オプティアの先にあるのは人形の街『トリブヌット』と城塞都市『プレフェクタ』。

そして、その向こう。白刃山脈を越えた果てにようやく錬鋼の一族の本拠地である、技師の街『レガティア』を望むことが出来た。

「今のところ解放軍が占拠している都市はテッセラリウスのみです。我がケントリオン、そして、沿岸部一帯を支配するプリマスは中立を保っていますが、テッセラリウス西側にある都市の内、オプティアから先は完全に敵の勢力圏内にあると思って下さい」

ステッキの先端が、オプティアからレガティアにかけての範囲を指し示した。

広大なレギオニール地方だが、その大部分を支配しているのはベルヴェルク・ウォーデンを頂点とする錬鋼の一族だ。

特に大陸中央から西側にかけての主要都市は、ほぼ全てが彼らによって押さえられている。
「地理的に見た場合、我々が次に攻略すべき目標は田園都市オプティアになります。ここは四軍将レオパルトが統監を務めていた都市ですから、彼がいない今ならば付け入る隙もあると思いますが……」
「ライム、オプティアに駐留している軍隊の規模は？」
「私の知る限りでは二千名ほどですね。とはいえ、レオパルトはこの中から討伐軍を徴兵したため、残るは千名だけになります」
「おっ、それならどうにか落とせそうだな。今の僕たちが動かせる兵力も同じくらいじゃなかったか？」
呑気に提案するベルナットに、ライムは冷ややかな眼差しを向けた。
「論外ですね。そもそも、兵はあってもパンがありません。もしオプティアに軍隊を動かせば、兵士が途中で飢え死にしてしまいます」
「でも、三日分の兵糧はあるんだろう？」
「『三日分の兵糧しかない』んです。テッセラリウスからオプティアまで行軍するとなると、三穂槍平原を突っ切る関係上、丸二日近くもかかってしまいます。その上、都市を攻略することとなればより多くの時間が必要となるでしょう。三日分の食料ではとても足りません」
再度、ステッキの先端ががりがり音を立ててテッセラリウスとオプティアの間をなぞる。
兵糧というのは軍隊にとって最も重要な要素の一つだ。これが足りなければ兵の士気は下がり、酷い時には軍全体が空中分解してしまう。
ベルナットの隣で地図を睨んでいたルシュアは、困り果てたかのように唸り声を上げた。
「結局は食糧問題か。中央の食糧庫であるオプティアさえ落とせれば、食糧問題は解決できる。しかし、そのための食糧がない……」
「ジレンマですね。いっそのことオプティア近郊の麦畑を適当に略

奪しますか？」

「氷堂さん、今は夏ですよ。実りの季節である秋からは最も遠い時期です」

「……ああ、そういえばそうでした」

異世界人である蓮や氷堂にとって、四季の感覚というのは非常に薄い。

なにせ、あの荒廃した大地には季節の移り変わりというものがまるでなかったのだ。

蓮自身、ライムの言葉でようやく秋に穀物が実り始めるという事実を思い出していた。

「面倒だな。例えこの時期にオプティアを落としたとしても、穀物庫が空っぽという事態が起こりかねんわけだ」

「勘弁して欲しいね。暴動が起きるよ」

「でも、東も駄目。西も駄目としたら後はもう……」

ルシュアはテッセラリウスから南に続く街道の先。プリマスと名の書かれた都市へと視線を向けた。

貿易都市プリマスは海に面したレギオニール地方最大の港町だ。その名の通り商業が盛んで、東西の他地域と積極的に交易を行っている。

「プリマスから食糧を仕入れてくるしかないんじゃないか？　ここは錬鋼の一族の支配下じゃないはずだし」

「名案ですね。ところで聞きますけど、この軍の軍資金は？」

「ゼロだな」

「そうですか。では、まず錬金術の研究をしませんと」

皮肉とも冗談ともつかない台詞を口にするライムだったが、それが他の面々に理解されることはなかった。

一方、プリマスの出身であるベルナットも難しそうに眉を寄せ、

「僕も少しだけ貯蓄はあるけど、五千人分の食糧をまかなうには流石に足りないな」

「ベルナット、プリマスで使われている貨幣はどんな代物なんだ？」

「え？　ああ、帝国銀貨のことだね。元々は東のルガル帝国から入ってきたもので、こんな形をしている」

ベルナットは懐から小袋を取りだすと、テーブルの上に数枚の貨幣を並べた。

細工に僅かな違いがあり、大小二種類に分かれているものの、どれも蛇と王冠の紋章が刻まれた銀貨だ。

作りは精巧で、表面の輝きから極めて純度の高いことが分かる。

蓮はその内の一枚を手に取り、ぴんと親指で弾いた後、宙を舞う硬貨を手の平で受け止めた。

「銀の含有率は九十％くらいか。場合によっては偽造もやむなしと思ったが、これでは難しいな」

「資金がないのなら物々交換です。幸い、このテッセラリウスから質のいい鉄鉱石が採れ、麓の倉庫にも多くの武器や防具が備蓄されています。これをプリマスに輸送し、食料と交換すれば良いのではありませんか？」

「鉄鉱石は構わんが武器は駄目だ。このテッセラリウスに置かれた武器は全て実用品。そして、商人というのは剣や鎧を買っても本来の用途に使わん」

「……ああ、そういえばそうですね。私としたことが少々目先の事柄に囚われていたようです」

納得が行ったように頷くライム。その隣で、氷堂も「なるほど」と相槌を打っている。

反面、ベルナットとルシュアは蓮の言葉の真意が分からず、揃って首を傾げていた。

「えっと、サカキ。つまりはどういうことなんだい？」

「出来れば私たちにも分かるよう、説明してほしんだが……」

「説明もなにも、少し考えれば分かることだ。本来、武器は戦場で扱われるものであって、飾られるものではない。もし我々が商人に多くの武器を流せば、奴らはそれをより高値で他所へ売り飛ばそうとするだろう」

「そうか。その場合、候補となるのは」
「武器の供給地を奪われた錬鋼の一族だろうな。こちらとしては敵に武器を流すような真似は出来るだけ避けたいんだ」
「ただ」と蓮は言葉を続ける。
「物々交換という方法は悪くない。武器以外になにか候補はないか？」
「なら、アクリオンから持ってきた本なんてどうかな。ほら、ベルナットが書庫に集めてたやつ」
「え？　あれって今、テッセラリウスにあるのかい？」
「アクリオンに残ってた連中がこっちに移って来る時、本とかがらくたとかも一緒に運んできたらしい。といっても、ここじゃ文字を読める奴なんてほとんどいないからな。鍛冶屋の親父が燃料に欲しがってたくらいさ」
なんとなしに放たれたルシュアの一言に、ライムは絶句した。ただでさえ白い顔が、さぁっと蝋のようになる。
「なっ、冗談ではありません！　今すぐやめさせて下さい！」
「言われなくともやめさせたよ。大体、羊皮紙ってのはすぐ燃え尽きちゃうから火種には使えても、燃料には向かないんだ」
「そういう問題ではないでしょう！」
いつになく憤慨した様子で、ライムはテーブルに両手を叩きつける。
本というのは人類の英知の結晶だ。それを薪代わりに使うなど、彼女からしてみれば書に対する冒涜以外の何物でもない。
「そもそも、あれら書物はケントリオンの学士たちが精魂込めて製本したものなのですよ？　言うなれば、同じ重量の銀より価値のある代物なのです。燃料よりももっと他の使い道があると思いませんか？」
「ああ、そういえばこの時代の書物というのは高値で売れるのだったな。交易品としては好都合じゃないか」
「……サカキさん、私はそういうことが言いたい訳ではないのです

が」
「だが、あれは元々ケントリオンからプリマスに輸出されたものなのだろう？　ならば、売って金に換えるのもまた本来の用途だ」
そう言われてしまうとライムも反論できない。不満そうな顔をしつつも、渋々引き下がるしかなかった。
「しかし、司令。本の代金だけで五千人もの人口を養うのは難しいですよ？」
「分かっている。確か、アクリオンの倉庫には本以外にも調度品の類がいくつかあったはずだ。それに大荒原で採れた石油、天然アスファルトの類も売れば金になるだろう」
「なんだ。案外どうにかなりそうじゃないか」
「三日という時間制限がなければな」
付け加えられた一言に、一同は再び頭を抱えてしまった。
もしプリマスで食糧を得ようとするのならば、街から街への往復。商品の販売。食糧の購入を三日以内に済ませなくてはいけない。
モノが僅かならばそれも可能だろうが、現在彼らが必要としているのは五千人分の食糧。
それも一日ではなく、長期間に渡って住民を養うことが出来る程度の量は必要となる。
氷堂はうめき声を上げつつ、ベルナットに尋ねた。
「困りましたね。ベルナットさん、そちらでなにか心当たりは？」
「なくはないけど、大量の食糧をすぐさま用意できる豪商というとかなり数が限られてくるよ。おまけに向こうの商人ってのは全員魔族だから、人間と取引してくれる人なんてほとんどいないし」
「両方の条件を兼ね揃えた者が一人でもいればいいんです」
「……うん。まぁ、いるっちゃいるんだけどさ」ベルナットは苦い表情で言った。
「その人はかなり性格が悪いんだ。好きなものは生き物の苦しむ姿と他人の断末魔。自宅には自分のハーレムを作ってて、人間の女の子を百人単位で囲ってる。その癖、財貨に対しては貪欲で他人に施

しなんて一切しない。金の亡者とはあの人のことだね」
「ベルナット、そいつの名前は？」
「『大王猫の一族』の族長ケットシー。財力でプリマスを支配している貿易王さ。闘技場の経営なんかもやってて、昔は僕も彼の下で剣奴として働かされていた」
ベルナットは無意識の内に、頭に被った月桂冠へと手を伸ばしていた。
月桂樹の冠は勝利と栄光の証だ。これは無敗の剣闘士だった彼が、オーナーであるケットシーから送られた代物だった。
しかし、ベルナットにとってこの冠は剣奴として働かされていた過去の象徴でもある。そこに込められた思いを簡単に言葉で表すことは出来ない。
「一応、僕もあの人に会うつてはある。交渉を受け入れてくれるかどうかはまた別の話だけどね」
「十分だ。元より他に道がないのならば仕方あるまい」
テーブルの上をこつんと一度叩いた後で、蓮は一同を見回した。
「行くぞ、プリマスへ。その金の亡者とやらの顔を拝んでやろう」

貿易都市プリマス

貿易都市プリマス。テッセラリウスから南西に一日ほどの距離にある港町である。

軍事方面に傾倒したレギオニール地方ではさほど商業が盛んではないものの、東のルガル帝国、西のミストリアは積極的に交易を行っており、両者の中間にあるプリマスは東西貿易の中継地となっていた。

とはいえ、この地方の諸都市から輸出されている品物もあった。鉄鉱石や石材、材木などの天然資源。各都市で生産される武器、書物、剥製、器械道具などがそれだ。

逆にルガル帝国から入ってくるものは金銀宝石を始めとした宝飾品や、ワイン、タバコ、コーヒー、砂糖などの嗜好品が大半を占め、ミストリアから入ってくるものは食糧や家畜、奴隷などが多い。

これら諸地域から集められた様々な代物がプリマスでは販売されている。ほとんど区画もされていない迷路のような通りにはいくつもの露店が顔を並べ、派手な服を身に纏った店番がしきりに呼び込みの声を上げていた。

「西平原から仕入れた羊肉の燻製だ！　一頭、大銀二つで持ってけ！」

「今日仕入れたばかりの銀細工だよ！　そこのお兄さん、彼女にどうだい！？」

「果物安いよ！　なんと三つで小銀一だ！」

「よく働く奴隷！　力の強い奴隷！　いりませんかぁ！？」

様々な種の魔族、人間が集まった港湾は常に多くの人々が行き交い、街全体が異様な熱気に包まれているかのようだ。

おまけに今は大暑の季節。通りを歩く人々の顔には汗が浮かんでいた。

「久しぶりだな、このむし暑さも。なんだか懐かしいよ」

雑踏を慣れた足取りで歩くベルナットは、騒々しい通りを眺めつつ、時折目を細めていた。
その後ろに続く蓮はこの気温にも関わらず、軍服、軍帽、外套という普段通りの服装である。
傍から見れば暑苦しいことこの上ないが、元より蓮は気候の変化に悩まされるような体をしていない。
一方、最後尾を歩くルシュアは普段着用している革鎧を脱ぎ、ベージュ色に染め上げられた袖なしの貫頭衣という涼しげな格好に変わっている。
「……しかし、サカキ殿。私まで付いてくることはなかったんじゃないか？」
ルシュアは露わになった細腕で、額に浮かぶ汗を拭った。
夜の内に書物・調度品などを馬車に乗せ、テッセラリウスを出発した一行がプリマスの街へ到着したのは昼過ぎのことだ。
今回、プリマス行きのメンバーは交渉を行う蓮に加え、案内役のベルナット――
そして、最後の一人はどうして自分がここへ連れて来られたのかもよく分からないルシュアである。
「なんだ。テッセラリウスで留守番の方が良かったのか？」
「い、いや。そういう訳じゃないんだが……」
ちらりとベルナットを盗み見るルシュアに、蓮は言った。
「安心しろ。別に恋する乙女を想い人から引き裂きたくなかった、という訳ではない」
「はっ？　えっ？　な、な!?　さ、サカキ殿、一体なにを!?」
「気付かれていないとでも思ったのか？　流石に一カ月近くも共に行動すれば、誰が誰を好いているかくらい分かるさ」
「いや、しかし、その」
「ああ、ちなみにお前を連れてきた理由はちゃんとある。別段、他意がある訳ではない」
「あ……うん。そ、それならいいんだ」

ルシュアはもう一度、額に浮かぶ汗を拭う。暑さとは違う熱のために、すっかり体温が上がってしまっていた。

一方、ベルナットはようやく背後のやりとりに気付いたのか、振り返ったところできょとんとした表情を浮かべ、

「ルシュア、どうしたんだい？　顔が真っ赤だけど」

「……お前のせいだよ」

「えっ？」

と呑気に首を傾げている。あまりの朴念仁っぷりに、流石の蓮も呆れてしまった。

「そういえばベルナット、お前とルシュアはいつからの付き合いなんだ？」

「ええと、二年前に僕がこの街を飛び出してからだね。ルシュアはアクリオンに古くから住んでいて、あの村に辿り着いた僕に色々融通してくれたんだ」

「融通、って言っても大したことしてないけどな。あの時のベルナットがあまりにも頼りないもんだから、つい放っておけなくなっただけだし」

辛辣な言葉を放つルシュアに、ベルナットは「はは……」と乾いた笑い声を返すことしか出来ない。

「まぁ、当時の僕はプリマスを出たばかりの世間知らずだったからな。世の中の情勢を知っていても、それを本当の意味で理解していなかったんだ」

言って、ベルナットはプリマスの町並みへと金色の瞳を向けた。

多くの人々がすれ違う表通りだが、よくよく見れば豪奢な衣装を身に纏っているのは異形のヒト型ばかりで、ほとんどの人間は布地の擦り切れた粗末な格好をしている。

通りに並ぶ街商にしても、大きな店を構えているのは魔族だけだ。人間の店は小さなものがぽつぽつあるだけで、品揃えは悪く、当然、客足も鈍い。

「このプリマスでも人間と魔族は平等じゃない。それでも、この街

で暮らす人々には希望がある。いつか底辺から這い上がり、成功してやるという希望が。他の地域に比べたら大きな違いさ」

ベルナットの台詞はどこか自嘲的だった。

確かにプリマスではテッセラリウスなどと比べて人間たちの扱いがマシだが、それでも決して良好な訳ではない。

あくまでベルナットの見方は相対的なものだ。蓮の眼にはこのプリマスの人々も抑圧されているように思える。

（いや、だが結局は俺も同じなのか）

蓮のいた世界では徴兵によって自由を奪われることはあっても、奴隷と呼ばれるような存在は一切いなかった。

しかし、それはあくまで憲法の制定された近代国家での話。人間の君主すらいないこの世界で受け入れられる考え方ではないのだ。

「……どうしたものかな」

蓮が眉を寄せて考え込んでいる間にも、ベルナットは街の奥へ奥へと進んでいた。

表通りは賑やかなプリマスだが、少し裏に回るといかがわしい店の立ち並ぶ一角へと差し掛かる。

派手な外観の娼館。怪しげな肉を売る店。毒々しい色の薬を並べた薬局。幼い子供ばかりを揃えた奴隷市――

男女関係に対して潔癖症のきらいがあるルシュアなどは、街頭に立つ派手な化粧の売春婦を見てあからさまに眉をひそめていた。

「ベルナット、本当にこんなところにケットシーとかいう商人がいるのか？」

「いや、先に面会予約をしなきゃいけないからね。まずはケットシーの部下に会いに行こうと思っている。あいつも僕がいた頃と同じ生活を送っているなら、昼間はこの近辺。夜は黒い仔猫亭って酒場にいるはずなんだけど」

「その知り合い、どういう男なんだ？」

「名前はシャム。人間と『灰色猫の一族』の間に生まれた奴で、元々は僕と同じ剣闘士だったんだ。引退後はプリマスに留まって、今

はケットシーが経営している商会の手伝いをしているらしい」
「ほう、混血種か。実物を見るのは初めてだな」
蓮も一応、知識の中では人間と魔族のハーフがいることを知っている。
大陸の社会において二つの異なる種族同士が性交し、子供を産むのは稀だ。
例外として、魔族と人間の間では比較的容易に子供を作りだすことが出来るが、結婚や恋愛を通じて出生まで至る事例は極めて少なく、ほとんどの場合は魔族から人間へ一方的な性行為が行われ、結果、望まれぬ子供が生まれてしまう。
当然、彼等に対する風当たりは強く、生まれた子は人間と魔族の両方から疎まれるという話だった。
「混血の人間には魔族の特徴が出るというが、実際にはどんな姿をしているんだ？」
「うーん。それは多分、本物を見て貰った方が早いんじゃないかな」
苦笑を浮かべつつ、ベルナットは通りの一角にある賭場の扉を押し開けた。
プリマス裏町の賭場は、百名ほどの収容人数を持つ大規模な代物だ。
小汚い外装に反し内部は意外と清潔で、フロアの半分にはテーブルが並べられ、もう半分には闘鶏、闘犬用の小さな舞台が広がっている。
店内で賭け事に興じているのは身形の粗末な人間ばかりで、魔族の姿は全くといっていいほど見えない。
その代わり、中には明らかに人間とも魔族とも思えないような、中途半端な姿の者がいた。
「よう、いらっしゃ……って、ベルナット・クーガか！？」
三人が賭場に入った直後、テーブル席の奥から立ち上がったのは頭から猫の耳が生えた背の高い男だ。
甘い顔立ちに加え、いかにも遊び人といった雰囲気の白いシャツ

に黒いズボン。体格は細身だが絞り込まれており、野生動物染みた印象を受ける。

よくよく見れば瞳孔がやや細く、ズボンからは長い灰色の尻尾が飛び出ており、顔立ちもネコに似ていた。

「久しぶり、シャム。相変わらずだね、君も」

「お前こそ変わってないな。もう何年振りだ？　最後に顔を合わせてから二年は経っているんじゃないか？」

シャムは満面の笑みを浮かべつつ、大仰に手を広げた。

「まさか、この街でまたお前と会えるとは思わなかったぜ。今日はどうしてここに？」

「買い物だよ。少しでかい取引がしたくってね。君の御主人様に会いたいんだ」

「へぇ、ケットシーさんに？　ひょっとして商売でも始めるつもりか？」

「いや、別にそういう訳じゃない。ただ食糧を買いたいだけさ」

「あー、うん。なるほどな。その後ろにいる連中がなんか関係してる訳か」

シャムはベルナットの肩越しに蓮とルシュアの顔を盗み見た。

蓮は相変わらずの無表情だが、ルシュアは興味深そうにシャムの頭から生えた耳を眺めていた。彼女も半魔族を目にするのは初めてだったのだ。

「この二人はサカキとルシュア。僕の同僚みたいなものだよ」

「同僚？　お前、今なんか仕事やってんの？」

「まぁね。あんまり、大きな口で言えるような仕事じゃないんだけど」

「ふーん。ま、いいや。とりあえず、ケットシー様に会いたいんだな？　お前、あの人に気に入られてたから、多分明日には会ってくれると思うよ」

「明日？」ベルナットは怪訝そうに聞き返した。

「急ぎの用事なんだ。今日面会するのは難しいかな」

「そいつは無理だよ。元々、あの人の予定は一週間前から決められてるんだ。どう頑張ったって、会えるとしたら明日以降になる」
この台詞にはベルナットもルシュアもすっかり困り果ててしまった。
テッセラリウスからプリマスまでは往復するだけでも最低、二日はかかる。
今日、面会を取れなかった場合、品物の売買にかかる時間を含めると、三日の上限を越えてしまいかねない。
「シャム、そこを曲げて頼みたいんだ。どうにかならないか？」
「ならないね」
食い下がるベルナットを、シャムはばっさり切り捨てた。
「そもそも今日はちょっと特殊な客が来てるんだ。連中を後回しにしたら、このプリマスが焼け落ちかねないぜ」
「……それってまさか」
「錬鋼の一族のお偉いさん、四軍将筆頭のエイブラムスだよ。三日くらい前からこの街に留まってたんだけど、なんでも東のテッセラリウスが解放軍を名乗る人間たちに落とされたって話が広まってね。ケットシーさん相手に武器が買えないか交渉してるんだ」
シャムの言葉に、ベルナットとルシュアは顔を見合わせた。
錬鋼の一族の存在は、蓮にとっても計算外だ。電報もないこの時代、本来ならばテッセラリウス陥落の報が他の都市に広まるまで、まだ数日の余裕があるはずだった。
（となると、解放軍の内部に間諜が入っていたのか……？）
テッセラリウスにはレギオニール地方の各所から人が集まって来ている。
その中にプリマスの密偵が混じっていたとしても、誰一人気付くまい。
元より解放軍の主敵は錬鋼の一族を始めとした魔族だ。人間に対しての警戒が緩くなってしまうのは、仕方のないことだった。
「ああ、そういえばよ」

ふいにシャムはにこやかな笑みをたたえたまま口を開く。
蓮はその微笑みの裏に、なにか黒い感情がよぎるのを見た。
「その解放軍のリーダーもベルナット・クーガって名前らしいんだが……お前、ひょっとして知り合いか？」
何気なく放たれた台詞に、ベルナットは息をのむ。
気付けば、つい先ほどまで賭け事に興じていた客全員が席から立ち上がり、冷たい殺気を身に纏ったまま、三人を取り囲んでいた。

ベルナット・クーガ？

プリマスの街には商店の次に宿屋（売春宿も含む）が多いとされている。

主な客層は取引を終えた商人、航海の最中に一休みをした船乗りたちで、中にはしばしば遠方から買い物に来た客も混じる。

その日、黒猫商会の経営する旅籠に宿泊していた客も、大半はその三者のどれかだった。

唯一の例外は三階、大通り側の大部屋を取っていた三人組である。

蓮、ベルナット、ルシュアの三人は賭場でシャムと会った後、半ば拘禁されるような形でこの宿へと押し込められていたのだった。

「面倒なことになったな」

壁にくりぬかれた小窓から外の通りを眺めつつ、蓮は感情のない声で呟いた。

夕焼けに照らされ、閑散となりつつある街中には、見張り番の男たちがぽつぽつ佇んでいた。

恐らくはシャムと同じケットシーの部下だろう。単なる商人の用心棒にしては身に纏う気配が鋭過ぎる。

（『大王猫の一族』が族長ケットシーか。予想以上に面倒くさそうな相手だ）

窓際から離れ、室内に目を移せば、寝台に腰かけたベルナットがすっかり頭を抱えてしまっていた。

「……すまない。まさか、こんなことになるなんて」

「あのシャムとかいう奴、とんだ食わせ者じゃないか。最初から猫を被ってたんだ」

ベルナットの対面。蜥竜の赤皮を張って作られた椅子に座ったルシュアが、不機嫌そうに吐き捨てる。

「でも、ケットシーの狙いはなんなんだ？　賭場の客に囲まれた時は、てっきり殺されるのかと思ったのに」

「恐らく、奴は俺たちと錬鋼の一族とを天秤にかけているんだ。そして、より自分の利益が大きくなる方につくつもりなのだろう。実に商売人らしい思考回路だな」
「じゃあ、前向きに考えれば、まだチャンスはあるってことかい？」
「後ろ向きに考えれば、いつ刺し殺されてもおかしくない状況なんだが」
蓮の一言にベルナットはがくりと肩を落とした。
そうでなくとも、今回の件でベルナットはすっかり意気消沈していた。
解放軍の前途を決める場面で、友人と思っていた人物に裏切られ、窮地に陥ってしまったのだから仕方のない話でもある。元々責任感が強い分、落ち込み方も激しかった。
（いかんな、言いすぎたか）
蓮はこういう時に気の利いた慰めの言葉をかけるのが苦手だ。
元々、人生の大半が戦場暮らしで、人との付き合いが不器用な男である。
慰めの言葉をかけたつもりが、逆に相手を精神的に追い込んでしまうことなど珍しくなかった。
「ルシュア」
「な、なんだよ」
ふいに蓮から声をかけられ、ルシュアはどもりつつも返事をする。
「俺は少し外の空気を吸ってくる。後のことは頼んだぞ」
「えっ？　そんな丸投げ――って、サカキ殿！？」
慌てて呼びとめようとするルシュアの声を無視して、蓮は素早く室内から抜け出した。
元々、この街にルシュアを連れて来たのは、蓮自身に単独行動をする予定があったからだ。
なにかにつけ人の良すぎるベルナットを一人にしておくのは不安だが、慎重な性格のルシュアを付けておけば一応、釣り合いが取れる。

（まぁ、半ば面倒事を押しつける形になったが仕方あるまい）
蓮はそう結論付けると、背後の扉を一瞥し、音もなくその場を離れた。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「あ、あの人は……！」
（まさか、こうなることを予測して私を連れてきたのか！？）
一方、困り果ててしまったのは部屋に残されたルシュアである。
ベルナットとはそれなりに付き合いの長い彼女だが、彼がここまで落ち込んでいるのを見るのは久しぶりだった。
本来、ベルナット・クーガは窮地に陥っても決して諦めようとせず、とことんまで足掻くタイプの人間だ。
しかし、今のベルナットはテッセラリウスに残る五千人全ての命を預かってしまっている。これで責任を感じるなという方が無理な話だろう。
「……ベルナット」
恐る恐る声をかけたルシュアの前で、ベルナットはかぶりを振った。
「ごめん。落ち込んでいる場合じゃないってのは分かってるんだ。でも、僕は自分の力不足が情けないよ。結局、こうしてみんなに迷惑をかけることになって。きっと、サカキも呆れてしまったんだろうな」
「そんなこと言うなよ。サカキ殿は多分、何か用事があったんだ。ひょっとしたら、ケットシーとの交渉を上手く進めるための材料でも探しに出たのかもしれない」
「そうか。僕がだらしないばかりに彼には苦労ばかりかける」
はぁ、と重々しいため息を漏らすベルナットを前に、ルシュアは

なにも言えなくなってしまった。
ベルナットと立ち位置の近いルシュアには、彼の気持ちがなんとなく分かる。
デクリアでの戦いの時から、自分たちはサカキに助けられてばかりだ。テッセラリウスの解放だって、彼なしには成しえなかった。
別段、ルシュア自身はそれでなにか思うことはない。だが、解放軍のリーダーを務めているベルナットはそうもいかなかったのだろう。
ベルナットはじっと床の木目を見つめたまま、力ない声で言った。
「ルシュア。正直なところ、僕は随分前からサカキに解放軍の全権を任せた方がいいんじゃないかと思っている」
「……別に今のままでいいじゃないか。なにか不都合でもあるのか？」
「不都合はなくとも、僕がつらいんだ。どう考えても今の僕はみんなの期待に応えられていない。そうでなくとも、組織の頭が無能な奴ってのは問題だろ？」
自嘲混じりの笑みを浮かべるベルナットを見て、ルシュアは急に激しい苛立ちを覚えた。
違う。と、心の中でもう一人の自分が叫ぶ。こんなのは私たちの望むベルナット・クーガではないと。
少なくともルシュアの知るベルナットは常に活力に満ち溢れ、一度や二度の失敗で挫けるような性格ではなかったはずだ。
「ベルナット！」
「……ごめん。ちょっと外で頭を冷やしてくるよ」
思わず椅子を蹴り倒してしまったルシュアの前で、ベルナットは逃げるようにベッドから立ち上がる。
だが、ルシュアはその体に飛びかかると、半ば無理矢理マットレスの上へと押し倒してしまった。
まっさらなシーツが波打ち、寝台の脚が二人分の重みを受けて軋みを上げる。

ルシュアは金色の瞳を丸く見開いたベルナットの前で、すっと息を吸った。

「――ふざけるな、ベルナット・クーガ！」

全身から絞り出した大喝が、びりびりと天井が震わせた。

「どうしてそんな情けないことを言うんだ！　解放軍の旗頭はお前だろう！？　みんな、お前が先頭に立っているから後について来ているんだ！　確かにサカキ殿は私たちに魔族と戦い、勝つための方法を教えてくれたかもしれない！　だがな、連中と戦うための意志をくれたのはベルナット、お前なんだ！　そのお前が……！」

頭に上った血が限界に達し、ルシュアは握った拳で駄々っ子のようにベルナットの胸板を打つ。

胸が一杯になり、喉がつかえ、言葉が外に出て行かない。

代わりにルシュアは顔を俯かせたまま、ベルナットの頬にぽたぽたと涙をこぼした。

「頼むよ、ベルナット……。そのお前がそんな情けないことを言わないでくれ。私たちはみんなお前に憧れて剣を取ったんだ。お前がアクリオンに来るまでは、誰もあの化け物どもに立ち向かおうだなんて勇気を持てなかった。お前がいたから、私たちはあいつらと戦えたんだ……」

どん、と打ちつける拳にはもう力がこもっていない。

「辛いことも苦しいことも一杯あったけど、私たちはここまで来れたじゃないか。なのに、たかが一度や二度の失敗がなんだっていうんだよ。転んだのならまた立ち上がればいい。ただ、それだけの話だろう……？」

「……ルシュア」

ベルナットはマットレスから身を起こし、嗚咽を漏らすルシュアの頭をぎゅっと抱え込んだ。

とくん。間近から心臓の音が聞こえ、ルシュアは反射的に身を固

くする。
彼女は男性との肉体的な経験が皆無だ。それでも、ベルナットの胸板は『男』を感じさせるのには十分だった。
「ごめん、ルシュア。泣かないでくれ。僕は君を泣かせたい訳じゃなかったんだ」
謝罪の言葉を口にしながら、ベルナットは抱きしめる腕に力を込める。
途端に、ルシュアは頭に上った血が急速に顔面へと集まるのを感じた。今になって自分の台詞が、妙に気恥しく思えたのだ。
「こ、こら、痛いって、ベルナット」
「あ、すまない」
弱々しい抵抗を受け、ベルナットは慌てて腕をほどいた。
そこで真正面から向き合う形になり、ルシュアは慌てて顔を俯ける。
（くそっ、サカキ殿が変なことを言うから妙に意識しちゃうよ……）
ルシュアはベルナットを尊敬し、憧れてはいるが、異性として見たことは――少なくとも、本人はないつもりだった。
だが、二人きりの状況。ベルナットの弱さとも言える部分と接したことによって、ルシュアはなにか胸の内で一つの感情が膨れ上がるのを感じていた。
「この人の役に立ちたい」ではなく「この人を支えてあげたい」という想い。
恋慕の入り混じったそれは、胸につっかえたまま、なかなか消えてくれない。
「ねぇ、ルシュア。少し、話を聞いてくれないか」
「は、話？」
ふいに真剣な顔をするベルナットに、ルシュアはどもりつつ答えた。
「この街で産まれ、剣闘士として生きた後、故郷を去ったベルナット・クーガという男の話だ」

くりぬかれた窓の外から、港町の喧騒が部屋の中まで微かに響いている。
だというのに、二人の回りは酷く静かだ。ルシュアは涙の滲んだ目でベルナットを見上げた。
「……聞かせてくれ。私ももっとお前のことを知りたい」
「分かった。といっても、大して面白い話じゃないんだけど――」
ぎしりとベッドを軋ませながら、ベルナットは天井の木目を見上げた。
長い話になるのだ。ルシュアはなんとなしにそう思った。

ベルナット・クーガ？

「元々、僕の父さんは僕と同じ剣闘士だったらしくてね」
静まり返った空間。かすかに響く潮のさざめきの中で、ベルナットはぽつぽつ昔語りを始める。
「それが商屋の下働きの娘と結婚して生まれたのが僕らしい。その後、父さんは闘技場で命を落とし、母さんも病に倒れて、そのまま亡くなってしまった。これが確か一歳くらいのことだったかな。人から伝え聞いたことだから、本当かどうかも分からないんだ」
金色の瞳が過去の情景を思い返すかのように宙をさまよった。
「その後、みなしごになった僕はプリマスの顔役であるケットシーの元に引き取られた。僕の父親はそれなりに有名な剣闘士だったそうで、僕自身も剣闘士として生きることを望まれていたんだ。ケットシーの元には僕以外にも身寄りを亡くした孤児や、親に捨てられた子供たちが集められていてね。みんな剣闘士の養成所みたいなところに預けられて、毎日剣の訓練をしていたんだよ」
例えば、混血故に人間社会からはじき出されたシャムなどもその中の一人だ。
魔族とのハーフは基本的に人間からも魔族からもそっぽを向かれてしまう。彼の母親は幼いシャムをプリマスの裏路地に置き去りにしてしまったのだ。
そこを奴隷商に拾われ、ケットシーがたわむれに買い取った。こういう例はプリマスではそう珍しくない。
「最初に闘技場に立ったのは確か十四の頃だったかな。そこから約五年間、僕は剣奴として働いていた」
「五年間って……そんなに長い間？」
「まぁね。はじめの内は本当に嫌だったさ。闘技場の外じゃ多くの人々が自由を満喫しているってのに、僕ら剣闘士は殺し合いの毎日だ。とにかく、肉を切る感覚になれなくてね。あの頃の僕は、自分

が世界で一番不幸な人間だと思っていた」
「だから、憎んだよ。外の世界の全てを」ベルナットは押し殺した声で言った。
「特に闘技場の観客席から僕ら剣闘士を見下ろし、街中でかい顔をしてる魔族の連中が大嫌いだった。奴らに復讐するため、僕は戦って、戦って、戦って……多くの仲間を殺し、その屍を踏み越えて、プリマスを出た」
「だけどね」と自嘲気味に笑って、ベルナットは頭にかけられた月桂冠をきつく握りしめた。
「そうしていざ外の世界に出てみれば、目に映ったのはゴミのように扱われている人々の姿だ。テッセラリウスの鉱山で働かされている人がどういう生活をしているのか僕も知っていたけど、いざ目にするまではとても信じられなかった。――いや、信じたくなかったのかもしれないな。あの闘技場の中が恵まれた環境だなんて、思いたくなかったんだ」
ぎっと噛みしめられた奥歯が乾いた音を立てる。
「そして、僕はこの時、復讐の理由を失った。いわば、小さい頃から生きるための支えとしてきたものをなくしてしまったんだ」
ぽつぽつと語られる独白を聞きながら、ルシュアは妙に納得していた。
（そうか、だからお前は……）
ベルナット・クーガは魔族に憎悪を抱き、復讐心のまま戦っている人々とは違う。
むしろ、ルシュアの眼にはベルナットが強い使命感に突き動かされた人間に見えた。
だからこそ、彼に率いられている人々も自らの行いを正義と信じることが出来るのだろう。
「ただ――」
ベルナットは小さく息を漏らした後で、おもむろに天井を仰いだ。
「復讐という目的を失っても。いや、失ったからこそ、僕は自分の

目指したものが間違いだとは思わなかった。この大陸じゃ人間は常に魔族の支配下だ。僕はその現状を変えたかった。プリマスやケントリオンではなく、北部森林地帯のアクリオンへ向かったのもそのためだ。今の世界に疑問を持ち、抗う手段を模索している人ならば、きっと僕に協力してくれると思った」

そこで突然、深い金色の瞳にじっと覗き込まれ、ルシュアはつい顔を赤くしてしまった。

「思い出したよ、最初の決意を。一度は自分で決めた道だ。それを他人任せにしようだなんて、甘い考えだったな」

「……ベルナット」

再び精悍さを取り戻した男の横顔に、ルシュアはしばし見とれる。それは確かに彼女が憧れたベルナット・クーガの姿だった。アクリオンの隠れ里で細々と生きていた人々が見た、希望の光だった。

（ああ、そうか。私はこの人が――）

ふいに理解が及び、胸のつっかえがとれたような気がした。

私はこの人が欲しいのだ。どうしようもなく。自分にない輝きを持っているが故に。

ルシュアは誘蛾灯に引き寄せられる蝶のような動きで手を伸ばすと、ベルナットの胸にぺたりと手の平を置いた。

「……ルシュア？」

「ベルナット、お前は強いな」

「ど、どうしたんだよ急に」

「分からない」ルシュアは小さく首を振る。

ただルシュアは触れていたかったのだ。自分が恋い焦がれた男の体に。

手の平から伝わる体温が、心臓の鼓動が、ひどく心地良く感じる。

ルシュアはぼんやりした思考のまま、ふと思った。

もっと触れ合えば気持ち良くなれるのではないのだろうか――

シーツの上に皺を作りながら、ルシュアは身を乗り出し、ベルナットの胸に体を寄せる。

すると、まるで大樹の幹に背を預けているかのような安心感があった。

「……ルシュア。本当にどうしたのさ」

困り果てた様子で、しかし、振りほどくことも出来ず、ベルナットは細い肩に手をやる。

ベルナット自身は女性経験が皆無という訳ではないものの、異性との触れ合いにさほど慣れている訳ではない。

頭の片隅では、ひょっとして慣れない土地のせいで風邪をひいてしまったのか――などと、とんちんかんなことを考えていた。

「ごめん、ベルナット。私は……」

ルシュアは潤んだ目で男の顔を見上げる。

とん、とん、と。

唐突に部屋の扉がノックされたのは、丁度その時のことだ。

「おい、お二人さん。ちょっといいかい？」

返答する間もなくドアが開き、頭に猫の耳を生やした男がひょいと姿を見せる。

突然の闖入者に、ルシュアとベルナットはベッドで身を寄せ合った体勢のまま、揃って硬直してしまった。

一方、部屋を覗き込んだシャムはしばし沈黙した後、額にぺしゃりと手をやり、「あちゃあ」と声を上げ、

「悪いな。お邪魔だったか」

などと言って、にやけた笑みを浮かべて見せた。

ルシュアはそこでようやく意識を取り戻し、慌ててベルナットの前から飛び退いた。

自分の顔が真っ赤に染まっているであろうことは、確かめるまでもなく理解していた。

「なっ、おっ、お前……！」

金魚のように口をぱくぱくさせているルシュアの隣で、ベルナットはかつての友に憮然とした顔を向ける。

「シャム。また僕の前に姿を現すだなんて命知らずだな。一体なん

の用だよ」
「いや、ちょっと聞きたいことがあるんだ。ほら、お前の連れに変な格好したのがいただろ。あいつ、どこに行ったか知らない？」
「ひょっとして、サカキのことを言ってるのか？　確か、外の空気を吸ってくるって出たきりだったはずだけど」
「ああ、そうなの。参ったな。この旅籠の周りは鼠一匹逃げ出せないように塞いでたってのに」
シャムは困り果てた様子で、かりかりと猫耳の付け根を掻く。
そこでようやくベルナットとルシュアも、なにかおかしなことが起きているらしいと気付いた。
既に蓮が出てから三十分近くが経っている。『少し外の空気を吸ってくる』にしては妙に帰りが遅い。
「シャム、一体なにがあったんだ？」
怪訝そうに尋ねるベルナットの前で、シャムは小さくため息を漏らした。
「あの人、いつの間にかこの旅籠の周囲から消えちまったんだよ」

黒い仔猫亭？

丁度その頃、監視の目をすり抜けた蓮はプリマスの裏路地を通り、黒い仔猫亭と呼ばれる酒場にやって来ていた。

黒い仔猫亭は大衆用の酒場というより、ショットバーという表現が似合う落ち着いた雰囲気の店だ。少なくとも、音程のはずれた舟唄を歌う親父や、酔っぱらって踊りだす陽気な若者はいない。

狭い店内には朽ちかけた木製テーブル以外にも流木を切り出して作られたカウンターが設置され、その中でエプロンドレスを身に纏った若い女性が暇そうにコップを磨いている。

店主らしき女性は短い黒髪から猫の耳が飛び出していた。恐らくはシャムと同じ魔族と人間のハーフなのだろう。

獣脂の蝋燭でオレンジ色に照らされた店内はやや寂れた雰囲気で、カウンターに座る蓮以外の客はテーブル席にちらほら見えるだけであり、その客もどこか腹に一物を抱えてそうな顔をした者ばかりだった。

「聞いたか、テッセラリウスの話」

「ああ、なんでもアクリオンの解放軍が魔族の連中をぶっ倒したとか」

「しかも、リーダーはあのベルナット・クーガって話だろ」

「まさか闘技場の元チャンピオンが解放軍を率いてるとはなぁ」

薄暗い酒場の中、小声で交わされる噂話を肴に、蓮はちびちびと青銅製の杯を傾ける。

蓮が飲んでいるのはアクリオンで飲んだぶどう酒よりも、ずっとアルコール分の高い『ワイン』と呼べる代物だ。

プリマスで販売されているこのワインは大半がルガル帝国からの輸入品である。荷揚げされたばかりの酒からは、ほのかに潮の香りがしていた。

「でも、最近ここいらを荒らしてる連中はなんなんだ？」

「流石に別物じゃないか？　一応あいつらも解放軍を名乗ってるけど」
「あーあ、クランの連中が動いてくれりゃいいんだが」
「どうかな。ケットシーの子飼いが、俺たち愚民のために働くとは思えないけどねぇ」
　酒場というのは情報収集に適した場所だ。蓮の聴力を持ってすれば、座ってるだけで人々の会話が自然と外から入って来る。
　しかし、その中に彼の欲しい情報はなかった。そもそも、人の口から聞けるような代物でもないのだ。
　やがて、夜が更けるにつれて客が一人減り、二人減り――
　新たな来客が黒い仔猫亭の扉が押し開けたのは、時刻が深夜にさしかかった頃のことだった。
「探したぜ、サカキとやら」
　どすんとカウンターの丸椅子に腰を下ろしたのは、顔に疲労の色を滲ませた猫耳の男だ。
　蓮は酒杯の中で揺れる深紅の液体を眺めながら、おもむろに口を開いた。
「遅かったな」
「まさか行きつけの店にいるなんて思わなかったんだよ。ランタンの足元暗しとはこのことだ」
「そうか。こちらとしては、分かりやすい場所で待っていたつもりだったんだが」
「今度からは伝言を頼むぜ。でないと、またプリマス中を探し回ることになる」
　シャムは疲れ果てた様子で肩を竦めた。
「で、こんなところでおれを待ってた理由はなんだい？　一緒に酒が飲みたかったって訳じゃないんだろ？」
「ああ。少しお前に聞きたいことがあってな」
「へぇ？」ぴくっと三角形に尖った猫耳が揺れる。
　既に店内には彼ら以外の客の姿は見えない。残るは蓮とシャム、

そしてカウンター内の店主だけだ。
その店主も二人の話を耳にしたためか、カップを磨いていた手を止め、
「シャム、私は外していた方がいいの？」
「いや、残っててくれ。それよりコロニア産のエールが欲しいな。確かいいのが入ってただろ？」
「相変わらず鼻が利くのね。猫のくせに」
店主はどこか楽しげに呟き、ビアマグ片手に店の奥へと消えてしまう。
蓮はその後ろ姿をカウンター越しにぼんやり見送った。
「彼女は？」
「おれと同じケットシーさんの部下だ。この店も黒猫商会がオーナーなんだよ」
「案外、手広く商売をしてるんだな」
「まぁね。あの人はこの街のドンみたいなものだから。商会の息のかかった店は腐るほどある」
シャムは運ばれてきたビアマグを受け取ると、褐色の湖面から立ち昇る豊潤な匂いを胸一杯に吸い込んだ。
ミストリア地方の都市コロニア産のエールはコクの深い味わいで有名だ。ホップの香りを楽しんだシャムは一息に酒杯を煽った。
やや細めの喉がぐびりと音を鳴らし、半分ほど中身の空けられたビアマグがカウンターの上で重い音を立てる。
「ふは、うめぇ！　蘇る！」
「店内では静かにしなさい」
じろりと店主に睨まれ、慌てて身を小さくするシャム。
「で、サカキ。おれに聞きたいことってのはなんだい？」
「我々の交戦している相手。錬鋼の一族の動向について教えて欲しい」
「はぁ？　おれは密偵じゃないんだぜ。そんなこと知る訳ないだろ」
シャムは眉を寄せた。一体なにを言っているんだ、という表情だ。

が、蓮は相変わらずぼんやりと酒杯の中身を眺めたまま口を開くと、

「商売というのは戦争に似ている。特に情報が重視される点で、な」

「なにが言いたい？」

「『大王猫の一族』の族長ケットシーは『クラン』と呼ばれる集団を飼っているらしいな」

「……聞いたこともないんだが」

「誤魔化さずともいい。戦場で重要なことの一つは情報だ。それは商いの戦とて同じだろう。俺はこのプリマスの港街を回ってる途中で、いくつか気になる噂話を耳にした。その中の一つが、ケットシー麾下の傭兵部隊だ」

傭兵といってもこの場合、戦場で槍働きをする者たちではない。例えば中世の日本における忍者のような存在。情報の収集と操作を主な任務とした集団だ。

恐らく、賭場で蓮たちを包囲した面々も、大半がクランの構成員だったのだろう。

蓮は彼らの指揮をしていたシャムを、組織の中でもある程度の立場にいる人間だと踏んでいた。

「あー、うん。そうか。おれが街中をうろうろしてる間、あんたもただ酒を飲んでるだけじゃなかったってことだな」

シャムは困ったようにかりかりと耳の裏を引っ掻き、カウンター越しに佇む女店主を仰いだ。

「サラシナ、こういう場合はどうすればいいと思う？」

「別に教えてもいいんじゃない？　私たちが困る訳じゃないし」

サラシナと呼ばれた女性は投げやりに答える。

この黒い仔猫亭も、元はと言えば商会に属するクランの拠点である。彼女もまた、組織の一員なのだ。

「けど、『クラン』は別にあなたが思っているようなスパイ集団じゃないわよ。諜報面での活動と言ったら、せいぜい港や街中で交わされている会話を選別して、上に報告しているだけに過ぎないわ」

「後はそうだな。裏街でこそこそ阿片を売ってる売人を取り締まったりとか、商会に属してない店からショバ代を回収したりとか、賭場の借金を払わない奴らのキリトリに行ったりとか……」
「なるほど、任侠組織の役割も兼ねている訳か」
「にんきょう？」
「ああ、こちらの話だ」小首を傾げる二人に蓮は言った。
「とりあえず、俺としては敵軍の情報を少しでも知りたい。別に確証のない情報だろうが、酔っ払いの妄言だろうが構わん」
「大分、切羽詰まってるね。まぁ、おれもあのデカブツどもが吠え面かくのはいい気分なんだが……」
そこでシャムはちらりとカウンター越しの店主に視線をやった。
アイコンタクトを受けたサラシナはすぐさま外に出ると、しばし時間を置いて、店内に戻って来る。
「看板をかけてきたわ。今日はあなたたちが最後の客よ」
「ありがたい。これでゆっくり話が出来るってもんだ」
シャムは椅子を軋ませ、蓮に向き合った。
月夜の下。丸く開いた瞳孔を、オレンジ色に燃える蝋燭の火が照らしている。
「まだ自己紹介をしてなかったな。俺は黒猫商会所属、傭兵部隊『クラン』第三隊隊長のシャム・シールだ」
「解放軍参謀、榊蓮。お前の友人、ベルナット・クーガの補佐をしている」
「友人？　あいつを裏切ったおれにそう呼ばれる資格があるとでも？」
どこか拗ねたような物言いをするシャムだが、蓮はなにも答えず、酒杯を傾けるばかりだ。
丁度そこで酒が切れたのか、蓮は空の杯をカウンターに乗せた。
「店主、次はこいつの飲んでいるコロニア産のエールとやらが欲しい」
「……あなた、見た目によらず『のんべえ』なのね。横で他人が美

味しそうに杯を傾けてたら、自分も我慢できなくなるタイプだわ」
「そうか？　人として当然の心理だと思うが」
口元をつり上げる蓮に、サラシナは呆れた様子でビアマグを突き出す。
受け取った蓮は一口、二口、褐色の液体に口をつけ、小さく吐息を漏らした。
きつい酸味と咥内から鼻へと抜け出るような強い酒精。胃の奥がかっと熱くなる感覚が、なんとも心地よい。
「なるほど、これは悪くない。着飾っていない自然の味がする。いい酒だ」
「へぇ、あんた結構いける口なのか。堅物そうなのに意外だな」
「俺が思うに、酒の味が分かる人間に悪人はいない」
「自分が善人だって言いたいのか？」
「いや、お前が理由もなく友人を裏切るような人間ではない、と言いたいだけだ」
シャムはその言葉に、ビアマグを傾けかけていた手をぴたりと止める。
一瞬、反射的に唇が開き、しかし、放たれかけた台詞は無理矢理飲みこまれてしまう。
代わりに、シャムは自嘲するかのような笑みを返した。
「おれの事情はどうでもいいさ。それより、あんたは錬鋼の一族の情報が欲しいんだろ？」
「ああ。特に気にかかっているのは、オプティアの情勢と錬鋼の一族主力の動向についてだ」
「ふーん、その程度ならこっちの耳にも入ってるけど……」シャムは値踏みするかのように蓮を見た。
「ここはプリマス。商人の町だ。例え、米粒一つでもタダで渡すことは出来ねぇな」
「金か？　言っておくが銀貨の持ち合わせはないぞ」
「おれも金はいらねぇよ。だから、こっちの情報を渡す代わりに解

放軍の現状を教えろ。後でケットシーさんに報告させて貰う」
「仕事熱心だな。しかし、解放軍のなにが聞きたい？」
「――四軍将のレオパルトを捕虜にしたってのは本当なのか？」
身を乗り出すシャムの前で、蓮はほんの微かに眉を寄せた。
テッセラリウスで解放軍とレオパルト率いる討伐隊が交戦したことは、このプリマスにも広く知れ渡っている。
だが、レオパルトを捕虜にしたという情報はほとんどテッセラリウスの外部に漏れていないはずだった。
（やはり、解放軍の内部に間諜を送り込んだのはこいつらか）
サラシナはクランのことをスパイ集団ではないといったが、蓮はそんな台詞、はなから信じていなかった。
相手は情報という糧を貪り食らう怪物だ。一筋縄で行かないことは百も承知である。
「本当だ」
蓮は一拍の間を置いて答えた。
「今は牢屋に入ってるんだが、これが凄まじく強情な性格でな。こちらの欲しい情報をまるで話す様子がない。おまけに人間と違って表情が分からんから誘導尋問も難しいし、拷問しようにも針も鞭も効かんと来ている」
「要するにお手上げ状態ってことか。まぁ、軍将の中でも筆頭のエイブラムスと北軍大将のレオパルトは大王に対して特に強い忠誠を誓ってるらしいしな。多分、自軍の情報を吐くくらいなら舌を噛み切って死ぬんじゃないか？」
「大丈夫だ。一度自殺しかけた事があったから、今は猿轡を噛ませている」
冗談にしては生々しい台詞に、シャムは頬を引きつらせた。
実際、蓮もレオパルトを捕虜にしたはいいものの、その扱いには困り果てていた。
隙あらば自害しようとする上に、水も食料も摂ろうとしない。いくら人間より遥かに体力のある種族とはいえ、あれでは遠からず衰

弱死してしまうだろう。
「そうだな。後、確認したいことと言えば――」
「待て、今度はこちらから尋ねる番だ」続けて質問しようとするシャムを蓮はさえぎった。
「先にオプティアの情勢を教えて欲しい。あそこは今、統監であるレオパルトが不在のはず。こちらがテッセラリウスを陥落させたとあっては平静でいられまい」
テッセラリウスからオプティアまでは人の足で約二日ほどの距離だ。
その上、オプティア側は三穂槍平原とテッセラリウスの戦いで、千の兵、五の族長、一人の軍将を失っている。
彼らからしてみれば、喉元に仲間の血で濡れたナイフを突き付けられているような気分だろう。
「……確かに今、オプティアは混乱してる」
ビアマグの中で揺れる気泡に目を凝らしたまま、シャムは慎重に言葉を選んでいる様子だった。
「錬鋼の一族の統治は力による支配だ。軍事の象徴である四軍将が討たれれば、屋台骨が揺れる。なんでも旅商人から聞いた話によれば、オプティアじゃ既に反乱が起きかけてるらしい」
「ほう。で、魔族側の対応は？」
「オプティアに駐留している軍は右往左往してるだけで使い物にならないんだとか。その代わり、トリブヌットからルクレールが出たそうだ」
「ルクレール……レオパルトと同じ軍将の一人か」
『人形の街』トリブヌット統監ルクレール。大陸中央を管轄する、四軍将の一角である。
事前にライムから聞いた話によれば、ルクレールは猛将で知られるレオパルトと違い、軍師肌の武将らしい。
今まで目立った戦果を上げていないため一族の中では末席に置かれているものの、効率的に部隊を運用する能力に関して言えば、四

軍将でもトップクラスの実力を持っているはずだ。
（厄介なのが出てきたな）
正直なところ、蓮は軍将の一人が動くまでまだ余裕があると思っていた。
レギオニール地方の各都市を支配する四軍将は、有事に際し独断で駐留軍を動かす権限を持つ。
とはいえ、テッセラリウスが落ちてからまだ一週間も経っていない。恐らく、ルクレールは早馬でテッセラリウス陥落の報を聞いた瞬間、オプティアで反乱が起きることを予測し、すぐさま鎮圧の兵を起こしたのだろう。
「シャム、トリブヌットを発った部隊の規模は？」
「二千程度って話だぜ。ただ、オプティアに着けば現地の駐留軍と合流するだろうから……」
「合計三千か。少々面倒な数字だな」
現在、解放軍が動員出来る兵数は多く見積もっても三千名程度。つまりは敵と同数だ。
これはテッセラリウスで働かされていた鉱山奴隷の大半が、労役・兵役に適した成人男子であったためだが、この三千という数字の中で実際に戦場を経験した者は、全体の十分の一にも満たない。
対する相手は人外の魔族だ。例え数値の上では同等の兵力でも、素人に槍を持たせただけの民兵ではとても太刀打ちできないだろう。
（それに、我々がどれだけ急いでもルクレールのオプティア入りを阻害するのは不可能だ。俺たちがこの情報と共にテッセラリウスに戻り、軍備を整え、オプティアを目指すとなれば最低でも五日はかかる）
その間、ルクレールは悠々とオプティアへ到達し、現地で軍を整えるはずだ。
そこにろくな訓練も積んでいない兵を突っ込ませるのは、自殺行為以外のなにものでもない。
「さて、それじゃあ今度はこっちが質問する番だな」

蓮の悩みを他所に、シャムは褐色のエールをぐびりと飲み下し、
酒臭い吐息を漏らした。

「先日、解放軍とケントリオンの間で同盟が結ばれたって情報がプリマスに流れてきた。これは本当の話なのか？」
「いや、間違いだ。ケントリオン側から使者が来たのは確かだが、同盟に関してはこちらから蹴った」
「け、蹴った？　どうしてだよ？」
「一々説明するのは面倒なんだが――」
蓮は先日、テッセラリウスの会議室で交わされた会話を余さずシャムに聞かせてやった。
ケントリオンの意図、目的。国力の差がある以上、対等な同盟にならないであろうこと。
そこまで聞いてようやく理解に及びついたのか、シャムは納得したように頷き、
「なるほどね。えらい人は色々考えてるってことか」
「単純に仲間が増えればそれでいいという訳でもないからな」
「ただ」と蓮は言葉を続け、
「いずれケントリオンとは手を結ぶ時が来るだろう。現時点でも最高学士府長官のライムがこちらの軍に加わっている。オプティアを制圧し、我々の勢力が伸長すれば、ケントリオン側も対等の立場として同盟を結ばざるおえないはずだ」
「じゃ、今んとこは友達以上恋人以下。いずれは結婚を前提にお付き合いって感じかな？」
「例え方は妙だが、そんなところだ」
蓮は生温いエールで喉を潤した。
実際のところ、解放軍とケントリオンはそこまで緊密な関係を結んでいる訳ではない。
ライムが解放軍に参加したのも彼女の独断によるもので、ケントリオンの首脳部は関与していないのだ。

蓮がわざわざ勘違いさせるような言い方をしたのは、シャムの向こうに今回の取引相手であるケットシーの姿を見据えているからに他ならなかった。

ケントリオンとの関係を強調しておけば、いずれ解放軍の利となるだろう。

「では、次はこちらの質問に答える番だ」

「錬鋼の一族主力の動向だっけか？　それって要するに――」

「今のところ解放軍が相手をしているのは各都市の駐留軍。いわば防御のために編成された軍であって、攻撃のための軍ではない。現在、大王ベルヴェルグ・ウォーデン率いる一族の主力が、どこでどう動いているかを知りたいんだ」

「それを説明すると、また長い話になるんだが……サカキ、あんた『大陸四帝（テトラルキア）』ってのは知ってるよな？」

「ああ」と蓮は小さく頷いた。

現在、この大陸は四つの地方に分けられ、それぞれ四人の魔王によって分割統治されている。

『大陸四帝（テトラルキア）』というのは元々その四頭体制に対する呼称だったが、やがては四人の魔王そのものを指すようになっていた。

その中の一人が、レギオニール地方の支配者。『錬鋼の一族』が大王、『軍神』ベルヴェルク。

そして、もう一人はミストリア地方の支配者。『千枚翅（せんまいばね）の一族』が女王、『飛蝗帝（ひこうてい）』エルニシアだ。

エルニシアは大陸西部にはびこる蟲たちの王であり、残虐非道な性格と人肉を好む野蛮な嗜好で広く知られていた。

「一応、大陸四帝は四頭体制が出来た百年前から『相互領土不可侵』の盟約を結んでいたんだ。この盟約が崩れたのは、五年前にベルヴェルクがケントリオン攻めに取りかかった直後のことだな。一族の主力が東に向かったのをいいことに、エルニシアは東の国境から一気にレガティアへ攻め込んだんだよ」

シャムはビアマグを左の手から右の手へ滑らせる。

「おまけにこの時、ケントリオンに向かった部隊は冬の女王の策略で半壊状態になっていた。まぁ、肝心の女王は戦の途中でベルヴェルクに殺されたんだけど……」

「殺された？」

「そうだよ。ちなみに殺されたのは三代目の女王だ。このせいでケントリオンの連中は相当、錬鋼の一族を恨んでいるらしい。解放軍に同盟を申し込んだのも、私怨を晴らす機会だと思ったからじゃないかな」

なるほど、と蓮は内心で納得をする。

以前ライムは言っていた。自分は個人的に錬鋼の一族に対して恨みがある、と。

その理由は恐らく、自身の主がベルヴェルクの手にかかって殺されたためなのだ。

「すると今の女王は……」

「四代目だ。ただ、中身は二代目のばーさんだけどね。娘の死後、彼女の母親が再び女王の座に就いたんだよ」

「三代目に娘はいなかったのか？」

「いたけどまだ生まれたばかりで、今ようやく五、六歳ってところじゃないかな？　氷雪姫の一族は二十半ばで成人になるから、この娘が『冬の女王』を襲名するのは二十年後くらいになると思うぜ」

「話が逸れたな」と、シャムは脱線しかけた話題を本筋に戻した。

「戦端が開かれた当初、レガティアへ殺到したエルニシアの軍は十万に上ったらしい。対する一族側は駐留軍と各地に散らばる兵をレガティアに集めたものの、合わせて五千にも満たない。つまり絶望的な兵力差がある上、増援もすぐには望めないってことだ。正直なところ、おれもレガティアの陥落は免れないと思ったね」

「……だが、レガティアは落ちなかった」

淡々と事実を口にする蓮に、シャムは「ああ」と頷き、ぐいと酒杯を傾けた。

この『東西戦争』と呼ばれる戦乱の際、前線で部隊の指揮をして

いたのは現四軍将筆頭のエイブラムスだ。
そもそもレガティアは『技師の街』と呼ばれており、器械道具―特にバリスタやチャリオットのような軍事兵器。更にはカタパルトやマンゴネル、トレビシュットを始めとした投石機を多く製造している都市であった。
エイブラムスはこれら投擲兵器から大量の可燃物を発射し、更に燃え盛る藁の塊を投げ込んで、レガティアを包囲した敵部隊をことごとく焼殺したのである。
結果、エルニシア率いる軍勢は敵の本拠であるレガティアを前に二の足を踏んでしまった。
そこに襲いかかったのは、ケントリオンからとんぼ返りしてきたベルヴェルグ率いる錬鋼の一族の本隊だ。
彼らは瞬く間にレガティアに群がる敵勢を駆逐すると、西の国境まで追い散らしてしまったのだった。
「んで、この戦い以降、ベルヴェルクとエルニシアは国境沿いで小競り合いを繰り返してるって訳だ。だから、ベルヴェルク率いる一族の主力は西の果てから離れることが出来ないし、三年前に中央で大きな反乱が起きた時も、鎮圧したのはエイブラムスを始めとした四軍将の面々だった。ベルヴェルク自身はここ数年、レガティアから東に顔を見せてないんじゃないかな」
「なるほど。しかし、両者が再び休戦条約を結ぶような気配はないのか？」
「ないね。あいつらの仲の悪さは犬と猿のそれより酷いんだ。休戦なんて絶対にありえない……いや、ありえないはずだった、というべきか」
歯切れの悪い回答に、蓮は眉を寄せる。
「どういうことだ。お前の言い方はまるで、連中が休戦への道を辿りつつある、と言っているように思えるが」
「その認識は間違ってない。今までベルヴェルクとエルニシアの間には深い断崖が渡っていた。けど、そこに橋をかけようとしてる奴

らがいるんだ」
「和平介入だと。一体、どこのどいつがそんな真似を――」
蓮はしばし黙考する。
そもそも、二人の強大な魔王を相手取り、和平を結ばせるなどという荒技を扱える人物はそう多くない。
いや、もっと言えば大陸広しといえど、彼らと正面から渡り合えるのはただ一人だけだろう。
すなわち、彼らと同じ大陸四帝の一人。ルガル帝国の頂点に立つ『諸王の王』。
「……バシレウス・バシレオーン。大陸東部を支配する四帝の一角か」
断定口調で放たれた台詞に、シャムは「ご明察」と笑みを浮かべて見せた。
「どうもエルニシアの側がいつまで経っても矛先を収めないベルヴェルクに辟易したらしく、バシレウスに助けてくれと泣きついたらしい。まぁ、理由はそれだけでもないみたいなんだが……ともかく、バシレウスは両者の調停役として、このレギオニール地方に自らの名代を送り込んだ。軍将筆頭のエイブラムスがわざわざこの街に来てるのも、海路を渡ってやって来た調停役を出迎えるためなんだよ」
四帝同士の諍いを治めようとするならば、彼らと同列の者が出張るしかない。
となると、候補に上がるのは四帝の内の残り二名――東のルガル帝国を治めるバシレウス。もしくは北の大荒原に住まう獣たちの王だ。
この内、大荒原の『獣王』は大陸四帝の一人に数えられているものの、そもそも実在するのかも不確かで、伝説でしか名の語られていないような曖昧な存在である。
大陸中に名の知られた大帝国ルガル。その支配者バシレウスに比べると、表舞台に出てくる可能性は極めて低かった。
（しかし、まずいことになったな……）

もし和平が結ばれ、西の果てからベルヴェルクが引き上げた場合、人間たちに奪われたテッセラリウスは真っ先に彼らの標的となるはずだ。

おまけに兵糧に悩まされている解放軍とは違って、錬鋼の一族は食事の心配をする必要が薄い。

彼らはいざとなれば各地で人間を徴収し、その血肉を啜ることで生き永らえることが出来るのだから。

「だが、何故エルニシアは急に和平を？　『理由はそれだけでもない』という言葉となにか関係しているのか？」

「まぁね。これは多分、あんたやベルナットに対しても朗報だ。今、ミストリアではこのレギオニール地方と全く同じことが起きている」

「なんだと？」

尋ね返す蓮の前で、シャムは暇を持て余していたサラシナにちらりと視線をやった。

「サラシナ、外の話は店にいる君の方が詳しいだろ。サカキに説明してやってくれ」

「分かったわ」

「あとなんかつまみくれないか。チーズがいいな」

「はいはい」

「店主、俺にもなにか食べる物を。干し肉があればそれで」

「……」

サラシナは無言でスライスされたブリーチーズと馬肉のジャーキーを乗せた皿を渡した。

酒飲み二人がそれを仲良くつまんでいる姿を眺めつつ、サラシナはカウンター越しに蓮へと声をかける。

「サカキさん、今ミストリアで『革命軍』って呼ばれてる人たちが魔族と戦っているのは知ってる？」

「いや、初耳だ」蓮は犬歯で硬いジャーキーをむしりながら答えた。

「だが、ミストリア地方でも人間の蜂起があったのか。人づてにエルニシアはベルヴェルクよりも人間の扱いが酷いと聞いたことはあ

るが」
「本当よ。そもそも、大陸の南西部にはまだ深い密林が多く残っていて、そこに暮らしている人たちの多くはここよりずっと原始的な生活を送っているの。そして、エルニシアは彼らを単なる動物としてか扱っていないわ。ミストリアの人々はある時には面白半分に狩り立てられ、またある時にはこのプリマスへ奴隷として送られてくるのよ」
「そういえば、ミストリア地方の主要輸出品は奴隷と食糧だったな」
「ええ。単にあの国には他のものがないからなんだけどね」
サラシナはどこか苦々しげな様子で、そんな台詞を口にした。
蓮自身、プリマスの街を回っていた時に、檻に入れられた少女や鎖に繋がれた若者の姿をちらほら見かけていた。
一説によれば、プリマスの港には日に百以上の人間が商品として流れ込んでくるという。
そのほとんどはミストリア地方出身で、彼らはオプティアやテッセラリウスへ送られた後、死ぬまで奴隷として働かされるのだ。
「サラシナ、その革命軍とやらが決起したのはいつ頃の話だ？」
「ええと、こっちに情報が流れてきた月日を逆算すると……多分、一節（十五日）くらい前の話だと思うわ」
「なに？　つい最近じゃないか」
「そうね。でも、革命軍を率いているリーダーはこの短期間で次々とミストリア地方の諸都市を落としているそうよ。正直、エルニシアが焦って和平を結ぼうとするのも無理はないわ」
「異常だな。ミストリア地方を支配する魔族とて、一筋縄ではいかん連中だろうに。そのリーダーとやら、どんな人物なんだ」
「正確な名前は知らないんだけど……」
サラシナはそう付け加えた後で言った。
「その人、『雷神（バルカ）』って名で呼ばれているらしいわ」
瞬間、蓮の中であらゆる疑問と違和感が弾けるように霧散した。
代わりに胸の内を覆ったのは、溢れんばかりの高揚だ。

四肢に満ちる興奮のまま、蓮は椅子を蹴って立ち上がる。
ぎょっとした表情を浮かべるシャムとサラシナの眼前で、蓮は小刻みに肩を震わせた。

「そうか。そうか。そうか……」

つり上がった口元には、抑え切れぬ笑みが浮かんでいた。

「――来たか、ハンニバル」

ミストリアの革命軍

その日、百年以上に渡る大戦のはじまりの日。

「八紘一宇」をスローガンとして掲げる『帝国』は、ヨーロッパを中心とする世界の大半を支配していた欧州連邦共和国に対し、ロシア方面・西アジア方面という二つのルートから、大規模な侵攻を開始した。

一方、共和国側は帝国に対し十分な警戒をしていたものの、宣戦布告なしで行われた奇襲により緒戦のほとんどを大敗し、特に西アジア方面は一気に北アフリカ、エジプト付近まで攻め落とされるという体たらくであった。

別段、両国の国力がかけ離れていた訳ではない。むしろ、単純な資源と人員の総量では共和国側が勝っていただろう。

共和国側は本国付近まで攻め込まれたものの、実際には伸びきった相手の補給路を叩き、戦線を押し返すことはそう難しくないはずだった。

だが、この時点で既に民衆の心は折れかけていた。戦争によって次々と人命が失われ、地球の環境が破壊されていくことに、嫌気がさしてしまったのだ。

折しも、開戦から一ヶ月も経たぬ内に帝国側からは停戦が打診されていた。言うまでもなく、その内容は停戦とは名ばかりの降伏勧告である。

しかし、国内の世論はそれを受け入れるのもやむなし、という方向に転がりつつあった。

なにか奇跡のような代物が――救世主となるような人物が必要だった。

神の奇跡を待つ余裕はない。それならば人の手で、英雄と呼べる

者を作り上げる。
　共和国議会がその決断を下したのは、エジプト・カイロに築かれていた要塞が当時、帝国陸軍の大佐であった榊蓮の手によって陥落した翌日のことだった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

「人生を楽しく生きるコツは――」
　夜風に吹かれながら、男はブナの幹を削りだして作られた木杯を夜の月に掲げた。
　眼下に広がるのは青々と生い茂り、収穫の時期を今か今かと待っている麦畑だ。
　男は土壌の中から突き出た岩塊に腰かけ、酸味の強いエールをのんびりと傾けていた。
「いい酒を最高のつまみと共に楽しむことだ」
　男は言った。眼前の光景を眺めながら。
　麦畑の中に転がされているのは、どす黒い血をこぼす虫たち。成人男性の背丈ほどの大きさをした巨大蜘蛛だ。
　その凄惨な有様を睥睨する男は、名工の手によって彫り上げられた彫像そのままの姿をしている。
　僅かにカールした蜂蜜色の髪。淡い象牙色の肌。肉感的ながら均整のとれた肢体。
　ただ、青く輝く紺碧の瞳と、肩から無造作に羽織った灰色の軍服が、男を偶像と異なる、この世の生物であることを証明していた。
　――共和国陸軍少将。『東征将軍』ハンニバル・バルカ。
　それが彼の名。かつての世界から与えられていた称号だ。
「そして、この世にはどんな不味い酒でも、たちまち素晴らしい美酒へと変えてくれるつまみがある」

一筋、刻まれた口元から漏れる声には、舞台役者のようなハリがある。

軍服の肩に取り付けられた飾緒を弄びながら、ハンニバルは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「さて、そいつは一体……」

「『勝利』ですね」

冷えた夜風に乗って、ハンニバルの横手から少女の声が響く。

台詞を遮られたハンニバルはしばし沈黙した後、ため息交じりに額を押さえた。

「おい、ジャンヌ。人が格好つけてんだから最後まで言わせろよ」

「申し訳ありません」

首をめぐらせるハンニバルに、少女は機械染みた動作でぺこりと頭を下げた。

ぱりっとした軍服の似合うスレンダーな体躯。風が吹く度に肩まで伸びた栗毛色の髪が、やわやわと震えている。整った目鼻立ちは、絶世の美少女と言っても過言ではないだろう。

ただ、その瞳は青く凍っており、感情らしきものはほとんど伺えない。

まるで氷で出来た薔薇だ。あるいは単なる人形か。

（全く、この無愛想があの救国の聖女ジャンヌ・ダルクをモデルとして作られた人間だというのだからな。世の中はなにか間違ってるぜ）

鉄面皮の少女を前に、ハンニバルは人知れず嘆息した。

もっとも、彼自身。そう文句を言える立場でもない。

何故なら彼もまた、ジャンヌと同じく科学を母として、禁忌を父として産み落とされた『人造偉人（レジェンドモデル）』の一人――

カルタゴの偉大な名将『ハンニバル・バルカ』の再来と呼ばれた男なのだから。

大戦初期の折、窮地に追いやられた共和国の内部で一つの計画が持ち上がった。

『L計画』と呼ばれるそれは、かつて歴史上に存在した偉人を遺伝子調整によってモデリングし、再びこの世に送り出すという計画だった。

いわば、人間の手で奇跡を、英雄を作り上げようと試みたのである。

もっとも、共和国議会の狙いはこの伝説の復興により、戦場における兵の士気を高め、国民の戦意を高揚させることであり、実際に作成されたレジェンドモデルが前線で指揮を執ることまでは想定されていなかった。

――このL計画は一部では失敗し、一部では成功を収めることとなる。

レジェンドモデルにおける失敗点。それは彼らが人間としての感情を持っていたことだ。

彼らの大半は再誕した英雄という自らの立場に困惑し、中には自身の存在意義に対して激しい葛藤を覚える者までいた。

そのためか、初期につくられた五人のモデルの内、首脳部の思惑通りの行動を取った者は一人としておらず、めいめい指揮官としての権限を与えられたのをいいことに、好き勝手兵を率いて戦場の各地で暴れ回り始めたのである。

特に東ヨーロッパ戦線へ向かったハンニバル・バルカは機甲師団による包囲殲滅戦で瞬く間に敵陣を攻略し、東征将軍と讃えられた。

確実な勝利が積み重なるに連れ、国民の頭から降伏という言葉は消え去り、継戦の機運が高まったのだから、結果的に議会の狙いは成功したともいえる。

だが、それは百年以上に渡る戦争における、ほんの幕開けに過ぎ

なかった。

「あの世界では、こうして月を見ながら酒を飲むなんて夢のまた夢だったのにな。なんの因果か、こんな化け物だらけの大陸まで来てしまった」

誰に言うでもなく呟き、ハンニバルはぐびりと褐色の液体を喉に流し込む。

ミストリア地方の都市、草原の都コロニアで生産されたエールは強い風味と、胃の焼けるような酒精を持つ逸品だ。

ハンニバルが麦畑の広がるこの街に襲撃をかけ、支配者だった『闇蜘蛛の一族』の族長を殺害し、この美酒を掘り出したのはつい先ほどのこと。

奇しくもほぼ同じ時に、彼の宿敵であった榊蓮が同じ酒を堪能していたのだが、ハンニバル自身はそんな事実を知るはずもない。

「……一体、私たちの身になにが起きたんでしょうか」

酒をあおるハンニバルの傍ら、彼と共にこの異世界へ流れ着いたジャンヌが、玉を転がすような声に僅かな不安の色を滲ませる。

「あの時、サカキ司令がカイロ要塞と運命を共にした時、私たちは確かに一度死んだはずなのです。正直、私にはいま目の前にある光景が幻のように思えます」

「おれもだ。だが、少なくともここは天国ではないな。こんなおぞましいエデンの園があってたまるか」

ハンニバルはぺっとエールの中に混じっていた大麦の粒を吐き捨てる。

ハンニバル、ジャンヌ、そしてその他数名の共和国に所属していた軍人は、あの『黒い核』の爆発に巻き込まれた後、この大陸へと流れ着いていた。

そこで彼らが遭遇したのは、巨大な虫の姿をした魔族と呼ばれる

化け物だ。
　国土の大半を密林に覆われたミストリア地方では、土着の人間が原始的な暮らしを送っており、主に狩猟と採集、畜産などで生計を立てている。
　ただ、彼らの中に王と呼べるような存在はいない。
　この地で彼らを支配しているのは、おびただしい数の虫たちによる千の氏族――
　その頂点に立つのが『千枚翅の一族』が女王。大陸四帝（テトラルキア）の一角。『飛蝗帝』エルニシアである。
「しかし、少将。本当にこれで良かったのですか？」
　ふいにジャンヌは押し殺した声で、ハンニバルへと尋ねかけた。
「我々は単なる漂流者に過ぎません。それが革命軍などと名乗って戦乱を巻き起こすのは、この世界の理を捻じ曲げることに繋がるのでは？」
「世界の理？　そいつはなんだ？　人ひとりの命より重いのか？」
「分かりません。どちらも天秤にかけられませんから」
「……まぁ、確かにな」
　どこか間の抜けた受け答えをする副官の前で、ハンニバルはがりがりと頭を引っ掻いた。
「この世界はおれたちのいた世界と違って、人間が絶対的な上位者って訳じゃあない。それでも、魔族が上、人間が下、という形でそれなりに上手く回ってきたんだろう。この世界とおれたちの世界は、よく似ているようで根本的な部分が違う」
「そこまで分かっているのならば、何故その調和を崩すような真似を？　弱者を食いものにすることなど、今まで人間が散々やってきたことではないですか」
「分かっている。そんなことはおれとて分かっているさ。だがな、ジャンヌ。おれたちは作られた偽物かもしれんが、それでも『英雄』だ。目の前で窮地に陥っている民がいるというのに、それを救わん理由がどこにある」

「所詮は押しつけられた役割です。少将がそれに振り回される必要はないのでは？」

「押しつけられた役割？　結構じゃないか。なにせおれはな、今の自分をそれなりに気に入っているんだ」

「……でしたら、私に言えることはなにもありません」ジャンヌは無表情のまま引き下がった。

ハンニバルが人々を率い、革命軍として戦うようになったのは半月ほど前の話だ。

彼は最初に現地の住民たちを取り纏めると、即席の軍を編成し、遊撃隊によるゲリラで敵陣を攪乱しつつ、ミストリア地方西部の諸都市を次々と陥落させていた。

無論、これはハンニバル自身が超人的な兵士で、現代の戦略を操ることが出来たからこその成果である。

その上、彼の手元には地球から流れ着いた軍事兵器が、少数ではあるものの存在していた。

（とはいえ、出来れば『ビスマルク』まで持ち出したくはないが……）

ハンニバルは自らが所有する兵器の中でも一際、凶悪な代物を脳裏に思い浮かべる。

もし『ビスマルク』ほどの兵器が戦場で猛威を奮えば、大陸全土の魔族を殲滅することも容易いだろう。

だが、過ぎたる力が人々を惑わせ、己の身を滅ぼし、最後には自らの星すら食いつくしてしまうことを、大戦初期からの軍人である彼はよく知っていた。

それにハンニバルは他者から与えられる自由に意味などないと思っている。

自由とは――自らの手で戦い、勝ち取るべき代物なのだ。

「少将、そろそろお時間です」

金属製の古臭い懐中時計を眺めていたジャンヌが、囁くような声で言った。

本来、バイオチップによる生体コンピューターを埋め込まれた彼らは、脳内に時計機能を有しているから、わざわざ時刻を確認する必要はない。

にも関わらず、こんな骨董品を持ち歩いているのはジャンヌの癖のようなものだ。

円形の蓋を閉じた後で、ジャンヌは大切そうに懐中時計を懐にしまい込んだ。ちゃりり、と銀の鎖が胸元で音を立てる。

「よし、それでは出るとするか」

ハンニバルは立ち上がった。灰色の軍服が風に吹かれ、ばたばたと裾をはためかせる。

その後背には既に幾本もの燃える松明が掲げられ、コロニアを陥落させた彼の『軍団』を赤々と照らしていた。

野外にずらりと整列した兵の数、およそ五万。そのほとんどは顔面に色鮮やかな戦化粧を施し、頭に野鳥の羽根で作った冠を被った、戦士の装いをしている。

野山をかけるミストリアの民は、逞しい肉体と何事にも挫けぬ強靭な精神を持つ人々だ。

分厚い胸板の目立つ上半身は裸で、手に持った武器は石や木で作られた代物が大半だが、個々の力は完全武装した魔族にも見劣りしない。

背後へと振り返ったハンニバルは、張りつめた面持ちに意気をみなぎらせる戦士たちを眺め、にっと満足気な笑みを浮かべた。

「さぁて、行こうか諸君。戦争のお時間だ」

朗々とよく通る声が、草原の隅々まで響き渡る。

「コロニアは落とした。次は連中の本拠を火攻めにしてやろう。諸君、足を止めるなよ。サンダルの底で奴らの死骸を踏み抜いてやれ。人間の強さがいかほどのものか、剣で連中の身に刻み込んでやれ。戦え。戦え。戦え。このミストリアに棲むウジ虫どもを一匹残らず駆逐する日まで。自由と解放をおれたちの手で勝ち取るために……！」

ハンニバルの演説が熱を増していくに連れ、人々の口から次々に「雷神（バルカ）」の声が上がる。

やがてそれは複数の唱和となり、盾と槍を打ちつける音、地面を足踏みする音と混ざって、大気をびりびりと震わせた。

戦機は満ちた。次なる目標はミストリアの中核、霊樹の都モンティアナ。

草原を駆け抜ける稲妻は、立ち塞がる敵全てを焼き尽くすだろう。

「我らはこの世界の理に宣戦布告する者なり！　ミストリア革命軍――出るぞ！」

高々と天に向かって突き上げられる拳。

追って、幾重にも重なった雄叫びが、人外魔境の地に遠雷の如く轟いた。

闘技場？

翌日の昼過ぎ、旅籠に泊まっていた蓮たちは商会から市街中央の闘技場へと呼び出されていた。

港湾から離れた地に建てられた闘技場は所謂コロッセオと呼ばれる円形の代物であり、遠くから眺めると巨大な石鉢に見えなくもない。

闘技場の観客の収容人数は約一万。貿易都市プリマス全体の人口は十万程度だが、客席が満員にならない日はむしろ少なく、連日立ち見する者まで出るのが普通だった。

「で、サカキ。昨日はどこ行ってたんだよ」

裏口から続く関係者専用の薄暗い通路を歩きながら、ベルナットはちらりと蓮の様子を盗み見た。

結局、あの後もシャムと話し込んでしまった蓮は、朝になってようやくベルナットたちの留まる旅籠へと帰っていた。

無論、残された二人から無言の糾弾を受けたのは言うまでもない。朝帰りの上、全身からアルコールの匂いを立ち昇らせていればそれも当然のことだったが。

「サカキは昨日、おれと一緒にサラシナんとこに行ってたんだよ。ったく、この人かなりの酒豪でさ。おれの二倍は飲んでたってのにぴんぴんしてやがる」

蓮、ベルナット、ルシュアら三人の前で灰色の尻尾を揺らすのは、上司に先導係を申しつけられたシャムだ。

ひどい二日酔いのためかその足取りに力はなく、アーモンド型の目の下には黒々としたクマまで出来ていた。

「あー、頭いてぇ……それにしても、今日はなんて厄日なんだ。結局、酒場の代金も全部奢らされたし」

「飲み比べを挑んできたのはそっちだろう？　負けた方が全額払いなどと言うからだ」

「そうだけどさ。あんたそもそも金持って来てなかったし、最初からおれに奢らせる気満々だっただろ」
「まぁな」
あっさり認める蓮の前でシャムは盛大にため息を漏らした。
一方、ベルナットは妙に仲のいい二人を見て、怪訝そうに眉を寄せ、
「君たちなんだか意気投合してるように見えるけど、昨日、酒場で一体なにを話してたんだい？」
「別に。ただ情報交換をしただけだ」
「情報交換？」
「敵軍の動きを早い段階で知っておかなくてはならなかったからな。本来は自前の諜報機関があればいいんだが、流石に今の解放軍にそれを求めるのは難しい。だから、他所に頼らざるおえなかった」
「他所って、ひょっとして商会の？」ベルナットは目をしばたかせる。
「じゃあ、シャム。君、まさか『クラン』に入ったのか？」
「おう。今じゃ第三隊の隊長サマだぜ」
「そんな……第三隊っていったら裏街の執行部隊じゃないか。なんであんな物騒なところに」
「腕っ節だけが取り柄の剣闘士が他に行けるとこなんてないだろ？商会の下働きとか船乗りの手伝いとかよりかは遥かに――ほら、給料もいいしな」
冗談めかして答えるシャムだったが、ベルナットは逆に眉を曇らせてしまっていた。
蓮にもベルナットの気持ちはなんとなく分かる。二人の立場が明確に異なっている以上、これからの交渉が決裂した場合は、敵味方に別れて争わなくてはならないのだ。
（そもそも、ケットシーは何故ここを会談場所に選んだんだ？）
当初、蓮は商会の拠点で商談が行われるものだと考えていたが、実際に呼び出されたのはこの闘技場の内部だ。とても交渉に向いた

場所とは思えない。
だが、プリマスの港で集めたケットシーの評価は、狡猾で腹黒く、油断のならない人物というものがほとんどだった。
なにしろ、『大王猫の一族』の族長ケットシーは、『商会』と『クラン』という二つの組織で貿易都市の表裏を支配しているばかりか、レギオニール、ミストリア、ルガルといった列強とも対等に取引を続けているほどの傑物だ。
恐らく、この舞台も考えなしに用意した訳ではなく、なんらかの企みがあるのだろう。
「ところで、ベルナット」
ふいに蓮は声をひそめ、隣を歩く男に声をかけた。
「どうも今朝から一人だけ様子のおかしい奴がいるんだが、昨日の夜なにかあったのか？」
「……」
ベルナットは沈黙した。代わりに、横目でちらりと背後を伺う。
話題の中心にあるルシュアは心あらずといった状態のまま、とぼとぼ石畳の上を歩いていた。
白い肌はほんのり紅潮し、足取りも不安定で、傍から見ると熱病にかかった病人のようだ。
黙りこむベルナットに代わって、シャムはにやけた笑みを浮かべた。
「なんだ。二人ともあれから、別々のベッドで寝ちまったのか？てっきり行きつくとこまで行っちまうかと思ったんだがなぁ。ベルナット、据え膳食わぬは男の恥だぜ？」
「……シャム」
たしなめるような声を上げるベルナットの顔には、内心の複雑な感情が浮き出ていた。
こと恋愛方面に関しては朴念仁といっていいベルナットだが、流石にルシュアが自分に対して単なる好意以上の感情を持ち始め、それを持て余しているということくらいは分かる。

ただ、彼にとってルシュアは異性である前に、かけがえのない友であり、信頼出来る仲間なのだ。

おまけにベルナットは幼い頃に両親を失い、その後すぐに男だらけの剣闘士養成所に放り込まれたものだから、そもそも愛やら恋やらという感情がよく分からない。

ルシュアのことは大切だ。それは間違いない。しかし、それが友人としての友情なのか、異性としての恋情なのかが、ベルナットには判別できなかった。

「サカキ……僕はルシュアをどう思ってるんだろう」

「知るか」

悩める青年に対して返って来たのは極寒の吹雪である。隣で様子を伺っていたシャムは、あまりに酷薄な対応につい吹き出してしまった。

そこでようやくこそこそ話をしている三人に気付いたのか、ルシュアは不思議そうに目をしばたかせ、

「三人ともなにを話しているんだ？」

「いやいや、別になんでもないぜ。それよりケットシーさんが待っているのはこの先だ。一応、武器の類はここで置いて行って貰おうか」

シャムは通路の上へと続く階段の前で足を止めた。

階段の奥には四角く切り取られた青い空が見え、吹き込む風に混じってかすかに歓声らしきものが聞こえた。同時に、甲高く鳴り響く剣戟の音も。

「この向こうは観客席か」

「まぁね。といってもケットシーさんの専用だけど」

蓮から軍刀を、ベルナットから長剣をそれぞれ預かったシャムに率いられ、三人は階段を上り始めた。

果たして、上階に辿り着いた一行の前に広がっていたのは、一角を丸々壁で仕切られた客席と、闘技場の舞台の上につき出したバルコニーだ。

客席といっても平らな石畳には座れるような場所がなく、警護の者と思しき皮の軽鎧を纏った人足も、長槍を杖代わりに立ちっぱなしの状態だった。

炎天下の元、汗を流す衛兵の数は二十あり、それぞれ階段からバルコニーまでの道の両脇を固めている。

一方、闘技場の舞台に半ばつきでた形のバルコニーには、赤茶けた毛織りの絨毯が敷かれ、日を遮るビロードの幕が張られ、象牙細工の施された長椅子が置かれ、皮張りの団扇を持った奴隷まで控えていた。

ただ、肝心の主はといえばバルコニーの欄干に手をひっかけ、上半身から地面に転げ落ちそうなくらい宙に身を乗り出していた。

「よしっ！　そこだ！　いけっいけっ！　……あっ！　いかん！　ダメッ！」

妙に甲高い声が漏れる度、だぶついたズボンからこぼれる黒い尻尾がゆらゆら左右に揺れる。

蓮は闘技場の舞台へと視線をやった。丁度そこでは二人の剣闘士が激しく剣を打ち合わせているところだった。

逞しいがたいを持つ一方が、ややひ弱そうに見える一方に猛然と闘士剣（グラディウス）を振り下ろす。

だが、細身の剣闘士は手に持った円形の盾でその一撃を逸らすと、片手に携えた刃をぴたりと相手の喉元に押し当てた。

わっと観客席から歓声が上がり、同時に、バルコニーで試合に食いついていた影が膝から地面に崩れ落ちる。

「うにゃあああぁぁぁぁっ……！　ま、またウチの剣闘士が白犬商会の連中に負けてしまったのだぁ！」

地団太を踏みつつ立ち上がったのは、臙脂色のジャケットを身に纏った巨大な黒猫である。

背丈は長身の蓮とほぼ同じだが、横幅が人間の三倍近くあり、突き出た腹が上着のボタンをみしみしと軋ませている。体全体が丸みを帯びているせいで、遠目からではだるまのように見えなくもない。

頭に巻いた紫色のターバンから飛びだしているのは、三角形の猫耳だ。顔立ちは不細工ながらも愛嬌があり、首から胸元にかけて涎かけのように白い毛が生えていた。

（……こいつが）

蓮は一目見ただけで、その人物が誰だか分かった。

『大王猫の一族』の族長ケットシー。貿易都市プリマスを支配する商人たちの王である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4299v/

人外魔境戦記譚

2011年11月6日04時11分発行